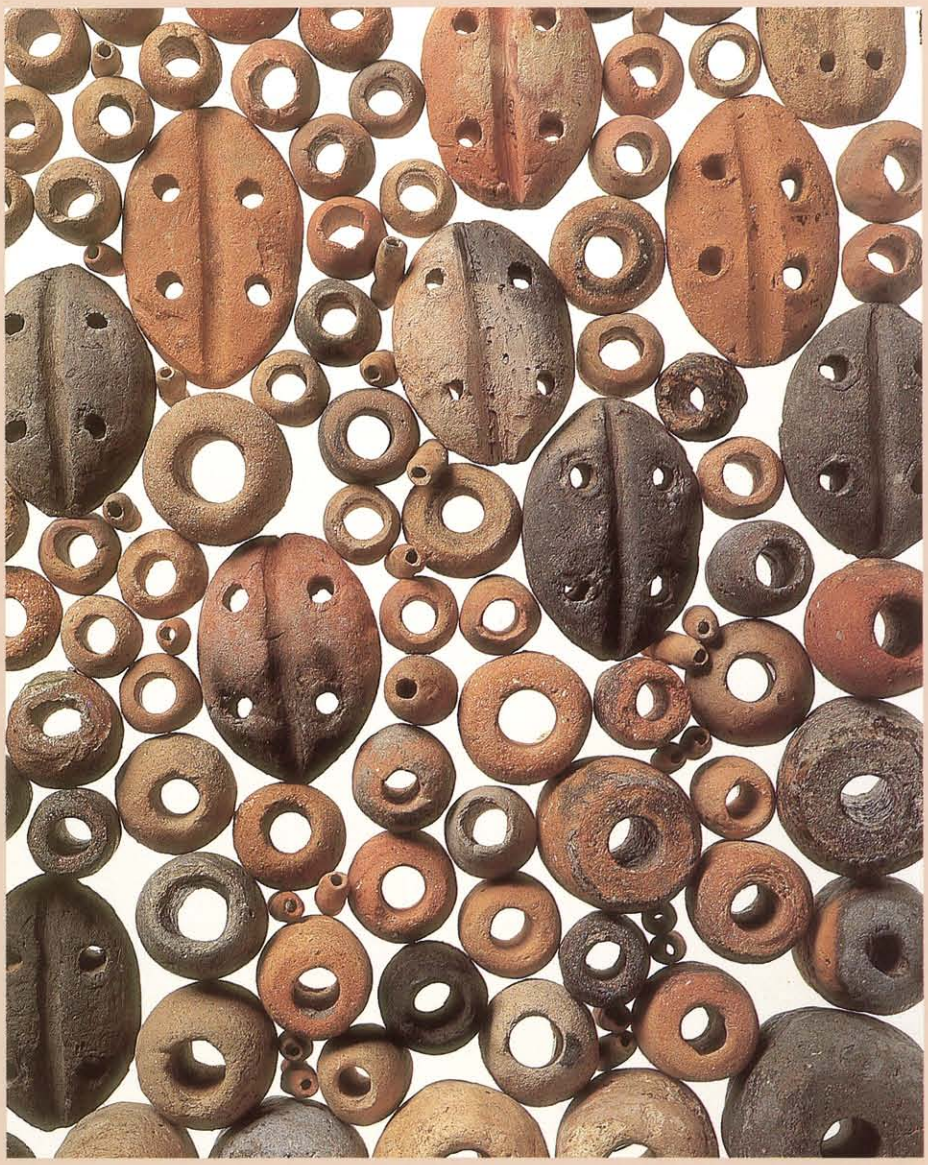
平成13年度

神戸市埋蔵文化財年報



2004

神戸市教育委員会

平成13年度

神戸市埋蔵文化財年報

2004

神戸市教育委員会

fig. 1　白水瓢塚古墳　第９次調査（西区伊川谷町）

古墳時代前期の前方後円墳の前方部墳項部の埋葬施設の調査を実施している。（本文 109頁）

fig. 2　端谷城　第１次調査（西区櫨谷町）

室町時代の鬼瓦が、西の壇と呼ばれる曲輪より出土している。（本文 105頁）

fig. 3　兵庫津遺跡　第26次調査（兵庫区須佐野通）

『元禄兵庫津絵図』にみられる真光寺を巡る濠が確認された。（本文 57頁）

序

阪神・淡路大震災のあの日から９年に及ぶ歳月が過ぎました。山と海が一望できる美しい神戸のまちは復興しつつあります。しかし、内面的な本当の復興はまだまだ歳月が必要と考えられます。

今回報告します平成13年度は、復興事業関連の区画整理事業や住宅供給に伴う発掘調査が引き続き多く行われた年です。調査の結果、大開遺跡、熊内遺跡において弥生時代の環濠が確認され、また兵庫津遺跡においては江戸時代の町屋などが多く見つかりました。

これらの遺跡をはじめ、この概要報告がこの地域に暮らしていた先人の足跡を明らかにすることで、地域の文化財保護や普及の資料として、市民の皆様をはじめ、多くの方々に広くご活用いただければ、幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました方々、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成16年３月
神戸市教育委員会
教育長　西川　和機

例　　言

1．本書は神戸市教育委員会が平成13年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財保護審議委員会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議委員会（史跡・考古資料担当）

壇上　重光　前神戸女子短期大学教授

工楽　善通　ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修所長（平成13年度当時）

和田　晴吾　立命館大学教授

教育委員会事務局

教育長	木村良一
社会教育部長	岩畔法夫
文化財課長	桑原泰豊
社会教育部主幹（指導係長事務取扱）	渡辺伸行
事務担当学芸員	口野博史・西岡誠司 橋詰清孝
埋蔵文化財調査係長	丹治康明
文化財主査	宮本郁雄・千種浩
同（兼務）	丸山潔・菅本宏明
事務担当学芸員	斎木巌
調査担当学芸員	西岡巧次・黒田恭正 東喜代秀・阿部敬生 関野豊　・阿部功 中村大介・中居さやか

（財）神戸市体育協会

会長	笹山幸俊
副会長	木村良一
同（専務理事事務取扱）	鞍本昌男
常務理事	梶井昭武
総務課長	前田豊晴
総務係長	松田保
総務係主査	丸山潔・菅本宏明
事務担当学芸員	川上厚志
調査担当学芸員	谷正俊　・山本雅和 安田滋　・前田佳久 須藤宏　・富山直人 佐伯二郎・山口英正 池田毅　・内藤俊哉 浅谷誠吾・井尻格 石島美和・中谷正 平田朋子

2．本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究部編集（神戸市体育協会発行）の５万分の１神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行の2,500分の１地形図を使用した。

3．本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆し、Ⅰ．については橋詰、Ⅴ．については千種・中村が執筆した。編集は中居が行った。

4．市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。北区・西区以外については新次数による調査次数表記となっている。

5．表紙写真は兵庫津遺跡第24次調査出土の土錘（本文129頁）で、裏表紙写真は兵庫津遺跡第26次調査ＳＤ01出土の仏像（本文57頁）である。表紙・裏表紙写真及び巻頭写真は丸山が撮影した。

目　次

序
例言
目次

Ⅰ．平成13年度　事業の概要 …… 1
　平成13年度　埋蔵文化財発掘調査一覧 …… 8
　平成13年度　神戸市埋蔵文化財調査位置図 …… 12

Ⅱ．平成13年度の復興事業に伴う発掘調査 …… 17
　1．岡本北遺跡　第５次調査 …… 17
　2．住吉宮町遺跡　第35次調査 …… 21
　3．日暮遺跡　第20次調査 …… 27
　4．楠・荒田町遺跡　第30次調査 …… 31
　5．兵庫松本遺跡　第４次調査 …… 34
　6．大開遺跡　第10次調査 …… 47
　7．兵庫津遺跡　第25次調査 …… 53
　8．兵庫津遺跡　第26次調査 …… 57
　9．上沢遺跡　第45次調査 …… 61
　10．御蔵遺跡　第49次調査 …… 63
　11．水笠遺跡　第16次調査 …… 65
　12．松野遺跡　第27次調査 …… 67
　13．松野遺跡　第28次調査 …… 69
　14．松野遺跡　第32次調査 …… 75
　15．二葉町遺跡　第15次調査 …… 77
　16．戎町遺跡　第34次調査 …… 85
　17．戎町遺跡　第35次調査 …… 87
　18．行幸町遺跡　第２次調査 …… 92
　19．舞子古墳群　第18次調査 …… 99
　20．端谷城　第１次調査 …… 105
　21．白水瓢塚古墳　第９次調査 …… 109

Ⅲ．平成13年度の通常事業に伴う発掘調査 …… 113
　1．西岡本遺跡　第４次調査 …… 113
　2．住吉宮町遺跡　第36次調査 …… 115
　3．郡家遺跡　第70次調査 …… 116
　4．熊内遺跡　第３次調査 …… 119

5．雲井遺跡　第13次調査 …… 121
6．大開遺跡　第９次調査 …… 123
7．兵庫津遺跡　第24次調査 …… 129
8．オキダ古墳群　第２次調査 …… 135
9．五番町遺跡　第11次調査 …… 137
10．戎町遺跡　第33次調査 …… 141
11．白水瓢塚古墳　第８次調査 …… 145
12．高津橋・岡遺跡　第７次調査 …… 149
13．今池尻遺跡　第３次調査 …… 153
14．新方遺跡　第43次調査 …… 154

Ⅳ．平成13年度の大規模試掘調査 …… 157

Ⅴ．平成13年度の保存科学調査・作業の概要 …… 161

挿図目次

fig. 1　白水瓢塚古墳第９次調査［写真］…… 巻頭
fig. 2　端谷城第１次調査［写真］…… 巻頭
fig. 3　兵庫津遺跡第26次調査［写真］…… 巻頭
fig. 4　企画展『古代のメインロード』展示風景［写真］… 2
fig. 5　出張考古学講座［写真］…… 2
fig. 6　こどもたちの考古学講座［写真］…… 3
fig. 7　こどもたちの考古学講座［写真］…… 3
fig. 8　調査地位置図 1:2,500 …… 17
fig. 9　第１遺構面平面・断面図 …… 18
fig. 10　第１遺構面全景［写真］…… 19
fig. 11　ＳＧ01［写真］…… 19
fig. 12　ＳＧ01出土遺物 …… 20
fig. 13　調査地位置図 1:2,500 …… 21
fig. 14　１号墳平面・立面図 …… 22
fig. 15　１号墳埴輪列平面・立面図 …… 23
fig. 16　１号墳埴輪列［写真］…… 23
fig. 17　出土遺物 …… 25
fig. 18　調査区全景［写真］…… 26
fig. 19　調査地位置図 1:2,500 …… 27
fig. 20　第１遺構面平面図 …… 28
fig. 21　第１遺構面全景［写真］…… 29
fig. 22　第２遺構面平面図 …… 30
fig. 23　調査地位置図 1:2,500 …… 31
fig. 24　遺構平面・断面図 …… 32
fig. 25　ＳＢ01 …… 33
fig. 26　調査地位置図 1:2,500 …… 34
fig. 27　第4-1次第３遺構面平面図 …… 35
fig. 28　第4-2次第２遺構面平面図 …… 36
fig. 29　ＳＢ102［写真］…… 38
fig. 30　第4-3次第１遺構面平面図 …… 38
fig. 31　第4-5次遺構平面図 …… 40
fig. 32　第4-6次遺構平面図 …… 41
fig. 33　第4-7次遺構平面図 …… 42
fig. 34　第4-8次Ｉ区遺構平面図 …… 43
fig. 35　第4-9次遺構平面図 …… 45
fig. 36　調査地位置図 1:2,500 …… 47
fig. 37　調査区西壁土層断面図 …… 48
fig. 38　第２遺構面平面図 …… 49
fig. 39　第３遺構面平面図 …… 49
fig. 40　第３遺構面全景［写真］…… 50

fig. 41　ＳＫ04 …… 51
fig. 42　ＳＫ16・ＳＸ01 …… 51
fig. 43　調査地位置図 1:2,500 …… 53
fig. 44　遺構平面図 …… 54
fig. 45　第４遺構面全景［写真］ …… 55
fig. 46　第９遺構面全景［写真］ …… 55
fig. 47　調査地位置図 1:2,500 …… 57
fig. 48　第１遺構面平面図 …… 58
fig. 49　ＳＤ01［写真］ …… 59
fig. 50　第２遺構面平面図 …… 60
fig. 51　調査地位置図 1:2,500 …… 61
fig. 52　遺構平面図 …… 62
fig. 53　調査地位置図 1:2,500 …… 63
fig. 54　ＳＸ101［写真］ …… 64
fig. 55　遺構平面図 …… 64
fig. 56　調査地位置図 1:2,500 …… 65
fig. 57　遺構平面図 …… 66
fig. 58　調査区北壁土層断面柱状図 …… 66
fig. 59　ピット群［写真］ …… 66
fig. 60　調査地位置図 1:2,500 …… 67
fig. 61　調査区西壁土層断面図 …… 67
fig. 62　遺構平面図 …… 68
fig. 63　出土遺物 …… 68
fig. 64　調査地位置図 1:2,500 …… 69
fig. 65　第28-2次全景［写真］ …… 70
fig. 66　第28-3次第２遺構面平面図 …… 70
fig. 67　第28-3次出土遺物 …… 71
fig. 68　第28-4次第２遺構面平面図 …… 72
fig. 69　第28-4次第２遺構面［写真］ …… 72
fig. 70　第28-4次出土遺物 …… 73
fig. 71　調査地位置図 1:2,500 …… 75
fig. 72　第32-2次遺構平面図 …… 76
fig. 73　調査地位置図 1:2,500 …… 77
fig. 74　第15-1次遺構平面図 …… 78
fig. 75　ＳＥ01 …… 79
fig. 76　ＳＥ01［写真］ …… 79
fig. 77　第15-2次第１遺構面平面図 …… 80
fig. 78　第15-2次第１遺構面全景［写真］ …… 81
fig. 79　調査地位置図 1:2,500 …… 85
fig. 80　遺構平面図 …… 86
fig. 81　調査地位置図 1:2,500 …… 87
fig. 82　第35-1次遺構平面図 …… 88
fig. 83　第35-2次遺構平面図 …… 89
fig. 84　第35-8次遺構平面図 …… 90
fig. 85　調査地位置図 1:2,500 …… 92
fig. 86　第2-1次遺構平面図 …… 92
fig. 87　第2-1次全景［写真］ …… 93
fig. 88　ＳＤ12［写真］ …… 93
fig. 89　ＳＤ12断面図 …… 94
fig. 90　第2-2次遺構平面図 …… 96
fig. 91　調査地位置図 1:2,500 …… 99
fig. 92　調査区配置図 …… 100
fig. 93　8 tr.遺構平面図 …… 101
fig. 94　8 tr.玄室全景［写真］ …… 102
fig. 95　調査地位置図 1:2,500 …… 105
fig. 96　遺構平面図 …… 106
fig. 97　二の丸全景［写真］ …… 106
fig. 98　塀基底［写真］ …… 106
fig. 99　調査地位置図 1:2,500 …… 109
fig.100　調査区配置図 …… 110
fig.101　前方部墳頂部埋葬施設［写真］ …… 111
fig.102　北側くびれ部［写真］ …… 112
fig.103　前方部北側端［写真］ …… 112
fig.104　調査地位置図 1:2,500 …… 113
fig.105　ＳＧ01　１期 …… 114
fig.106　調査区全景［写真］ …… 114
fig.107　ＳＧ01　２期［写真］ …… 114
fig.108　調査地位置図 1:2,500 …… 115
fig.109　竪穴住居［写真］ …… 115
fig.110　調査地位置図 1:2,500 …… 116
fig.111　調査区西壁土層断面図 …… 117
fig.112　遺構平面図 …… 117
fig.113　第１・２遺構面全景［写真］ …… 118
fig.114　水田検出状況［写真］ …… 118
fig.115　調査地位置図 1:2,500 …… 119
fig.116　第１遺構面全景［写真］ …… 120

fig.117　第２遺構面全景［写真］ …… 120
fig.118　ＳＤ01［写真］ …… 120
fig.119　ＳＤ05［写真］ …… 120
fig.120　調査地位置図 1:2,500 …… 121
fig.121　遺構平面図 …… 122
fig.122　調査区全景［写真］ …… 122
fig.123　ＳＤ03［写真］ …… 122
fig.124　調査地位置図 1:2,500 …… 123
fig.125　第１遺構面平面図 …… 124
fig.126　ＳＴ101［写真］ …… 125
fig.127　第２遺構面全景［写真］ …… 126
fig.128　第３遺構面平面図 …… 127
fig.129　調査地位置図 1:2,500 …… 129
fig.130　遺構平面図 …… 129
fig.131　建物201出土遺物 …… 130
fig.132　第３遺構面平面図 …… 131
fig.133　第４遺構面全景［写真］ …… 131
fig.134　第５遺構面平面図 …… 132
fig.135　第５遺構面出土遺物 …… 133
fig.136　第６遺構面平面図 …… 133
fig.137　第６遺構面全景［写真］ …… 133
fig.138　第６遺構面全景［写真］ …… 133
fig.139　第９遺構面出土遺物 …… 134
fig.140　調査地位置図 1:2,500 …… 135
fig.141　遺構平面図 …… 136
fig.142　調査地位置図 1:2,500 …… 137
fig.143　第１遺構面全景［写真］ …… 138
fig.144　第１遺構面平面図 …… 138
fig.145　遺構平面図 …… 139
fig.146　調査地位置図 1:2,500 …… 141
fig.147　遺構平面図 …… 142
fig.148　ＳＫ01［写真］ …… 143
fig.149　ＳＫ01 …… 143
fig.150　調査地位置図 1:2,500 …… 145
fig.151　遺構平面図 …… 146
fig.152　８号円筒棺 …… 147
fig.153　調査区全景［写真］ …… 148
fig.154　８号円筒棺［写真］ …… 148
fig.155　調査地位置図 1:2,500 …… 149
fig.156　遺構平面図 …… 150
fig.157　２区全景［写真］ …… 150
fig.158　１区全景［写真］ …… 150
fig.159　３区溝［写真］ …… 151
fig.160　３区溝 …… 151
fig.161　調査区全景［写真］ …… 152
fig.162　３区溝出土遺物 …… 152
fig.163　調査地位置図 1:2,500 …… 153
fig.164　第１遺構面全景［写真］ …… 153
fig.165　第２遺構面全景［写真］ …… 153
fig.166　調査地位置図 1:2,500 …… 154
fig.167　第２遺構面全景［写真］ …… 155
fig.168　遺構平面図 …… 155
fig.169　ＳＰ121平面・立面図 …… 156
fig.170　ＳＤ201［写真］ …… 156
fig.171　野瀬北地区試掘地域全体図 1:25,000 …… 158
fig.172　野瀬北地区試掘調査地点 1:10,000 …… 159
fig.173　寺谷地区試掘地域全体図 1:25,000 …… 160
fig.174　寺谷地区試掘調査地点 1:5,000 …… 160
fig.175　熊内遺跡出土鉄鏃［写真］ …… 161
fig.176　同左エックス線透過像
（70kVp, 3 mA,40sec）［写真］ …… 161
fig.177　クリーニング作業［写真］ …… 162
fig.178　クリーニング後［写真］ …… 162
fig.179　矢柄木質残存状況マクロ写真（２倍）［写真］ …… 162
fig.180　二葉町遺跡出土漆器椀［写真］ …… 163
fig.181　ガーゼにて養生［写真］ …… 163
fig.182　糖アルコール法処理作業［写真］ …… 163
fig.183　含浸後クリーニング作業［写真］ …… 163
fig.184　行幸町遺跡出土馬歯クリーニング作業［写真］ …… 164
fig.185　発泡ウレタン再梱包準備［写真］ …… 164
fig.186　保管ケース作製［写真］ …… 164
fig.187　完成状況（御蔵遺跡）［写真］ …… 164
fig.188　剥ぎ取り用合成樹脂塗布［写真］ …… 165
fig.189　ガーゼ裏打ち作業［写真］ …… 165
fig.190　剥ぎ取り作業［写真］ …… 165
fig.191　剥ぎ取り後状況［写真］ …… 165

Ⅰ．平成13年度　事業の概要

1．はじめに

平成13年度は阪神・淡路大震災の発生から７年目を迎え、震災復興区画整理事業などの震災復旧事業も軌道に乗り推進されつつある。震災時の埋蔵文化財行政の指針を示した国の「基本方針」の適用期間は平成12年度で終了したが、補助事業の適用対象が旧に復し、復旧・復興事業として被災者である個人及び、中小企業が建設する建物についてはこれまでどおり補助事業として採択している。

平成13年度においても新長田駅北地区や御菅地区、松本地区において街区・街路整備が進み、住宅の建設等にかかる発掘調査も遅滞なく進捗した。また、区画整理事業が遅れていた鷹取第二地区、戎町遺跡に関する調査が開始された。

調査作業が遅滞なく、迅速化が求められる中で、労働安全衛生法などの法令に基づく『埋蔵文化財発掘調査における神戸市安全衛生基準』を制定し、９月より施行した。安全班による定期的なパトロールと指導により安全管理を徹底している。

開発指導の面では、平成11年６月より建築確認の事前届出制度における事前届出書の閲覧により、周知の埋蔵文化財包蔵地内での建築行為に対し、文化財保護法に基づく発掘届書の提出及び土木工事についての指導を徹底してきた。更に、４月より神戸市のホームページ『申請べんり帳』において、埋蔵文化財発掘届出書と試掘調査依頼書についての説明等の情報を配信し、その様式用紙をダウンロードできるようにした。また、『埋蔵文化財の所在の有無について』の様式を定め、開発事業計画の段階で事前に事業者からの相談を受け、依頼に基づき既存の調査データや埋蔵文化財保護にかかる措置、必要な事務手続き等の情報提供を行うことにより、適正かつ円滑な埋蔵文化財保護行政を図るための体制を整えた。

保護・保存の面では、調査によって蓄積された多量の出土品の取扱いについて４月より『神戸市における出土品の取扱い基準』を制定した。これは国の『出土品の取扱いについて』の通知及び兵庫県の『兵庫県における出土品の取扱基準』の施行を受け、神戸市内の出土品の適切な取扱について必要な事項を定めたものである。これとともに、出土品を適正に広く公開し、活用するための『所蔵資料の貸出し基準』を制定した。

また、西区櫨谷町（端谷城址）や北区淡河町（淡河城址）では、地域に存在する文化財を活用した里づくり計画が策定され、住民とボランティア、行政による環境保全などの協働作業をおこなった。文化財課では、城址の確認調査や保存・活用の情報提供を地域住民におこなった。今年度は、端谷城址のニの丸を中心とした確認調査を実施した。今後も地域おこしやまちづくりを目的とした埋蔵文化財保護に力を入れていきたいと考えている。

2．普及啓発活動

〔埋蔵文化財センター〕

出土資料の整理・収蔵・保存・公開の拠点である神戸市埋蔵文化財センターでは、常設展示室のほか収蔵展示室・遺物整理室の一部を公開している。また、企画展示や速報展示などを実施し、発掘調査の成果を公開している。

企画展示

本年度は、春の企画展示として『昔むかしのたべものは？』、夏の企画展示として『古代山陽道沿線物語』の２回の企画展を開催した。『昔むかしのたべものは？』展では、昔

の人たちが何を食べていたのか、それらを手に入れるための道具や技術がどのように変化したのかを遺跡から出土した遺物を中心に紹介した。

『古代のメインロード－古代山陽道沿線物語－』展では、神戸市内の官衙推定遺跡を紹介し、都から大宰府までの山陽道沿線に営まれた遺跡から発見された考古資料を中心に紹介し、古代の交通事情についての展示をおこなった。期間中の７月21日には滋賀県立大学教授高橋美久二氏の講演会『古代の山陽道と芦屋駅屋』を開催し、140名の聴講者があった。

展示会名称	開催期間	入館者数
『昔むかしのたべものは？』	平成13年４月21日～６月３日	9,484名
『古代のメインロード－古代山陽道沿線物語－』	平成13年７月20日～９月２日	2,436名

学校展示　遺跡から出土した資料を子供たちが直接目で見て触れながら、地域の歴史や文化を学ぶことを目的に、社会科教育の一環として平成10年度より市内小学校で展示会を開催している。展示は主に学校区内の埋蔵文化財の展示を行い、学芸員による展示開設も行っている。今年度は３校、５回の展示を実施した。

館外展示　地域の身近な遺跡を紹介し、地域の歴史について理解を深めてもらうため、地域の施設を利用し展示会を開催した。今回は、長田区役所震災資料室において長田区の震災資料とともに、復興事業関連の発掘調査成果について区民対象の展示を行った。

学校展示			
展示会名称	開催期間	開催場所	見学者数
大開遺跡を発掘する	５／７～６／２	兵庫大開小学校	120名
やよいじだいの須磨	６／11～７／13	若宮小学校	70名
会下山小学校のまわりの遺跡	９／20～12／17	会下山小学校	60名
その後の大開遺跡	９／20～12／17	兵庫大開小学校	120名
古墳時代の須磨	10／22～11／22	若宮小学校	70名
館外展示			
展示会名称	開催期間	開催場所	見学者数
長田区の遺跡	11／13～11／16	長田区役所震災資料室	500名

fig. 4　企画展『古代のメインロード』展示風景

fig. 5　出張考古学講座（ドングリクッキーづくり）

考古学講座　『こどもたちの考古学講座』は学校の休日の催しとして、体験学習を通じて、先人の生活や技術を学び、歴史に興味を抱いてもらうという趣旨で、小学校高学年から高校生までを対象に開催した。その内容は、下記の表のとおりである。

こどもたちの考古学講座			
講　座　名	開催日	内　　容	参加者
体験発掘調査	5／26	発掘調査中の丸塚遺跡で実際の発掘調査を体験する。	94名
石包丁をつくろう	7／14	滋賀県産高島石で石包丁などの磨製石器を作る。	92名
勾玉づくりに挑戦	8／4	印材で勾玉などの古代のアクセサリーをつくる。	212名
土器・埴輪をつくろう	8／25	自然乾燥で硬化する粘土で土器や埴輪をつくる。	119名
縄文の葉っぱをさがす	9／22	縄文時代中期の土壌から木葉を見つけ出し、フィルムに封入して、その種類を調べ縄文の森を復元。	20名
縄文クッキーをつくろう	12／11	ドングリ（シイの実）を粉にしてクッキーを焼く。	36名
		合　計	573名
親子で『赤米作りに挑戦しよう』			
講　座　名	開催日	内　　容	参加者
貫頭衣を着て田植えに挑戦	6／9	神出自然教育園の水田において、古代米である赤米を田植えから収穫までを体験する。	60名
がんばって草取りをしよう	7／28		38名
石包丁で収穫に挑戦	10／27		50名
		合　計	148名
体験考古学講座			
講　座　名	開催日	内　　容	参加者
土器・埴輪をつくる（形成）	11／17	粘土で土器を成形し、乾燥させる。	2名
土器・埴輪をつくる（焼成）	12／1	乾燥させた土器を野焼きによって焼成する。	2名
勾玉をつくる	2／23	印材の青田石や寿山石で勾玉をつくる。	20名
		合　計	24名
		考古学講座・総合計	745名

fig. 6　こどもたちの考古学講座（体験発掘調査）

fig. 7　こどもたちの考古学講座（赤米作りに挑戦しよう）

出張考古学講座			
講　座　名	開催日	学　校　名	受講者数
勾玉・貫頭衣づくり	5／7	鶴甲小学校	75名
勾玉づくり	5／9	本山第三小学校	96名
勾玉づくり	5／14	六甲小学校	48名
勾玉・貫頭衣づくり	5／17	桂木小学校	116名
ドングリクッキーづくり	5／22	鵯越小学校	33名
土器づくり	5／24	小部小学校	104名
勾玉づくり	5／29	霞ヶ丘小学校	201名
勾玉・貫頭衣づくり	6／8	福住小学校	55名
勾玉づくり	6／21	垂水小学校	38名
土器づくり	6／29	狩場台小学校	88名
貫頭衣づくり	7／12	本山第二小学校	169名
土器づくり	12／18	太山寺小学校	13名
ドングリクッキーづくり	1／18	太山寺小学校	28名
		合　計	1,064名

〔文化財保護強調週間の催し〕

文化財保護強調週間の催しとして、大歳山遺跡公園において11月３日と４日の２日間『大歳山まつり』を開催した。垂水区と連携し、地域に残る文化財を活用し、日常の中に活かすことを地域の人々と考える試みとして、復元された竪穴住居の内部を公開するとともに、古代人の生活の一部を体験できるような催しを行った。古代人の生活体験では、舞錐による火起こしや杵・臼による米の脱穀、古代米の試食、機織り、古代衣装試着など行った。２日間の参加者は、600人であった。

〔発掘調査現地説明会の開催と報道関係資料提供〕

発掘調査及び出土遺物の整理において重要な発見があった場合、市役所内の市政記者クラブで発表を行っている。また、現地調査期間中であって安全管理上可能であれば現地説明会を開催している。また、要望があれば地域住民対象の説明会も開催している。本年度は、２件の現地説明会を開催した。

遺跡の公開			
遺　跡　名	開　催　日	内　　容	見学者数
住吉宮町遺跡	平成13年５月１・２日	葺石を持つ方墳	270名
熊内遺跡	平成13年７月17日	弥生時代後期の環濠集落	384名
端谷城址	平成14年３月19日	残存状況が良好な城郭址	30名

記者発表と現地説明会				
遺 跡 名	発 表 日	内　　容	現地説明会開催日	見学者数
西求女塚古墳	平成13年５月17日	撥形後方部をした最古級の古墳	平成13年５月17日	450名
兵庫津遺跡	平成13年５月31日	まちかど・ぎゃらりぃのオープン	６月４日より開館	
兵庫津遺跡	平成14年１月11日	真光寺旧境内の発見	平成14年１月11日	35名

〔資料の貸出〕

４月より制定した『所蔵資料の貸出し基準』に基づき平成13年度に各機関に貸し出した資料は、写真22件33点、出土遺物（レプリカ・土層転写資料を含む）４件42点である。

〔刊行物〕

平成12年度の刊行物は以下の９点である。

(1) 平成11年度　神戸市埋蔵文化財年報　平成14年３月　発行　頒価 2,000円
(2) 沢の鶴大石蔵　発掘調査報告書　平成13年11月　発行　頒価 1,000円
(3) 日輪寺遺跡発掘調査報告書　第４次～第７次調査　平成14年１月　発行　頒価 2,500円
(4) 深江北町遺跡第９次埋蔵文化財発掘調査報告書　平成14年３月　発行　頒価 1,600円
(5) 野瀬遺跡　平成14年３月　発行　非売品
(6) 淡河木津遺跡第１次・第２次発掘調査報告書　平成14年３月　発行　非売品
(7) 昔むかしのたべものは　（企画展図録）　平成13年４月　発行　頒価　500円
(8) 古代のメインロード
－古代山陽道沿線物語－　（企画展図録）　平成13年７月　発行　頒価　600円
(9) 神戸市埋蔵文化財分布図　平成14年３月　発行　頒価　800円

３．文化財保護　平成９年度に制定された『神戸市文化財の保護及び文化財等を取り巻く文化環境の保全に関する条例』に基づき、平成13年７月31日に第９回文化財保護審議会が開催され指定文化財・登録文化財・地域文化財の指定・登録・認定について諮問をおこなった。平成14年２月７日の第10回文化財審議会において諮問に対する答申を受けた。この答申に基づき12件の文化財指定、登録、認定をおこなった。そのうち、埋蔵文化財に関係するものとして以下の２件が指定された。

神戸市指定有形文化財（考古資料）

・本山遺跡出土弥生時代前期木製品等　総数２４点
木製品２２点：鍬５点、鍬未製品４点、鋤未製品２点、泥除未製品３点
斧柄３点、斧柄未製品３点、杓子１点、臼未製品１点
編み物２点

・新方遺跡（野手・西方地点）出土人骨　６体

4．開発指導　平成13年度の文化財保護法に基づく届出・通知についての件数は別表のとおりである。平成11年度より開始された『神戸市民の住環境をまもりそだてる条例』に基づく事前届出制度における事前届出書の閲覧により、発掘届の提出及び土木工事についての指導を徹底してきた。以来、届出・通知件数は増加の傾向にあったが、今年度においては前年度比約18%（123件）の減少となった。神戸市内における建築確認申請の申請件数の減少に連動するような減少をみせている。なお、開発行為事前審査各種申請は、19件の減少、試掘調査件数は、34件の減少となっている。

また、昨年度より運用された埋蔵文化財届出事務等に関する地図情報システムに過去の試掘調査や発掘調査のデータや届出・通知等の埋蔵文化財の取扱い状況のデータを増補することにより、届出・通知・各種開発申請に対し迅速かつ正確な回答を行った。

5．調査事業　平成13年度の発掘調査事業は、民間事業関連のすべて・公共事業関連の調査の一部及び補助事業の大部分については教育委員会の直営で実施し、公共事業関連の調査の大部分と補助事業の一部を（財）神戸市体育協会に委託して実施した。

本市では便宜上、阪神・淡路大震災に起因する復旧・復興事業関連調査とそれに起因しない通常事業関連調査を区別し処理している。全体の調査件数及び発掘調査面積は別表のとおりである。平成12年度と比較すると調査件数は、31件（約３割）減少し、調査面積は約４割減少している。

調査面積を個別に見ると、100㎡以下のものが、全体の約４割を占めており、500㎡以下のものが全体の約８割を占めており、前年度とほぼ同じく小規模な発掘調査が主になっている傾向にある。今年度に発掘調査に要した総費用は819百万円である。

復興事業　復興事業に伴う調査は51件で、調査事業の６割を占めている。その内訳は、個人及び中小企業事業者による国庫補助事業は33件で、大企業及び公共の事業者の経費負担による受託事業は18件である。

国庫補助事業は138,685千円で、内訳は事前調査である試掘・確認調査が15,773千円、個人住宅及び中小企業の発掘調査が73,579千円、その他の調査34,998千円、整理・報告書の作成等は14,335千円である。

6．主な調査　平成13年度の主な調査成果を時代順にまとめる。

熊内遺跡では、縄文時代早期前半の竪穴住居が検出された。弥生時代後期の遺構面では、竪穴住居や掘立柱建物を中心とした集落を囲む二重の環濠が確認され、同時期においては西日本では珍しく貴重な資料となった。西求女塚古墳の確認調査は、まちづくりの一環として、古墳公園の整備の要望を受けて実施してきたものであるが、震災復興事業を優先するために調査を一時中断していたが、平成12年度末から再開した。その結果、前方部の形状が古墳出現期の最古級の古墳と同型式の撥形であることが明らかとなった。古墳の墳形、規模、構造などについての資料を得ることができ、国の史跡指定の申請を念頭におく同古墳にとって、古墳整備計画の策定に重要な資料を得ることとなった。兵庫津遺跡では、真光寺の北東角の濠が発見された。濠の北側には道路・河道が発見され『元禄兵庫津絵図』に描かれたとおりに遺構が検出された。同絵図の正確性が立証されたとともに、兵庫津全体の復元に貴重な資料を得た。

文化財保護法に基づく届出・通知，試掘依頼等

No.	内容			件数
1	発見，発掘届・通知			690件
	i	調査のための発掘届（57条第１項）	1件	
		民間事業に伴う発掘届（57－２）	636件	
		通常事業関連	520件	
		復興事業関連	146件	
	ii	公共事業に伴う発掘通知（57－２）	53件	
		通常事業関連	42件	
		復興事業関連	11件	
	iii	発見届・発見通知（57－５・６）	0件	
2	発掘調査の報告（保護法58条２）			71件
3	開発行為事前審査等各種申請			130件
4	試掘調査（依頼件数）			295件
	i	通常事業関連	245件	実施件数
		通常公共関連	56件	268件
		通常民間関連	189件	
	ii	復興事業関連	50件	
		復興公共関連	10件	
		復興民間関連	40件	
5	工事立会			50件

発掘調査，整理作業件数一覧

No.	内容			件数
1	発掘調査（大規模確認調査も含む）			85件
	i	公共事業に伴う発掘調査	28件	
		通常事業関連	10件	
		復興事業関連	18件	
	ii	民間事業に伴う発掘調査	51件	
		通常事業関連	18件	
		復興事業関連	33件	
	iii	圃場整備事業に伴う発掘調査	6件	
2	整理作業（復興調査整理作業を含む）			2件

発掘調査面積（単位：㎡）

	公共事業関連	民間事業関連	計	延べ調査面積
通常事業	6,937	6,924	13,861	24,273
復興事業	11,167	3,177	14,344	29,313
計	18,104	10,101	28,205	53,586

発掘調査面積別件数

調査面積	件数	調査面積	件数
～ 100㎡	35	1,001 ～ 2,000㎡	2
101 ～ 300㎡	32	2,001 ～ 5,000㎡	3
301 ～ 500㎡	4	5,001㎡以上	0
501 ～ 1,000㎡	9	合計	85

平成13年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（1）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延掘削面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	岡本北遺跡第4次調査	東灘区西岡本4丁目	神戸市教育委員会	中谷　正	36㎡ 36㎡	13.04.18～13.04.20	弥生時代後期の竪穴住居、土坑、ピット 古墳時代の土坑 中世の土坑、ピット	個人住宅 〔国庫補助事業〕
2	岡本北遺跡第5次調査	東灘区岡本9丁目	神戸市教育委員会	須藤　宏	60㎡ 90㎡	13.06.13～13.07.19	弥生時代終末期の柱穴、土器溜まり 平安時代末～鎌倉時代の溜め池状遺構とその堤 中世の石垣、柱穴、土坑、牛蹄跡	個人住宅 〔国庫補助事業〕
3	住吉宮町遺跡第35次調査	東灘区住吉本町1丁目	神戸市教育委員会	阿部　敬生	170㎡ 190㎡	13.04.02～13.05.21 前年度から継続	古墳1基（葺石・埴輪列） 平安時代～中世頃の土坑、ピット	個人住宅 〔国庫補助事業〕
4	郡家遺跡第71次調査	東灘区御影町御影1335-2,1361-8,1361-9	神戸市教育委員会	東　喜代秀	90㎡ 90㎡	14.03.18～14.03.26	中世の段落ち、須恵器甕、土師器鍋、羽釜	接骨院兼個人住宅 〔国庫補助事業〕
5	都賀遺跡第18次調査	灘区神前町4丁目	神戸市教育委員会	阿部　功	57.8㎡ 57.8㎡	13.05.14～13.05.21	弥生時代の遺物包含層	個人住宅 〔国庫補助事業〕
6	西求女塚古墳第12次調査	神戸市灘区都通3丁目	神戸市教育委員会	内藤　俊哉	280㎡ 280㎡	13.04.01～13.07.13 前年度から継続	前方部墳丘裾部、段築、テラス部 （平成15年度報告書刊行予定）	範囲確認 〔国庫補助事業〕
7	日暮遺跡第20次調査	中央区東雲通1丁目	神戸市教育委員会	西岡　巧次	121㎡ 242㎡	13.08.27～13.10.11	弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴住居 鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物	共同住宅 〔国庫補助事業〕
8	祇園遺跡第10次調査	兵庫区上祇園町60－3	神戸市教育委員会	関野　豊	40㎡ 80㎡	14.01.22～14.02.01	弥生時代後期のピット 中世のピット	店舗・工場付住宅 〔国庫補助事業〕
9	楠・荒田町遺跡第30次調査	兵庫区荒田町3丁目	神戸市教育委員会	阿部　功	86㎡ 86㎡	13.09.04～13.09.28	弥生時代中期のピット 6世紀前半の竪穴住居2棟（内1棟はカマド付）、掘立柱建物1棟、土坑、ピット	個人住宅 〔国庫補助事業〕
10	兵庫松本遺跡第4次調査	兵庫区松本通2丁目	(財)神戸市体育協会	山本・内藤・山口・佐伯・中谷	925㎡ 1,575㎡	13.05.16～14.03.13	弥生時代前期の土坑 弥生時代末～古墳時代前期初頭の竪穴住居、掘立柱建物 平安時代後期の柵列	区画整理事業
11	兵庫松本遺跡第5次調査	兵庫区松本通2丁目	(財)神戸市体育協会	東　・中谷	22㎡ 22㎡	13.09.10～13.09.13	弥生時代前期の落ち込み	個人住宅 〔国庫補助事業〕
12	兵庫松本遺跡第6次調査	兵庫区松本通2丁目	(財)神戸市体育協会	東　喜代秀	46㎡ 46㎡	13.09.17～13.09.20	弥生時代前期の落ち込み	個人住宅 〔国庫補助事業〕
13	兵庫松本遺跡第7次調査	兵庫区松本通2丁目	(財)神戸市体育協会	中谷　正	35㎡ 35㎡	14.01.07～14.01.17	弥生時代末～古墳時代前期初頭の掘立柱建物、土坑、溝	個人住宅 〔国庫補助事業〕
14	兵庫松本遺跡第8次調査	兵庫区松本通2丁目	(財)神戸市体育協会	山口　英正	80㎡ 240㎡	14.02.20～14.03.13	弥生時代前期後半の土坑 弥生時代末～古墳時代前期初頭の土坑、溝 平安時代半の土坑、溝	個人住宅 〔国庫補助事業〕
15	兵庫松本遺跡第9次調査	兵庫区松本通2丁目	(財)神戸市体育協会	山口　英正	40㎡ 40㎡	14.03.12～14.03.25	弥生時代前期の溝 弥生時代後期の竪穴住居、土坑、ピット	個人住宅 〔国庫補助事業〕
16	兵庫松本遺跡第10次調査	兵庫区松本通2丁目	(財)神戸市体育協会	内藤　俊哉	70㎡ 70㎡	14.03.12～14.03.26	弥生時代前期の土坑、ピット、流路 古墳時代の溝、ピット、土器溜り	事務所建設 〔国庫補助事業〕
17	大開遺跡第10次調査	兵庫区大開通3丁目	神戸市教育委員会	須藤　宏	170㎡ 680㎡	13.08.02～13.10.09	弥生時代前期の環濠、土坑 平安時代後期～室町時代の掘立柱建物、土坑	共同住宅 〔国庫補助事業〕
18	兵庫津遺跡第25次調査	兵庫区兵庫町2丁目	神戸市教育委員会	東　喜代秀	175㎡ 1,575㎡	13.11.12～14.02.04	17世紀後半～19世紀の遺構面を9面検出 建物、井戸、溝	寺院再建 〔国庫補助事業〕
19	兵庫津遺跡第26次調査	兵庫区須佐野通1丁目	神戸市教育委員会	阿部　敬生 阿部　功	745㎡ 1,490㎡	13.11.27～14.02.04	近世後期、中世の遺構面を2面検出 『元禄兵庫津絵図』記載の真光寺を巡る濠	共同住宅
20	上沢遺跡第45次調査	兵庫区上沢通8丁目	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	110㎡ 330㎡	13.07.24～13.08.31	弥生時代前期の土坑、溝 弥生時代後期から奈良・平安時代土坑、溝、ピット 中世の落ち込み	個人住宅兼事務所兼共同住宅 〔国庫補助事業〕
21	御蔵遺跡第44次調査	長田区御蔵通6丁目	(財)神戸市体育協会	富山　直人 井尻　格	276㎡ 384㎡	13.05.16～13.12.21	奈良・平安時代の溝、ピット、井戸 弥生時代末～古墳時代前期初頭の水田	区画整理事業
22	御蔵遺跡第46次調査	長田区御蔵通5丁目	(財)神戸市体育協会	富山　直人	50㎡ 200㎡	13.06.11～13.06.20	弥生時代末～古墳時代前期初頭以後の水田	個人住宅 〔国庫補助事業〕

平成13年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（2）

23	御蔵遺跡第47次調査	長田区御蔵通5丁目	神戸市教育委員会	井尻　格	26㎡ 26㎡	13.10.18～13.10.23	弥生時代後期～古墳時代前期初頭の水田	公園整備
24	御蔵遺跡第48次調査	長田区御蔵通6丁目	(財)神戸市体育協会	井尻　格	40㎡ 40㎡	13.11.27～13.12.07	弥生時代後期～古墳時代前期初頭の落ち込み	個人住宅 〔国庫補助事業〕
25	御蔵遺跡第49次調査	長田区御蔵通5丁目	(財)神戸市体育協会	内藤　俊哉	210㎡ 210㎡	13.12.05～14.01.08	弥生時代末～古墳時代初頭の土器溜まり 奈良・平安時代の掘立柱建物	事務所 〔国庫補助事業〕
26	水笠遺跡16次調査	長田区水笠通3丁目	(財)神戸市体育協会	池田　毅	235㎡ 675㎡	13.06.28～13.12.05	平安時代の溝	区画整理事業
27	水笠遺跡17次調査	長田区水笠通3丁目	(財)神戸市体育協会	池田　毅	50㎡ 100㎡	13.07.23～13.08.01	縄文時代晩期～弥生時代前期の流路 （平成14年度報告書刊行済）	個人住宅 〔国庫補助事業〕
28	水笠遺跡18次調査	長田区水笠通3丁目	(財)神戸市体育協会	池田　毅	50㎡ 50㎡	13.08.02～13.08.09	時期不明のピット （平成14年度報告書刊行済）	個人住宅 〔国庫補助事業〕
29	水笠遺跡19次調査	長田区水笠通3丁目	(財)神戸市体育協会	山口　英正	160㎡ 160㎡	13.10.30～13.11.08	弥生時代後期の可能性がある溝 （平成14年度報告書刊行済）	個人住宅 〔国庫補助事業〕
30	水笠遺跡20次調査	長田区水笠通3丁目	(財)神戸市体育協会	山口　英正	40㎡ 40㎡	13.11.08～13.11.12	時期不明のピット （平成14年度報告書刊行済）	個人住宅 〔国庫補助事業〕
31	水笠遺跡21次調査	長田区水笠通3丁目	(財)神戸市体育協会	山口　英正	100㎡ 100㎡	13.11.15～13.11.22	時期不明の溝 （平成14年度報告書刊行済）	個人住宅 〔国庫補助事業〕
32	松野遺跡第26次調査	長田区若松町7丁目	神戸市教育委員会	須藤　宏	200㎡ 400㎡	13.04.09～13.04.27	平安時代の井戸、落ち込み	区画整理事業
33	松野遺跡第27次調査	長田区日吉町3丁目	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	46㎡ 46㎡	13.04.09～13.04.13	古墳時代中期末～後期前半の溝、ピット、落ち込み	社屋建築 〔国庫補助事業〕
34	松野遺跡第28次調査	長田区松野通4丁目	神戸市教育委員会	井尻・池田 須藤	500㎡ 920㎡	13.06.22～14.01.29	縄文時代後期～晩期の流路 古墳時代前期の溝 古墳時代後期の竪穴住居	区画整理事業
35	松野遺跡第29次調査	長田区松野通4丁目	(財)神戸市体育協会	井尻　格	60㎡ 60㎡	13.06.22～13.07.02	弥生時代前期の土坑 （平成14年度報告書刊行済）	個人住宅 〔国庫補助事業〕
36	松野遺跡第30次調査	長田区松野通4丁目	(財)神戸市体育協会	井尻　格	60㎡ 120㎡	13.08.20～13.08.29	弥生時代のピット （平成14年度報告書刊行済）	個人住宅 〔国庫補助事業〕
37	松野遺跡第31次調査	長田区松野通4丁目	(財)神戸市体育協会	須藤　宏	40㎡ 120㎡	13.12.04～13.12.27	時期不明の掘立柱建物、柵列 （平成14年度報告書刊行済）	個人住宅 〔国庫補助事業〕
38	松野遺跡第32次調査	長田区常盤町1丁目	(財)神戸市体育協会	井尻　格	205㎡ 205㎡	14.01.22～14.02.26	弥生時代中期～後期の溝	区画整理事業
39	二葉町遺跡第15次調査	長田区久保町5丁目	(財)神戸市体育協会	池田　毅 石島　三和	1,030㎡ 1,530㎡	13.04.09～13.05.31 13.07.26～13.09.03	平安時代後半～鎌倉時代の掘立柱建物、溝、井戸、木棺墓	新長田駅南再開発
40	戎町遺跡第34次調査	須磨区大田町2丁目	神戸市教育委員会	阿部　功 井尻　格	45㎡ 45㎡	13.07.03～13.07.23	弥生時代中期の竪穴住居	社屋再建 〔国庫補助事業〕
41	戎町遺跡第35次調査	須磨区寺田町1・2丁目	神戸市教育委員会	東　・池田 山口	682㎡ 682㎡	13.08.09～14.01.17	弥生時代中期の竪穴住居、土坑、溝 古墳時代後期の竪穴住居	区画整理事業
42	戎町遺跡第36次調査	須磨区寺田町2丁目	(財)神戸市体育協会	井尻　格	18㎡ 18㎡	13.11.09～13.11.15	弥生時代中期の溝	個人住宅 〔国庫補助事業〕
43	行幸町遺跡第2次調査	須磨区行幸町3丁目	(財)神戸市体育協会	谷　正俊 佐伯　二郎	1,289㎡ 1,289㎡	13.06.04～13.07.10 13.10.11～14.02.21	飛鳥～奈良時代の大溝 中世の畠、井戸	道路建設 〔須磨中央幹線〕
44	舞子古墳群第18次調査	垂水区舞子坂2丁目	神戸市教育委員会	関野　豊	140㎡ 140㎡	14.02.18～14.03.20	墳丘裾部、前方後円墳と確認	確認調査 〔国庫補助事業〕
45	舞子古墳群第19次調査	垂水区舞子陵	神戸市教育委員会	東　喜代秀 阿部　敬生	15㎡ 15㎡	14.03.12～14.03.26	転落石の撤去、側壁の保護	〔国庫補助事業〕

平成13年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（3）

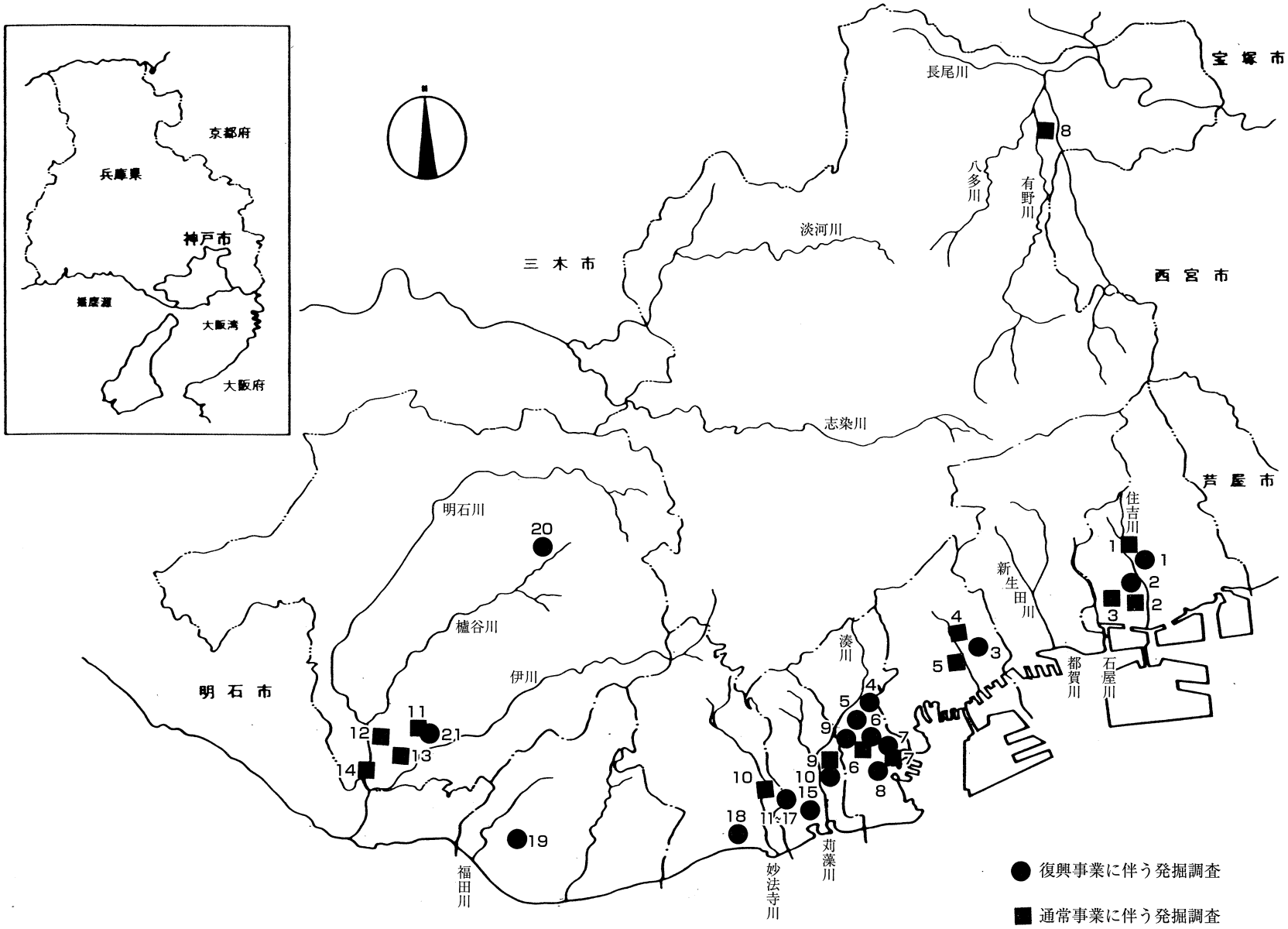
46	端谷城第1次調査	西区櫨谷町寺谷字北谷	神戸市教育委員会	西岡　巧次	250㎡ 250㎡	14.02.19～14.03.27	二の丸の掘立柱建物、曲輪の礎石建物	[国庫補助事業]
47	白水瓢塚古墳第7次調査	西区伊川谷町潤和字シンド山	神戸市教育委員会	山本　雅和	265㎡ 265㎡	13.08.21～13.08.30	埴輪円筒棺4基	確認調査 [国庫補助事業]
48	白水瓢塚古墳第9次調査	西区伊川谷町潤和字シンド山	神戸市教育委員会	安田　滋 浅谷　誠吾	279㎡ 279㎡	14.02.04～14.03.31	前方部埋葬施設（割竹形木棺）、後円部埋葬施設残存状況確認	[国庫補助事業]
49	丸塚遺跡第8次調査	西区丸塚1丁目	神戸市教育委員会	西岡　巧次	400㎡ 400㎡	13.05.22～13.07.19	弥生時代後期後半～古墳時代前期・中期、中世の掘立柱建物	共同住宅 〔国庫補助事業〕

埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）（1）

No.	遺　跡　名	所 在 地	調 査 主 体	調査担当者	調査面積 延掘削面積	調 査 期 間	調　査　内　容	調 査 原 因
1	森北町遺跡第19次調査	東灘区森北町4丁目	神戸市教育委員会	関野　豊	17㎡ 34㎡	13.12.12～13.12.25	弥生時代後期の遺物包含層、溝 鎌倉時代以前のピット	個人住宅 [国庫補助事業]
2	本山遺跡第36次調査	東灘区本山中町3丁目	神戸市教育委員会	阿部　敬生	35㎡ 35㎡	13.10.16～13.10.22	弥生時代中期の遺物包含層、ピット	看板設置
3	西岡本遺跡第4次調査	東灘区西岡本5丁目	(財)神戸市体育協会	富山　直人	216.5㎡ 216.5㎡	13.07.23～13.09.04	11世紀後半の苑池、ピット	上下水道施設建設
4	住吉宮町遺跡第36次調査	東灘区住吉宮町3丁目	神戸市教育委員会	東　喜代秀 阿部　功	150㎡ 150㎡	13.06.15～13.06.21	6世紀の竪穴住居1棟、土坑、ピット	共同住宅建設
5	郡家遺跡第70次調査	東灘区御影中町1丁目	神戸市教育委員会	阿部　功	254㎡ 474㎡	13.10.03～13.11.01 14.01.16～13.01.17	古墳時代の掘立柱建物、水田 奈良・平安時代の掘立柱建物	共同住宅建設
6	熊内遺跡第3次調査	中央区熊内橋通7丁目	(財)神戸市体育協会	安田　滋 浅谷　誠吾	7,000㎡ 8,250㎡	13.04.01～13.11.29 前年度から継続	縄文時代早期の土抗　弥生時代後期の竪穴住居、掘立柱建物、環濠　古墳時代前期の竪穴住居　古墳時代後期の木棺墓、土坑墓　（平成14年度報告書刊行済）	旧布引車庫跡地整備
7	雲井遺跡第12次調査	中央区琴ノ緒町3丁目	神戸市教育委員会	富山　直人	172㎡ 172㎡	13.04.01～13.04.11	弥生時代中期の竪穴住居 古墳時代後期の竪穴住居	個人住宅建設 [国庫補助事業]
8	雲井遺跡第13次調査	中央区雲井通2丁目	神戸市教育委員会	阿部　功	145㎡ 145㎡	14.02.26～14.03.18	古墳時代後期の溝	共同住宅建設
9	旧三ノ宮構内遺跡第6次調査	中央区北長狭通5丁目	(財)神戸市体育協会	阿部　敬生	110㎡ 110㎡	14.01.08～14.01.22	時期不明のピット、落ち込み	電線共同溝布設
10	祇園遺跡第9次調査	兵庫区上祇園町	神戸市教育委員会	阿部　功	19㎡ 19㎡	13.06.26～13.06.27	遺物包含層	道路建設 [神戸三田線]
11	大開遺跡第9次調査	兵庫区塚本通3丁目	神戸市教育委員会	関野　豊	980㎡ 2,940㎡	13.07.09～13.11.05	平安～鎌倉時代の土坑、木棺墓、ピット 弥生時代前期の環濠 縄文時代晩期～弥生時代前期の土坑、流路	共同住宅建設
12	兵庫津遺跡第24次調査	兵庫区七宮町2丁目	神戸市教育委員会	東　喜代秀 中居さやか	250㎡ 1,560㎡	13.10.15～13.12.20	中世末～江戸時代末の9面の遺構面を検出 近世町屋	共同住宅建設
13	兵庫津遺跡第27次調査	兵庫区川口町1丁目	神戸市教育委員会	関野　豊	14㎡ 28㎡	14.01.15～14.01.18	17世紀後半の土坑 18世紀後半の土坑	社屋増築
14	上沢遺跡第46次調査	兵庫区松本通8丁目	(財)神戸市体育協会	富山　直人	360㎡ 1,280㎡	13.09.14～14.01.15	弥生時代末の竪穴住居、溝 奈良時代の掘立柱建物、柵列 （平成15年度報告書刊行予定）	道路拡幅 [松本線]
15	上沢遺跡第47次調査	長田区5番町3丁目	(財)神戸市体育協会	山本　雅和	112㎡ 112㎡	14.02.28～14.03.20	古墳時代後期後半の土坑、溝、ピット 平安時代後期の溝、流路	生活道路整備
16	オキダ古墳群第2次調査	北区有野町二郎字杉ノ元	(財)神戸市体育協会	谷　正俊	760㎡ 760㎡	13.07.13～13.08.15	古墳～平安時代の掘立柱建物、土坑、溝、ピット	道路建設 [道場南線]

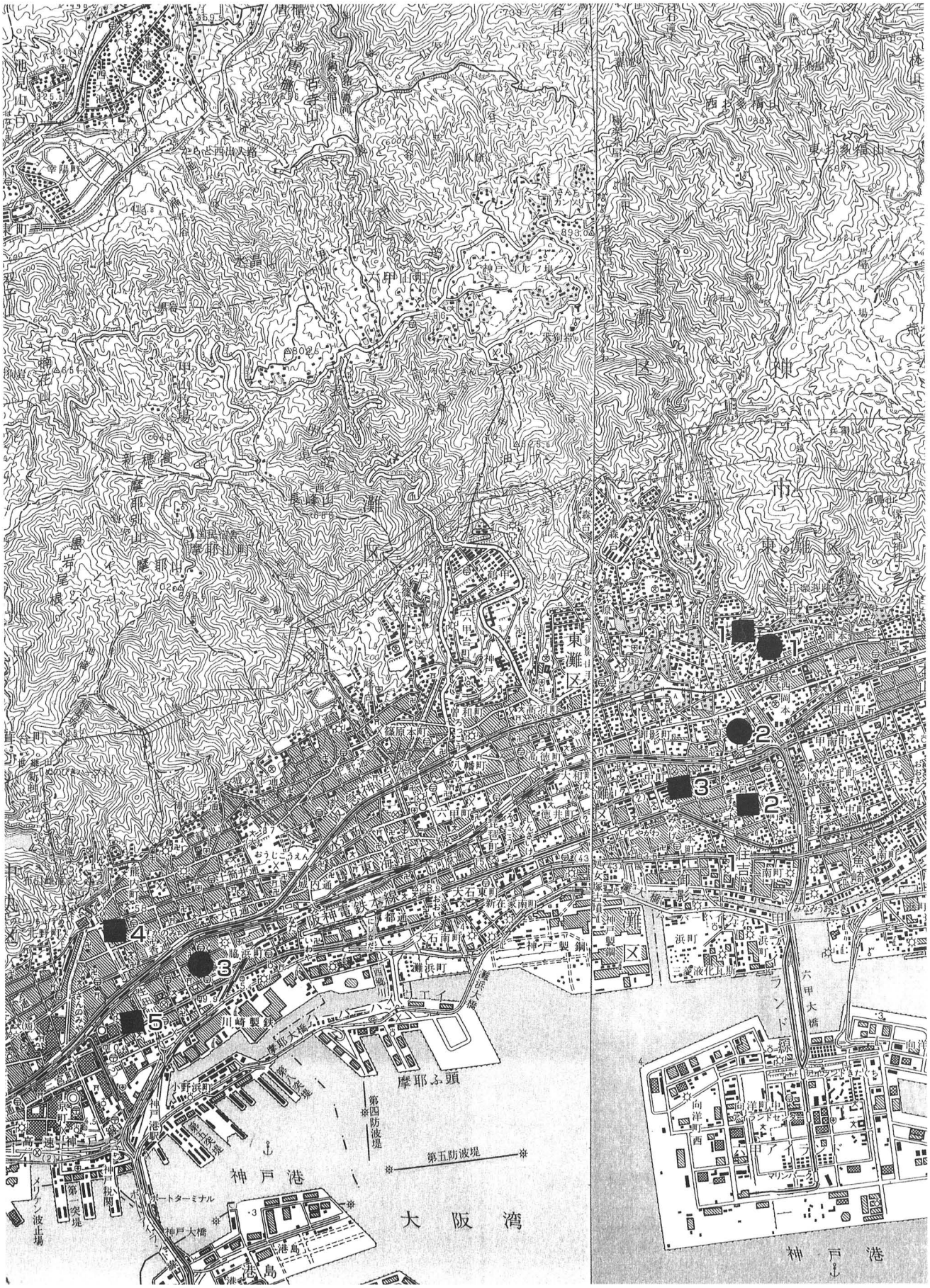
埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）（２）

17	茶臼山城址第８次調査	北区長尾町上津	(財)神戸市体育協会	井尻　格	77㎡ 77㎡	13.07.30～13.08.08	明確な遺構なし	区画整理事業
18	野瀬遺跡３次調査	北区淡河町野瀬字沢	(財)神戸市体育協会	井尻　格 須藤　宏	1,475㎡ 1,475㎡	13.04.09～13.05.28 14.02.25～14.03.06	中世後半の土坑、落ち込み	農業基盤整備
19	五番町遺跡第11次調査	長田区４番町６丁目	神戸市教育委員会	関野　豊	160㎡ 480㎡	13.04.02～13.05.11 前年度から継続	鎌倉時代の掘立柱建物、土坑、溝	寮建設
20	御蔵遺跡第45次調査	長田区御蔵通４丁目	(財)神戸市体育協会	谷　正俊	121㎡ 339㎡	13.05.25～13.07.09	飛鳥～奈良時代の流路、杭列　平安時代前期の掘立柱建物、溝、ピット　平安末～鎌倉時代の溝、犂溝 （平成14年度報告書刊行済）	道路拡幅 ［国道28号線］
21	東尻池遺跡第１次調査	長田区東尻池１丁目	(財)神戸市体育協会	安田　滋 井尻　格 浅谷　誠吾	205㎡ 205㎡	13.12.04～13.12.13 14.01.10～14.01.17	古墳時代前期～中世の遺物包含層	敷地整備
22	戎町遺跡第33次調査	須磨区平田町４丁目	神戸市教育委員会	阿部　功 中谷　正	317.5㎡ 317.5㎡	13.03.26～13.04.18	中世の土坑、溝、ピット	共同住宅建設
23	大手町遺跡第６次調査	須磨区大手町４丁目	(財)神戸市体育協会	内藤　俊哉	180㎡ 180㎡	14.01.09～14.02.15	弥生時代中期の環濠 （平成14年度報告書刊行済）	道路建設 ［山麓線］
24	神出古窯址群	西区神出町東字追ノ谷	神戸市教育委員会	池田　毅	120㎡ 120㎡	13.06.12～13.06.25	11世紀中頃～後半の土坑、落ち込み	個人住宅 ［国庫補助金］
25	芝崎遺跡	西区平野町向井字東谷	神戸市教育委員会	阿部　功	170㎡ 170㎡	13.07.10～13.07.14	13世紀～14世紀のピット、落ち込み	農業倉庫建設 ［国庫補助事業］
26	寺谷遺跡	西区櫨谷町寺谷字平尾	(財)神戸市体育協会	石島　三和	250㎡ 250㎡	13.06.27～13.07.10	12世紀の遺物包含層	圃場整備
27	寺谷遺跡	西区櫨谷町寺谷字平尾	(財)神戸市体育協会	石島　三和	20㎡ 20㎡	13.07.11	12世紀の遺物包含層	圃場整備
28	白水瓢塚古墳第８次調査	西区伊川谷町潤和字シンド山	神戸市教育委員会	西岡　巧次	650㎡ 650㎡	13.11.14～14.01.18	古墳２基、埴輪円筒棺	施設建設
29	高津橋・岡遺跡	西区玉津町高津橋字岡	神戸市教育委員会	西岡　巧次	183㎡ 183㎡	13.04.19～13.05.11	飛鳥～奈良時代の溝	確認調査
30	高津橋・岡遺跡第７次調査	西区玉津町高津橋字岡	神戸市教育委員会	東　喜代秀 阿部　功	2,500㎡ 2,500㎡	13.06.18～13.07.27	古墳時代後期の溝	宅地造成
31	今池尻遺跡第３次調査	西区伊川谷町潤和字下近角	(財)神戸市体育協会	山本　雅和 佐伯　二郎	551㎡ 948㎡	13.11.08～13.11.19 13.11.28～14.02.20	弥生時代後期の竪穴住居、土坑、溝 古墳時代後期後半～末の竪穴住居、掘立柱建物、溝 （平成14年度報告書刊行済）	道路建設 ［出合新方線］
32	新方遺跡第43次調査	西区玉津町西川原字野手	神戸市教育委員会	阿部　功	140㎡ 343㎡	13.07.24～13.08.27	弥生時代中期後半の溝（方形周溝墓ヵ） 古墳時代中期後半～後期の土坑、溝	区画整理事業
33	西神ニュータウンNo.62地点	西区櫨谷町管野	兵庫県教育委員会	山上　雅弘 長濱　誠司 柏原　正民	7,928㎡ 7,928㎡	13.06.18～13.10.20	弥生時代の竪穴住居、土器埋納土坑 古墳～奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物、土坑 中世の掘立柱建物、火葬墓	道路改築 ［神戸西バイパス］
34	栃木遺跡	西区櫨谷町管野	兵庫県教育委員会	山上　雅弘 長濱　誠司 柏原　正民	4,732㎡ 4,732㎡	13.12.25～14.03.12	弥生時代中期の溝、土器棺 鎌倉時代の溝、堀立柱建物、井戸	道路建設 ［神戸西バイパス］
35	西神ニュータウンNo.62地点	西区櫨谷町管野	兵庫県教育委員会	山上　雅弘 長濱　誠司 柏原　正民	5,798㎡ 5,798㎡	13.12.06～14.02.15	弥生時代、古墳時代の竪穴住居、堀立建物 中世の溝、柱穴	道路建設 ［神戸西バイパス］
36	福中城跡	西区平野町福中	兵庫県教育委員会	森内　秀造 久保　弘幸	1,402㎡ 1,402㎡	13.12.10～14.03.12	外堀の南側で15世紀の堀立柱建物を検出 堀から15～16世紀の遺物が出土	道路拡幅
37	栃木遺跡	西区櫨谷町管野	兵庫県教育委員会	中川　渉 日置　智	774㎡ 774㎡	14.01.28～14.03.15	鎌倉時代の掘立柱建物	道路建設 ［神戸西バイパス］
38	西神ニュータウンNo.62地点	西区櫨谷町管野	兵庫県教育委員会	中川　渉 日置　智	148㎡ 148㎡	14.01.28～14.03.15	中世の堀立柱建物、井戸、土坑	道路建設 ［神戸西バイパス］



平成13年度　神戸市埋蔵文化財調査位置図

（各遺跡の番号は掲載遺跡と一致）



調査地点位置図 1

4
5
9
6
6
7
7
9
10
8
16
17
10
11
14
13
12
15
18
神戸港
中央区
長田区
須磨区
兵庫区
北区
灘区
森林植物園
教育植物園
兵庫第一突堤
第一防波堤
和田岬
和田岬砲台
神戸検疫所
高速神戸線
国民宿舎
須磨海浜
若宮町
中央市場
ポートタワー
メリケン波止場
浮ドック
菱重工造船所
菱電機
東川崎町
川崎重工業工場
東尻池町
御崎町
吉田町
湊島町
駒ヶ林南町
朝見台
千守町
横尾
高尾台
藍那
鈴蘭台
鈴蘭台北町
鈴蘭台西町
南五葉
有馬町
中里町
奥平野
湊川神社
楠公墓所
楠本
新開地
相生町
東出町
昭和通
和田岬線
大阪
長田
池田
丸山
妙法寺
若草町
海洋気象台
荒田町
水木通
清水町
湊川町
金山町
東山町
柳筋
高速
神戸
第突堤
第一防波堤

調査地点位置図 2

神戸市
北区
長尾町上津
長尾町宅原
大沢町
南豊岡
日西原
市原
上大沢
上小名田
八多町
西宮北インターチェンジ
武庫が丘
緑ヶ丘
西山
道場町
塩田
平田
有野町
有野中町
藤原台北町
藤原台南町
阪神流通センター
西宮市
山口町
深谷
附物
柳谷
有野台
東有野台
有馬口出入路
有野町
東鹿見山
西鹿見山
オタレ尾山
古倉山
落葉山
8

調査地点位置図3

調査地点位置図 4

Ⅱ．平成13年度の復興事業に伴う発掘調査

１．岡本北遺跡　第５次調査

１．はじめに　岡本北遺跡は旧摂津国菟原郡、六甲山南麓の傾斜地、住吉川の左岸に位置する。岡本北遺跡の東には岡本東遺跡、西には西岡本遺跡などが相接して存在する。

岡本北遺跡ではこれまで４次にわたり発掘調査が行われている。第１次調査で出土した縄文時代早期の土器が最古の遺物であるが、遺跡の中心は弥生時代末と鎌倉時代になる。

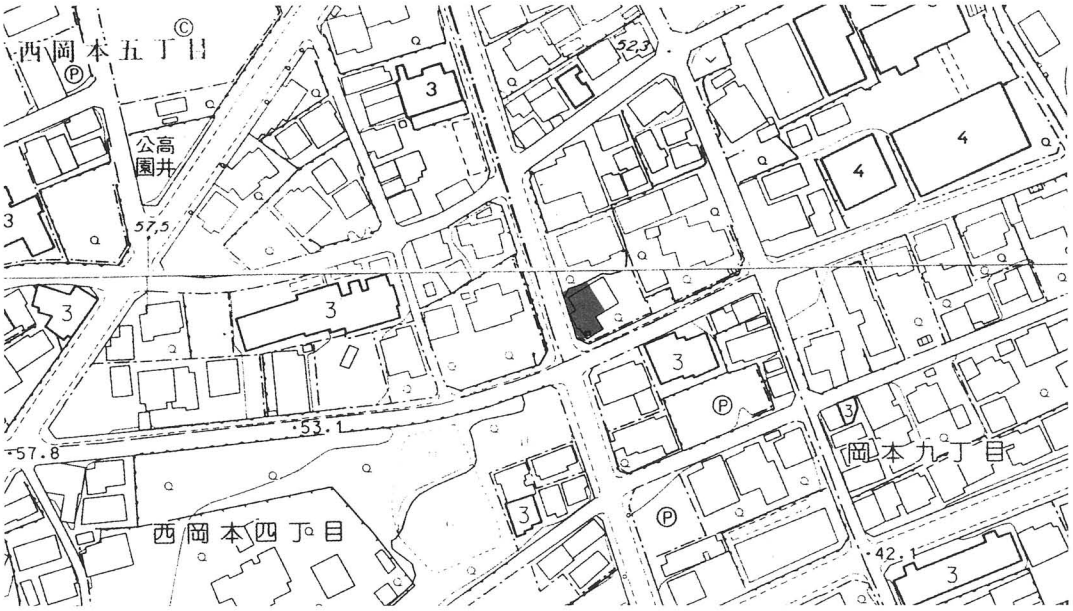


fig. 8
調査地位置図
1:2,500

２．調査の概要　今回の発掘調査は個人住宅建設工事に伴うもので、住宅建設によって遺跡の破壊される部分についてこれを行った。

遺構面　遺構面は２枚が存在する。ただし調査地周辺は傾斜地であり、段造成されて土地が利用されている。調査地においても斜面がカットされており、２枚の遺構面を確認できたのは調査区の北側の30㎡ほどであった。

第１遺構面　中世を主とする遺構面である。北部の石垣ＳＷ01の背後は中世の洪水砂2b層に覆われる。ここでは石垣・柱穴・土坑・牛蹄あと・暗渠などが検出された。

中部～南部では溜め池および堤・土坑・柱穴などが検出された。南部は近代に石組溝ＳＤ02が築かれ、一部遺構の遺存状況が悪い。

ＳＷ01　段造成を行った際に築かれた石垣。根石の一部のみが遺存している。小片がほとんどではっきりしないが、裏込め土からの出土品は中世のものが多く、近世以降の遺物は出土していない。

畠地　石垣前面の耕土（13a層）には近世の遺物が含まれ、この耕土直下から暗渠が検出された。宅地として造成される近代までここが畠地として利用されていたものと推定される。

柱穴　直径0.3m程度のプラン円形の柱穴群が石垣背後の平坦面で検出された。ＳＰ08・09は柱痕部に炭が詰まっている。出土した遺物は小破片がほとんどで、時期も判然としないが

中世のものが多いと思われる。

牛蹄あと　石垣背後の平坦面で検出。偶蹄目の動物蹄あとで、おそらく牛のものであろう。

ＳＧ01・ＳＸ02　調査区南部で検出された溜め池状の遺構（ＳＧ01）とその堤（ＳＸ02）。これらは常時水の流れるものかどうか明らかでないが、傾斜地の谷部分を塞き止め堤とし、その上流側を等高線に沿うかたちで溝状に掘削する遺構で、以下の通りの状況が観察できた。

①南側の堤となる部分ＳＸ02は、元の地形が谷状の流路である部分に盛土を行い、その上面の高さをそろえている。②堤の池側斜面には、盛土部分・地山掘削部分ともに拳大か

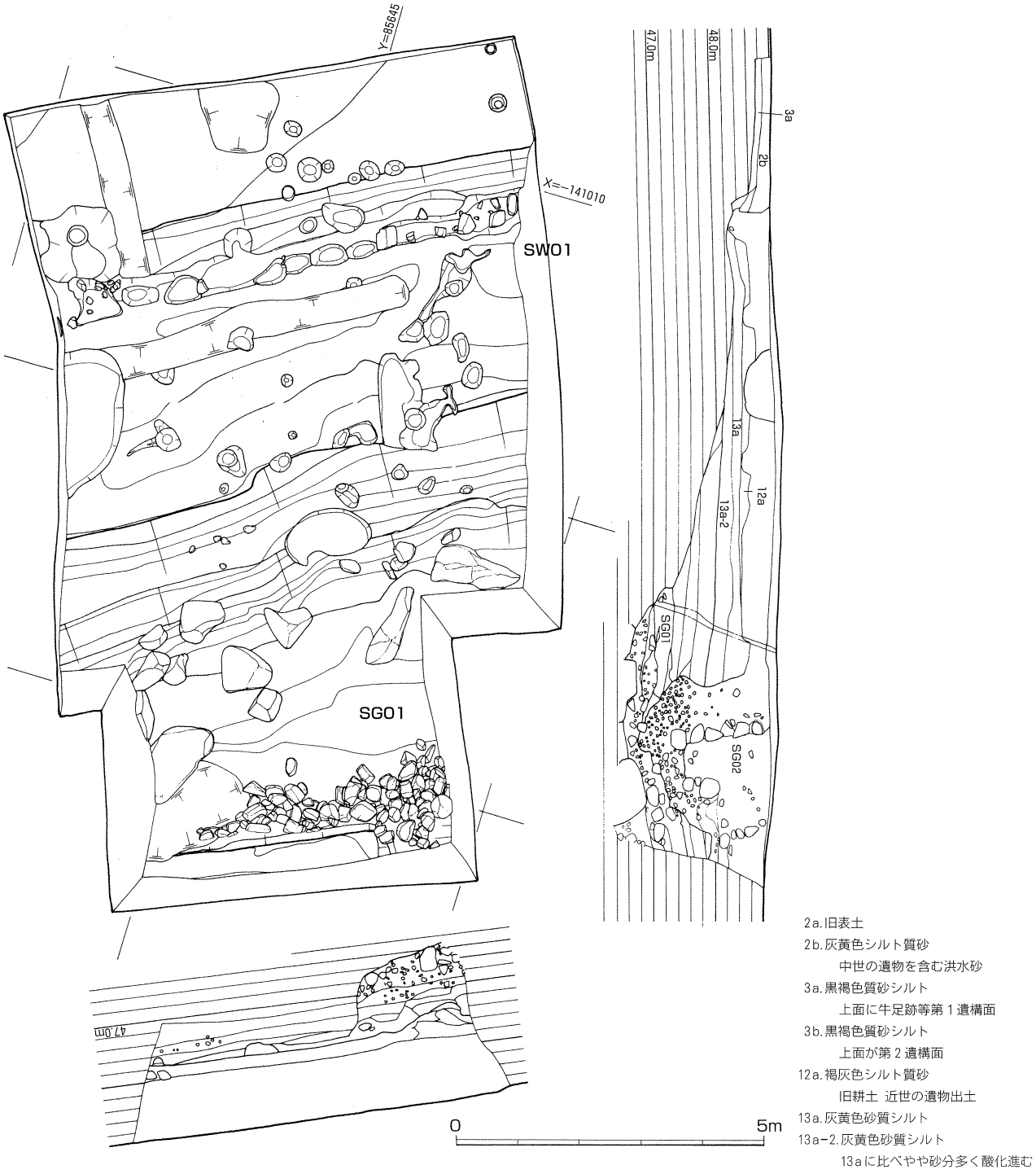


fig. 9　第１遺構面平面・断面図

ら人頭大の礫が乱雑に積まれ、一部に止め杭が遺存している。これは水による堤の浸食を防ぐための工法と推定される。③堤上面では余水吐状の堤を横断する溝が検出された。④馬踏から池底までの深さは約1.0ｍをはかる。⑤ＳＧ01の埋土は土壌化の進んだ砂質シルトが主体で、淀んだ状態の水成堆積である。

池の端が検出されていない状況では、この遺構が等高線に沿うかたちの堀切的なものである可能性も排除できないが、滞水していた状況が確認できることからすれば、貯水を目的とする遺構、すなわち溜め池である可能性の方が高いと判断される。

ＳＧ01・ＳＸ02からは平安時代末から鎌倉時代の遺物が主体的に出土しており、この時期に溜め池が築かれ、利用されたものと推定される。なお、流れ込みとして弥生時代末頃の遺物も出土している。

第２遺構面　北部のみ遺存している。3b層上面で確認された弥生時代終わりごろの遺構面。柱穴・土器溜まり遺構が検出された。

ＳＸ01　調査区北部西端で検出された土器溜まり遺構。弥生時代末頃の土器が比較的多く出土した。

柱穴　調査区北部で検出された。柱穴ともシミとも判断つかないものが多く、建物などの遺構としてまとまるものもない。

３．まとめ

遺跡全体からみた調査面積は少ないものの、これまでの調査によって、岡本周辺の遺跡群の様相もある程度判明してきた。平安後期から鎌倉時代については今回の調査で農業生産にかかわる部分が明らかとなり、今後調査が進展すれば、この時代のこの地域の様相がより具体的になるものと期待される。

なお、遺構は確認されなかったが、今回の調査で律令期の遺物が出土しており、周辺にこの時期の遺構が存在するものと推測される。

fig.10　第１遺構面全景

fig.11　ＳＧ01

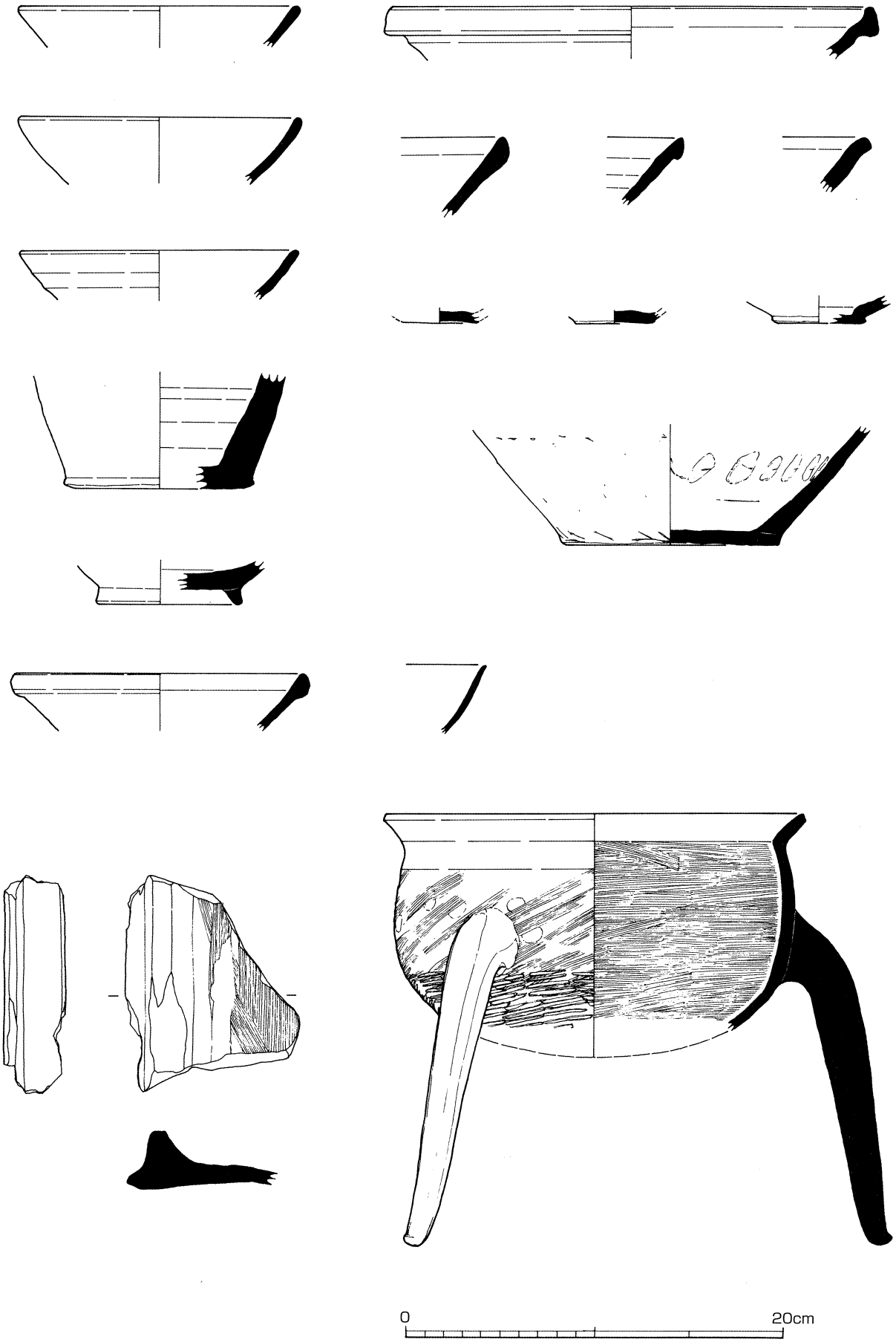


fig.12　ＳＧ01出土遺物

2．住吉宮町遺跡　第35次調査

1．はじめに

住吉宮町遺跡は、神戸市東灘区に所在する遺跡で、住吉川や石屋川をはじめとする小河川によって形成された標高19～28ｍの扇状地末端付近に立地している。

これまでに実施した34次にわたる調査の結果、弥生時代～中世の複合遺跡であることがわかってきているが、特に古墳時代においては、前方後円墳である坊ケ塚古墳や帆立貝式古墳である住吉東古墳などの盟主墳を中心に約70基の方墳が集中して営まれている状況が判明してきており、注目されている。

今回の調査地は、平成８・９年度に実施した第24次調査地の北側に位置しており、同調査でも４基の方墳が確認されていることから、当調査においても、方墳などの遺構が確認されることが調査前より予想された。なお、当調査地の現標高は29～30ｍである。

fig.13
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、平成12年度より継続して調査を実施した。先年度内に、トラックヤード部分として掘削を行なわなかった南東隅部を除き、主に東半部に安定して堆積がみられた黄褐色粘質砂上面を第１遺構面として調査を実施した。その結果遺溝が検出されず、調査区外に遺構が延びるものと考えた。

今年度は、まず未調査であった南東隅部分について調査を実施した。その結果、第１遺構面とした黄褐色粘質砂上面では遺構が検出されず、さらに下層の灰色小礫混じりシルト質細砂層上面（現地表下55㎝）で土坑３基（ＳＫ01・ＳＸ01・02）を検出した。遺構内からは土師器や黒色土器の小片が出土しており、平安時代～中世頃のものと考えられるが、

詳細な時期については不明である。

また、先述のように今回の調査区内にも古墳が存在することが考えられたため、下層の調査を実施した。その結果、後述する古墳１基（１号墳）及びその周壕がある程度埋没した段階で掘削されたピット４基（ＳＰ01～04）を検出した。

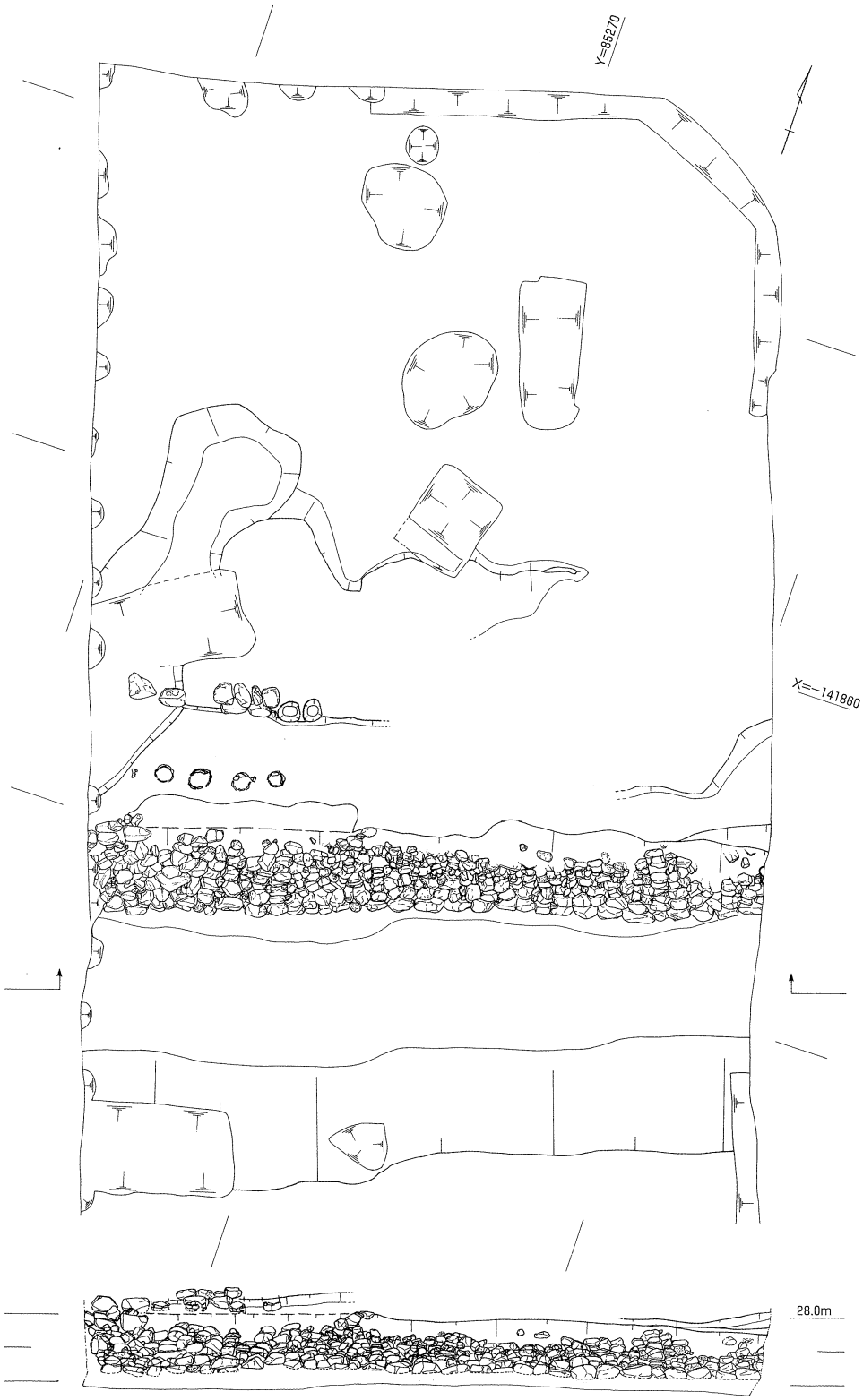


fig.14　１号墳平面・立面図

0　3m

ＳＰ01～04は直径0.2ｍ前後のもので、1.3～1.65ｍでほぼ等間隔で並ぶが、１列のみの検出であるため性格については不明である。これらのピットについては、ＳＫ01・ＳＸ01・02とほぼ同一面で検出しており、ピット内からの出土遺物がなく断定材料には乏しいものの、両者は同一時期のものである可能性が考えられる。検出層位からは、１号墳よりも新しい時期のものと考えられるが、詳細については不明である。

以上の結果から、先年度第１遺構面とした黄褐色粘質砂上面については、調査区外に遺構が存在することを全く否定することはできないものの、現段階では遺溝面と捉えることを保留し、土坑及びピットを検出した面を改めて第１遺構面と呼称することとする。

１号墳

検出した古墳は、調査区のほぼ2/3を占める大規模なもので、墳丘の一部や周壕、墳丘南法面の葺石、埴輪列、２段目基底石などを検出した。調査区外へ延びているため、全体の形状や規模は明らかではなく、古墳の主軸方向も不明である。また、埋葬施設

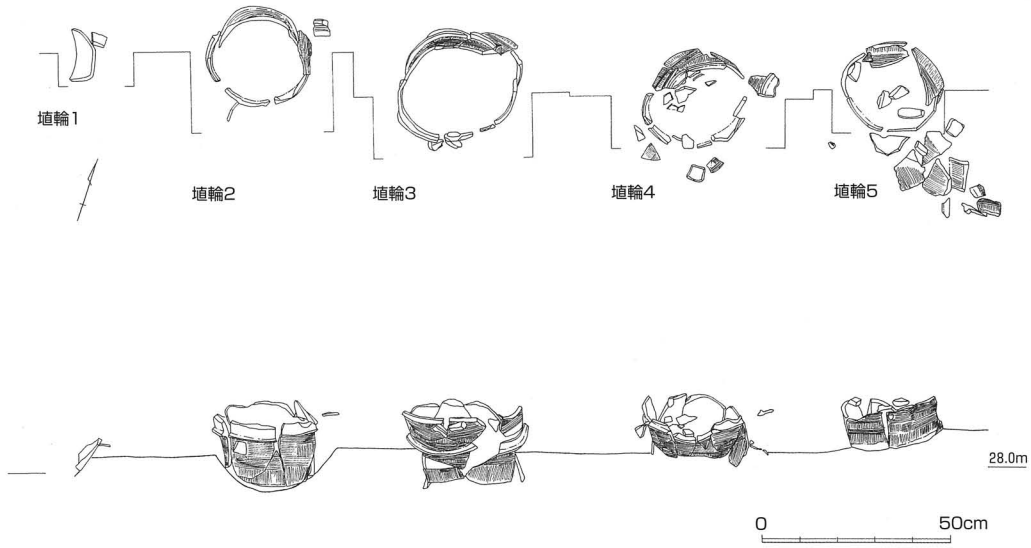


fig.15　１号墳埴輪列
平面・立面図

fig.16　１号墳埴輪列

も削平により失われている。検出した規模は、墳丘の東西長10.2m、同南北長11.2m、周壕の幅4.7m、同深さ1.1mである。

円筒埴輪列　墳丘の南西部、周壕の北肩部際で、円筒埴輪列を検出した。円筒埴輪列は5個体（うち1体は底部及び口縁部のみ検出）が等間隔（芯々間で50～60cm）で並んでいる。

円筒埴輪列は墳丘の南西部でのみ検出した。墳丘のその他の場所にも埴輪が並べられていた可能性については、周壕内から各種の埴輪が出土していることからも十分に考えられるが、精査を実施したにもかかわらず一部分にのみ埴輪列を検出したことは、少なくとも1段目の墳丘については、特定の部分にのみ埴輪を設置していた可能性がある。その場合断定はできないものの、円筒埴輪列を検出した部分が墳丘コーナー付近であることが考えられる。葺石も西端部付近は斜め方向（北西－南東方向）に積んでいる状況を読み取れ、墳丘コーナーを意識した積み方と考えることができる。

円筒埴輪列のうちの1体（埴輪3）については、焼成が良好な土師質の埴輪で、接合作業の結果ほぼ全体の器形を復元することが可能である。4段構成の埴輪で、最上段にはヘラ状工具による線刻（船？）が認められる。円筒埴輪に線刻が認められるものは、住吉宮町遺跡の調査では第32次調査でも確認されているが、線刻の内容に若干の違いがある。

2段目基底石　また、墳丘の南西部には人頭大の花崗岩を4石、周壕肩ラインと平行に並べている部分が検出された。下部に2石が存在し2段積みになっており、2段目の墳丘の基底石と考えられるが、2段目の墳丘については、後世の洪水による削平のためほとんど失われている。

墳形　1号墳の形状や規模については以上のように不明であるが、これまでに住吉宮町遺跡内で検出した古墳の大半が方墳であることや、検出した周壕が調査区内をほぼ真っ直ぐに延びる点を重視すれば、方墳の可能性が高いと考えられる。ただし周壕の幅が5m近いものであり、これまでに住吉宮町遺跡内で検出した単独の方墳の壕としては突出するものである。墳丘の規模に伴う問題ではあるが、坊ケ塚古墳よりもさらに北側に立地していることなどを考慮すれば、前方後円（方）墳の可能性も全く考えられないわけではなく、今後隣接地の調査などを待って更に検討を要する重要な問題である。

出土遺物　1号墳墳丘及び周壕内より出土した遺物の大半は埴輪であり、他に器形の判明するものは須恵器坏身1点、土師器甕1点があるに過ぎない。第24次調査などで検出している供献土器も今回の調査区内では検出されていない。須恵器坏身は小片ではあるが、TK208型式のものと考えられる。

埴輪については、円筒埴輪や朝顔形埴輪のほか、人物埴輪（武人？）、靫形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪などの各種の形象埴輪がみられる。円筒埴輪の特徴は川西編年のⅣ期の様相を示しているものと考えられる。

整理作業の未了な現段階では詳細については明確でない面もあるが、以上のことがらから、現段階では1号墳は5世紀中頃に築造されたものと考えておきたい。

今回の調査地の南側に位置する第24次調査地点でも古墳（方墳）が4基検出されているが、いずれも周壕の大半が洪水砂によって埋まっていることが確認されている。こ

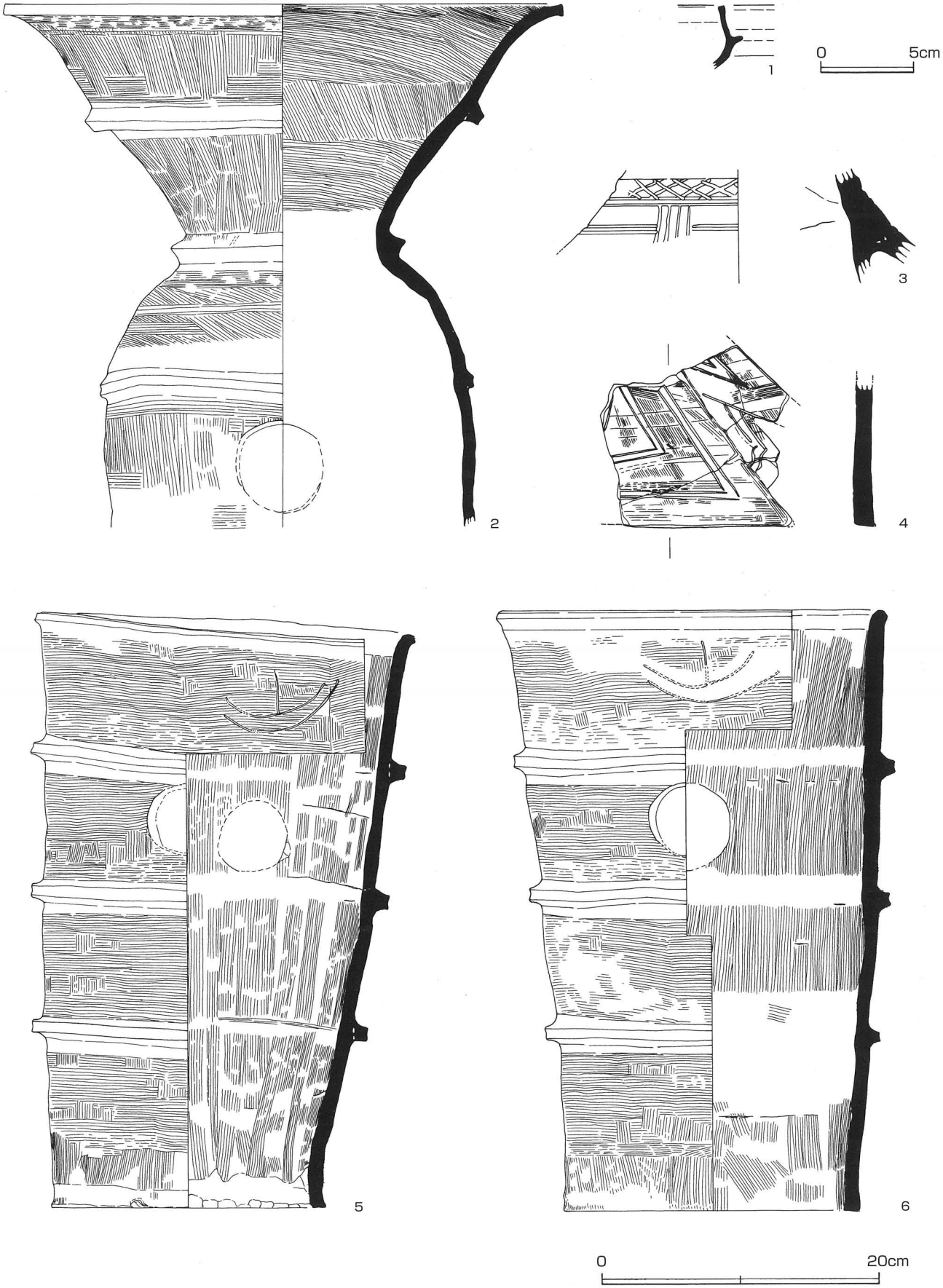


fig.17　出土遺物（5:埴輪列３　6:埴輪列５）

の洪水砂は6世紀初頭頃の洪水の痕跡を示すものと考えられているが、今回検出した1号墳の周壕はその下半部に厚くシルトの堆積がみられ、上半部にのみ洪水砂が堆積している。今回の洪水砂が第24次調査地点で検出した洪水砂と同一時期のものかどうかの断定は難しいが、いずれにせよ、今回検出した1号墳が第24次調査の4基の古墳が埋没するよりも早い段階に埋没した可能性、言い換えればより古い時期に築造された可能性が高いと考えられ、上記の築造時期の想定を傍証するものとも考えられる。

なお、墳丘の中央部に南北方向のトレンチを設定して断ち割り調査を実施したが、その結果、少なくとも1段目の墳丘については自然堆積層を整形して古墳を築造したものと考えられる。2段目の墳丘については基底石しか残存していないため明らかではないが、周壕掘削時に生じる土を用いた、盛土による成形の可能性も十分に考えられる。

そのほか、調査区南端部でピット2基を検出した。出土遺物がなく時期については不明であり、1号墳との関連も不明である。

3．まとめ

今年度の調査では古墳1基及び平安時代～中世頃の土坑、ピットを確認した。特に古墳（1号墳）は、住吉宮町遺跡の範囲のなかでは最も北側で検出されたものである。整理作業が未了なため詳細については不明な点が多く、また規模や形状も明確ではない。墳形が従来検出されているような方墳になるのか、あるいは前方後円（方）墳になるのかは断定できないが、いずれにせよこれまでに検出した古墳のなかでも、大型の古墳であることは間違いない。また築造時期的についても、第24次調査の4号墳と同時期或いは更に遡る可能性も考えられる。今後住吉宮町遺跡内の古墳群の様相を考える際に重要な意味をもつ古墳と捉えることができよう。

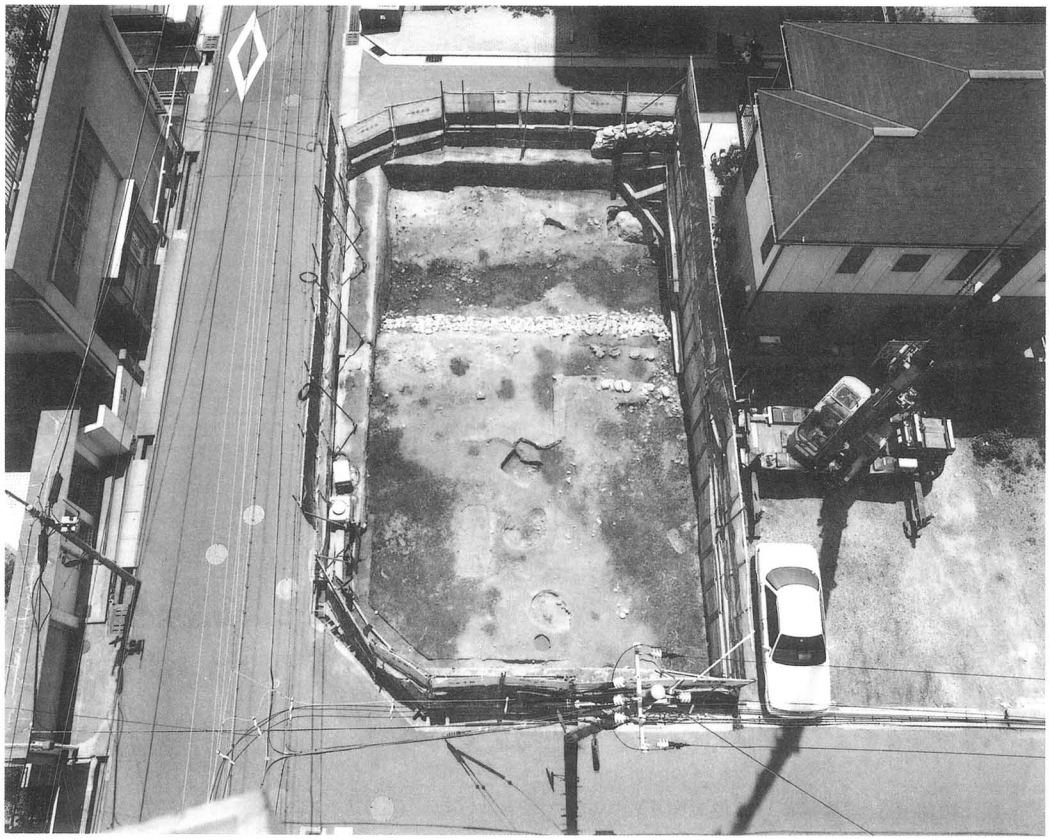


fig.18　調査区全景

3．日暮遺跡　第20次調査

1．はじめに

日暮遺跡は生田川と西郷川に挟まれた地域にあり、扇状地末端から低位段丘面に立地する。日暮遺跡は、昭和61年の第１次調査以来、弥生時代から室町時代におよぶ広範囲な複合集落遺跡として知られている。これまで、弥生時代後期末の竪穴住居、古墳時代前期・中期の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物、鎌倉時代後期の土坑・溝・井戸等が発見されている。調査を実施した地点は、北西から南東方向に下がる緩やかな傾斜面に占地している。今回の調査は、共同住宅新築工事に伴う調査である。調査地は第19次調査の南西隣にあたり、室町時代と鎌倉時代後期の遺構面が検出されることが予想された。

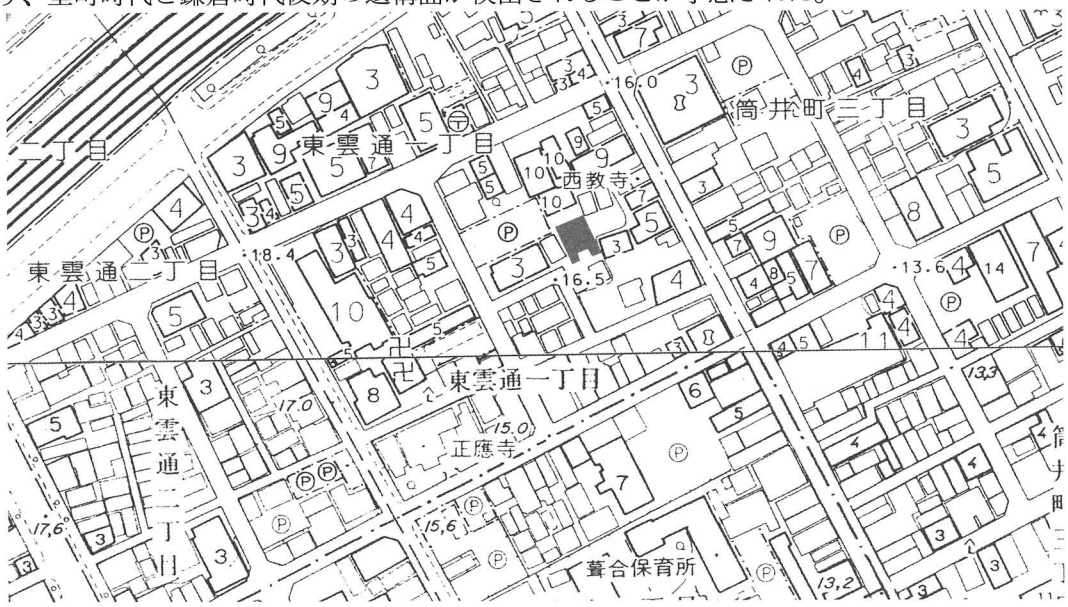


fig.19
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

基本層序

調査地の基本層序は、現地表下１ｍ前後まで造成土に覆われ、造成土の下に旧耕作土が厚さ0.2～0.3ｍで被覆している。この旧耕土層下に中世の遺物包含層（暗黄褐色粘性砂質土）が堆積し、その下面が黒灰色粘性砂質土の第１遺構面となっている。黒灰色粘性砂質土の下層は暗褐色砂質土が堆積し、その下は黄茶褐色砂質土で第２遺構面となっている。第２遺構面である黄茶褐色砂質土は南方向に緩やかに傾斜している。

第１遺構面

第１遺構面では苑池と考えられる落ち込み１ヶ所、苑池への導水溝・排水溝各１条、掘立柱建物２棟、柵２条、井戸１基を検出した。

ＳＢ01

南北５間（6.4ｍ）、東西４間（5.0ｍ）の南・東・西に庇を設ける南北棟の掘立柱建物である。梁間（東西）で1.2ｍ等間の東西２間、1.8ｍ等間の南北４間の母屋を構え、東・西側に1.2ｍ、南側0.8ｍの庇を設ける。柱掘形は一辺0.6ｍ前後の方形や、長径0.6ｍ前後の不定楕円形で検出したが、掘形底部は概ね方形で、本来柱掘形は方形に掘られ、一部の掘形で柱の抜き取りが行われたと考えられる。柱掘形は0.3～0.45ｍ前後の深さを残し、掘形底部及び掘形の土層断面に柱の痕跡が明瞭である。掘形埋土内では一部の掘形で河原石と角礫が充填され、柱材の固定がおこなわれている。また、柱材は掘形の壁に接して据えられていた。掘形からは、土師器の細片が出土している。建物の方位は北18°30′東を採る。

ＳＢ02

南北２間（2.8ｍ）、東西３間（4.2ｍ）以上の東西棟の掘立柱建物である。南に接する

ＳＢ01との間隔は1.0ｍで極近接している。桁行（東西）で柱間は1.8ｍ等間、梁間（南北）で1.4ｍ等間を計測する。建物の東側１間分は中央に束柱があり、建物の東辺は掘立柱建物ＳＢ01の庇と柱どおりが概ね一致している。建物の南側第２柱間中央には大型の柱掘形が検出され、扉等のもたせ柱とも考えられる。なお、建物の中央西よりで、井戸（ＳＥ01）を検出した。井戸中心に建物棟方向が通り、土間に設けられた屋内井戸の可能性がある。柱掘形は一辺0.45ｍ前後の方形や、長径0.6ｍ前後の不定楕円形で検出したが、掘形底部は概ね方形で、本来柱掘形は方形に掘られ、一部の掘形で柱の抜き取りが行われたと考えられる。柱掘形は0.2～0.3ｍ前後の深さを残し掘形底部及び掘形の土層断面に柱の痕跡が明瞭である。掘形埋土内では一部の掘形で河原石と角礫が充填され、柱材の固定がおこなわれている。掘形からは、土師器の細片が出土している。建物の方位は北23°00′東を採る。

ＳＡ01　７間分検出した。柱掘形は長径0.4～0.6ｍ前後の不定楕円形で検出したが、掘形底部は概ね円形で、本来全て柱掘形は円形に掘られ、一部の掘形で柱の抜き取りが行われたと考えられる。柱掘形は0.3～0.4ｍ前後の深さを残し掘形底部及び掘形の土層断面に柱の痕跡が明瞭である。掘形埋土内では一部の掘形で河原石と角礫が充填され、柱の固定が行われている。掘形埋土内からは、土師器の細片が出土しているが明確な遺物はない。柵の方位は北９°30′を採る。

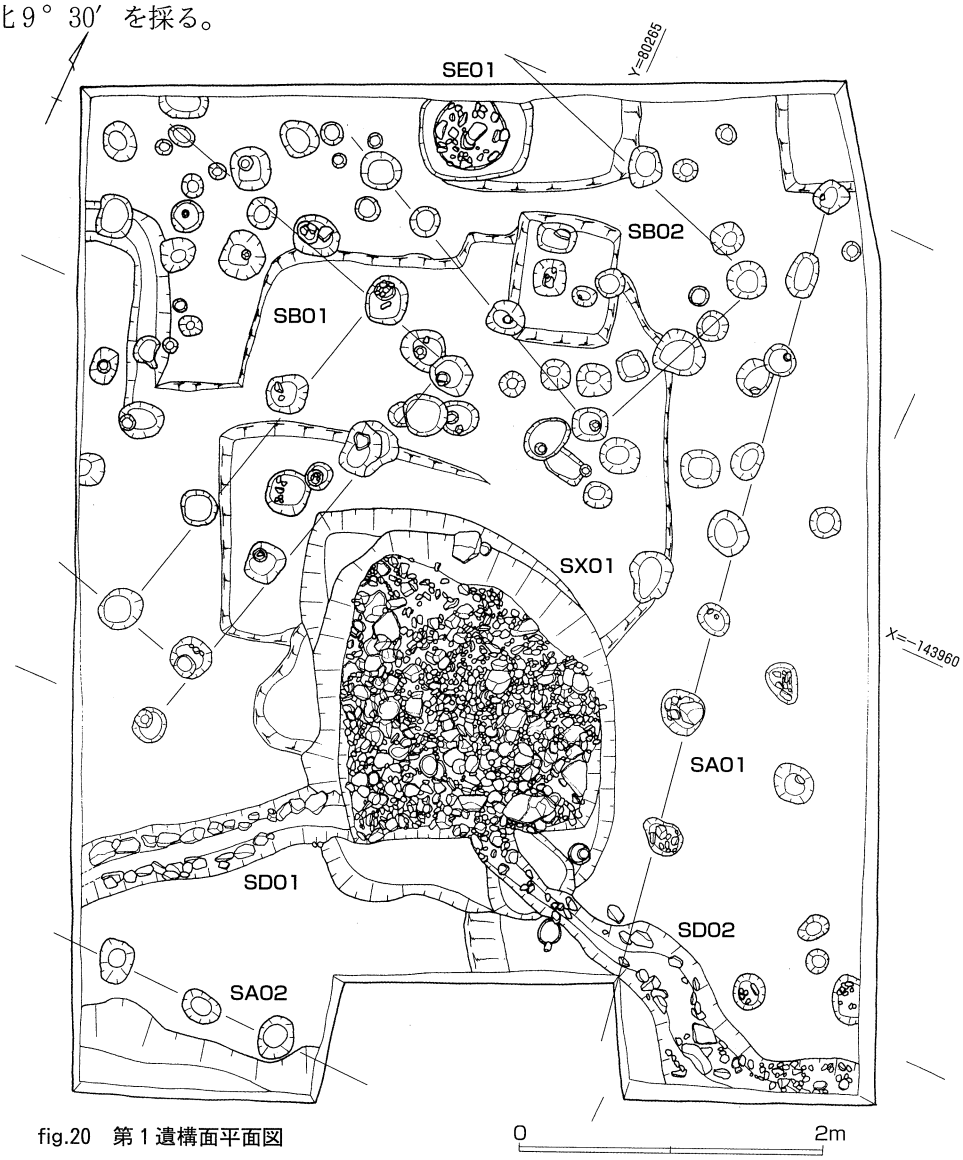


fig.20　第１遺構面平面図

ＳＡ02　２間分検出した。柱間間隔は1.2ｍ等間を計測する。柱掘形は長径0.4～0.6ｍ前後の不定楕円形で検出したが、底部は概ね円形で、本来柱掘形が円形に掘られ、一部の掘形で柱の抜き取りが行われたと考えられる。柱掘形は0.3～0.4ｍ前後の深さを残し掘形底部及び掘形の土層断面に柱の痕跡が明瞭である。掘形からは土師器の細片が出土している。柵の方位は北80°30′西を採る。

ＳＥ01　その位置関係からＳＢ02に伴う室内井戸とも考えられるが明確ではない。井戸の東半は近代の攪乱によって底部のみを残す。井戸は東西1.8ｍ、南北1.2ｍ前後、深さ0.6ｍの方形掘形に直径0.9ｍ前後の円形井戸枠を据えて構築している。井戸枠の痕跡と考えられる木質部等は検出されなかった。井戸の底部は湧水層である明黄褐色砂礫層まで掘り抜き、角礫を敷き黒灰色粘質土と褐色砂を混えた土で充填した上に井戸枠を据えている。井戸内埋土・掘形埋土内から土師器の細片が出土しているが明確な遺物はない。

ＳＸ01　検出当初、上面では近世遺物を含む土層が被覆し、西側及び南東側には溝状の掘形が錯綜した状態で検出され、近世以降の落ち込みとも考えられた。しかしながら、上層被覆土を除去した結果、人頭大から拳大の花崗岩が投棄された状態で多量に検出され、石材の間から土師器羽釜・須恵器捏鉢が出土した。さらにＳＸ01内の石材を除去し、溝状の落ち込みを精査した結果、ＳＸ01の底部には比較的扁平な花崗岩による石敷きを設けていた。また西側の溝状の落ち込みは、花崗岩による護岸を施した溝（ＳＤ01）であり、西からＳＸ01の南隅部に水を落としこむ構造の溝であることが判明した。南東側の溝状の落ち込みはＳＸ01の石敷き面から流れ出る溝（ＳＤ02）であることが明らかになった。

以上の検出状況から復元されるＳＸ01は、南北5.2ｍ、東西4.2ｍの不定楕円形、断面逆台形状に掘形を掘り、さらに掘形の北側を段状に掘り込んで、底部から10㎝～20㎝前後小礫混じりの暗褐黄色粘性砂質土を敷いた上に石敷きを設けていた。石敷きは、段状掘形の南西部を「要」とするほぼ中心角90°、半径1.5ｍ～1.8ｍの扇状に花崗岩（まれに凝灰岩含む）が敷詰められていた。石敷きは、扁平な花崗岩・凝灰岩を敷き間隙を小型の花崗岩礫で埋めてつくる。石敷きの南東隅部で比較的大型の花崗岩が石敷き上に据えられていることから、これらが護岸の基底石と考えられる。さらに、石敷き掘形の南側は段状に幅0.6ｍの平坦面をつくり、石敷掘形端部から石材を据え、平坦面部に裏込めして護岸したことが土層断面から観察できる。このように護岸は石材を敷詰めた上に石積みを行い、裏込めして構築されていたと考えられるが、破却時に持ち去り・抜き取り・破砕・裏込め土の崩壊により壊滅したと考えられる。

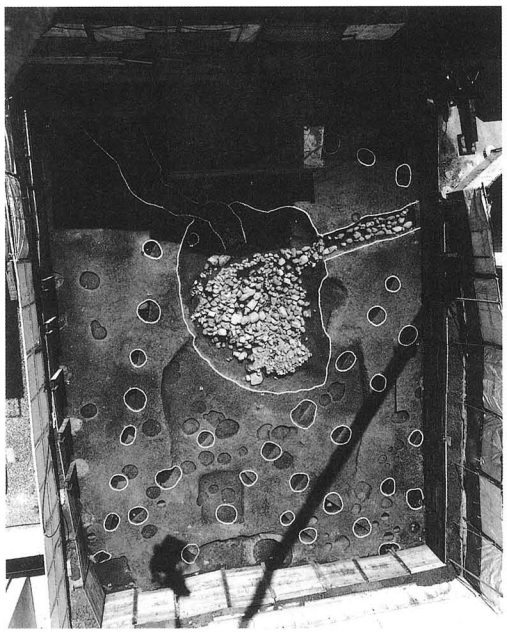


fig.21　第１遺構面全景

花崗岩による護岸を施した溝（ＳＤ01）は、扇形石敷きの「要」の部分に取り付き、石敷き面との落差約0.2ｍでＳＸ01に流れ込んでいる。ＳＤ01とＳＸ01際には樋等の水量を制御する施設があったと考えられるが、明確な制御施設は検出できなかった。また、ＳＸ01の南辺中央に取り付

く溝（ＳＤ02）は、溝底石敷きがＳＸ01石敷きに連なって施され、また石敷き掘形に接して石材の据付痕跡が検出されている。樋等の施設は検出されなかったが、ＳＸ01掘形際に直径0.2ｍ大の石材を据えるピットが検出され、何らかの樋相当の施設があったことが推察できる。

溝

遺構名	上端幅	底　幅	深さ	断面形	備　　考
ＳＤ01	0.7ｍ	0.4ｍ	0.3ｍ	逆台形	基部に２段以上の20～40㎝大の花崗岩をたて積み 埋土上層からは青磁碗底部・須恵器片・土師器片
ＳＤ02	0.5～0.7ｍ	0.2～0.3ｍ	0.5ｍ	Ｖ字形	

第２遺構面　第２遺構面では、竪穴住居２棟、土坑状の落ち込み３ヶ所を検出した。

ＳＢ201　方形の竪穴住居である。南西部では明確なコーナー部は検出できなかった。壁体沿いに幅0.2ｍ前後、深さ0.12ｍ前後の溝がめぐる。竪穴住居の壁体は削平されており、検出時点で住居の床面を検出している。床は暗褐色粘性砂質土に黄褐色砂を混えてつくられ、黄茶褐色粘性砂質土上面から貼り付けられる。周壁溝内から土師器細片が出土している。

ＳＢ202　竪穴住居の大部分は調査区外となり、規模などは明確にできなかった。壁体は0.1ｍ前後残り、壁体沿いに幅0.12ｍ、深さ0.1ｍ前後の周壁溝がめぐる。竪穴住居の床は暗灰黄色砂質土が厚さ0.06ｍ前後で黄茶褐色粘性砂質土上面から貼り付けられている。竪穴住居の北側には、住居に取り付く溝を検出した。溝は検出長2.4ｍ、上端部0.8ｍで断面Ｖ字形をしている。竪穴住居内埋土・溝埋土内からの出土遺物はない。

落ち込み

遺構名	形状	断面形状	直径（ｍ）		深さ（ｍ）	埋　土	遺物
ＳＸ201	円	皿状	1.05		0.24	暗茶褐色砂質土	なし
ＳＸ202	不定楕円	緩やかな皿状	1.6（南北）	2.0（東西）	0.12		なし
ＳＸ203	楕円	皿状	1.0（南北）	4.0（東西）	0.24	暗茶褐色砂質土	土師器

３．まとめ

概ね第１遺構面検出遺構の廃絶時期は苑池内の埋没土出土土器から鎌倉時代後半から室町時代前半を降らない時期、さらに第２遺構面は出土遺物が微量であるが、出土遺物に須恵器を含まない点から古墳時代前期以前と考えられる。

今回の調査では、第１遺構面で柵（ＳＡ01・02）に区画された敷地に、方位を概ね同一にした掘立柱建物２棟（ＳＢ01・02）を検出した。ＳＢ01は東・西・南に縁ないしは庇を設ける比較的大型の建物である。この建物の東縁庇に面して苑池（ＳＸ01）が造られている。苑池へは地形を利用して溝（ＳＤ01）を穿って北西から導水し、南東に溝（ＳＤ02）を穿って排水している。また、柵（ＳＡ01・02）直交して屋敷地の南東隅を画し、この苑池は屋敷地の南東隅地を利用した小規模な庭園であったことが、建物・柵の屋敷地内での位置関係から推察される。さらに、２棟の掘立柱建物は柱通りを揃えた一連の建物であり、柵との位置関係から屋敷地の主屋はＳＢ01の北西側に位置すると推察される。このように、鎌倉時代後半にたとえ小規模とはいえ庭園池を構え、縁庇をもつ建物を脇屋とする屋敷を営みえたのは、寺院もしくは荘園の在地領主に相当する地域の有力者層であったと考えられる。

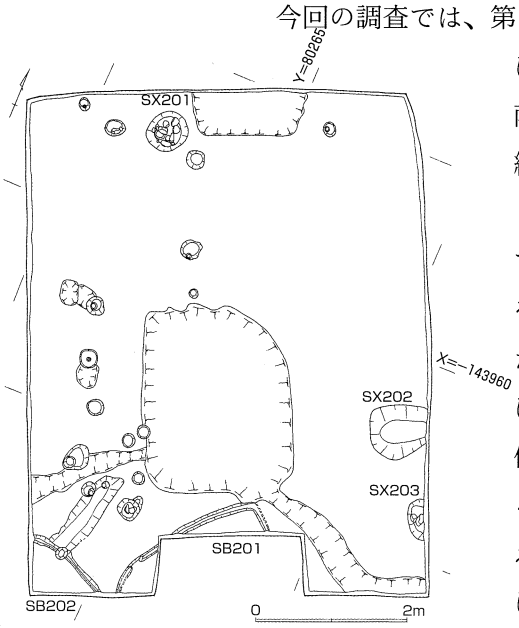


fig.22　第２遺構面平面図

4．楠・荒田町遺跡　第30次調査

1．はじめに

楠・荒田町遺跡は、旧湊川東岸の六甲山から派生する丘陵端部の段丘上に位置する遺跡で、市営地下鉄山手線の建設工事に先立つ工事立会によりその存在が確認された。昭和53年度に実施された発掘調査では弥生時代前期～中期を中心とする竪穴住居、貯蔵穴等の遺構、また銅鐸の鋳型等を含む多くの遺物が検出され、西摂地域の弥生時代の拠点集落の一つであり、出土土器は、弥生時代前期～中期の当地域の基準資料となっている。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、工事による掘削影響範囲について、発掘調査を実施した。

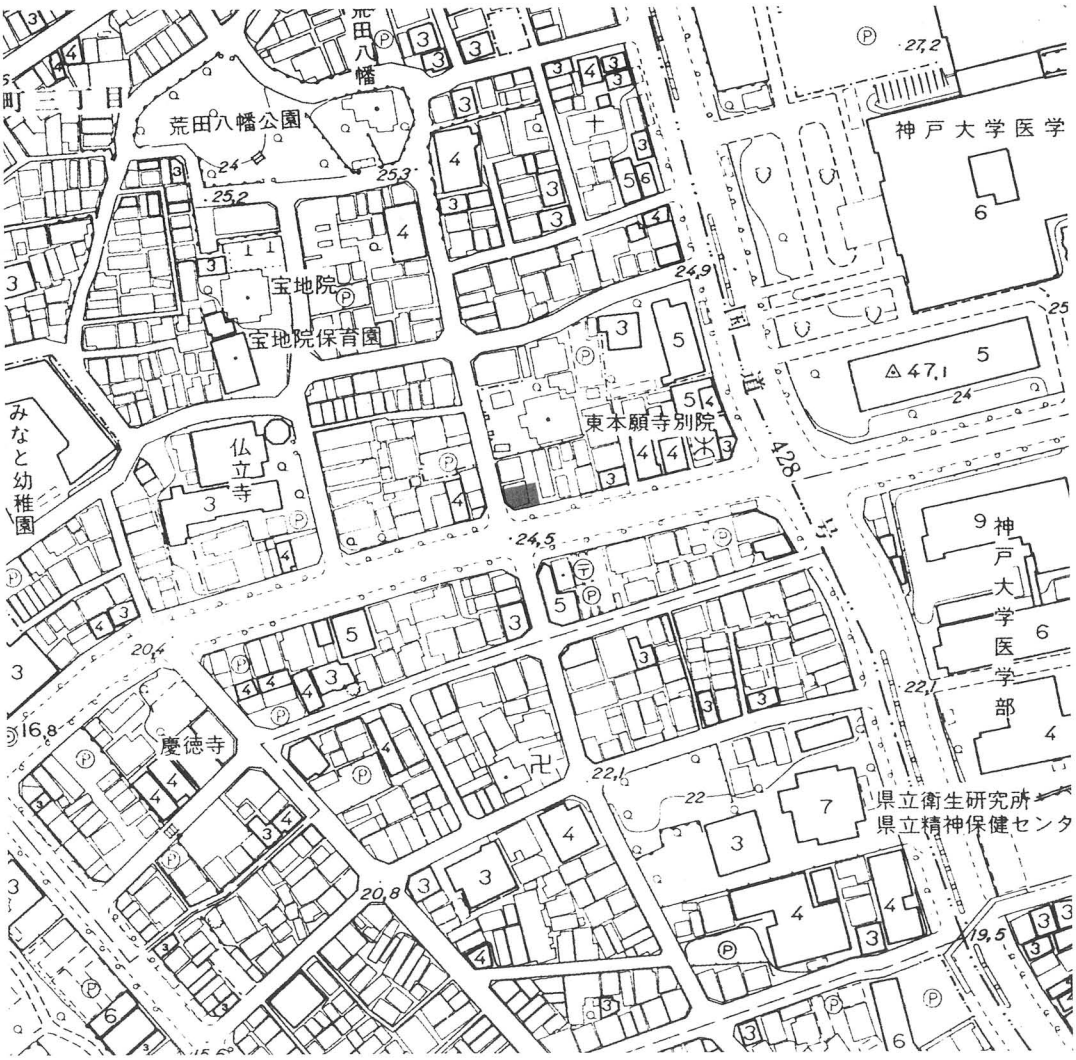


fig.23
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

基本層序　調査区内の基本土層は、近代～現代の盛土、撹乱層の下は遺物包含層である暗褐色砂質シルト（4層）であり、その下層が遺構面である暗茶褐色シルト質細砂（14層）である。地形は基本的には北から南へ緩やかに傾斜するが、調査区の中央部付近を中心に東、南西へも傾斜が確認される。現地表面から遺構面までは、0.7m前後である。

弥生時代 SP02　直径0.2m、検出面からの深さ0.14mのピットで、埋土は暗褐色砂質シルトである。弥生土器片が出土した。出土遺物から弥生時代中期と考えられる。

古墳時代

ＳＢ01　調査区東半部南側で検出した竪穴住居である。北側に竈を有している。東側及び南側は調査区外へと続くため全体の規模は不明であるが、竈を中心に復元すると、一辺約６ｍの規模であると推定される。深さは検出面から0.25ｍ前後である。

床面上には炭、炭化材が点在し、焼土もみられることから、焼失した竪穴住居であると推定されるが、床面上の焼成は大きくなく、炭の量からみても激しい火災により焼失したものではないと考えられる。柱については、ピット１基が検出されたが、撹乱が著しく、また、検出されたのが一部であるため、構成する柱数については不明である。

出土遺物は床面上から滑石製臼玉２点が出土した他、竈付近からは土師器の甑が出土した。また、竈の壁土にも遺物が混入しており、須恵器、土師器片が出土している。崩壊しやすい砂質の土壌につなぎとして混入している可能性も考えられる。この他、埋土中から須恵器、土師器片が出土している。出土した遺物の多くは微細な小片であるが、ＴＫ47～ＴＫ10型式にかけてのものと考えられる須恵器片が出土している。

ＳＢ02　調査区東半部南側で検出した竪穴住居で、東側は調査区外へと続き、南側はＳＢ01に切られており、全体の規模は不明である。検出面からの深さは0.1ｍである。出土遺物はない。

ＳＢ03　調査区西半部北側で検出した総柱の掘立柱建物である。東西２間、南北１間分を検出した。調査区北側へ延びるものと推定される。柱間はＰ2とＰ3の間が1.15ｍである他は、東西が1.25ｍ、南北が2.0ｍである。主軸はやや西に振る。ピットの直径は0.6～0.8ｍ前後、深さは0.2～0.35ｍ前後である。須恵器、土師器片が出土している。出土した遺物は微細な小片であるが、ＴＫ23～47型式にかけてのものと考えられる須恵器片が出土している。

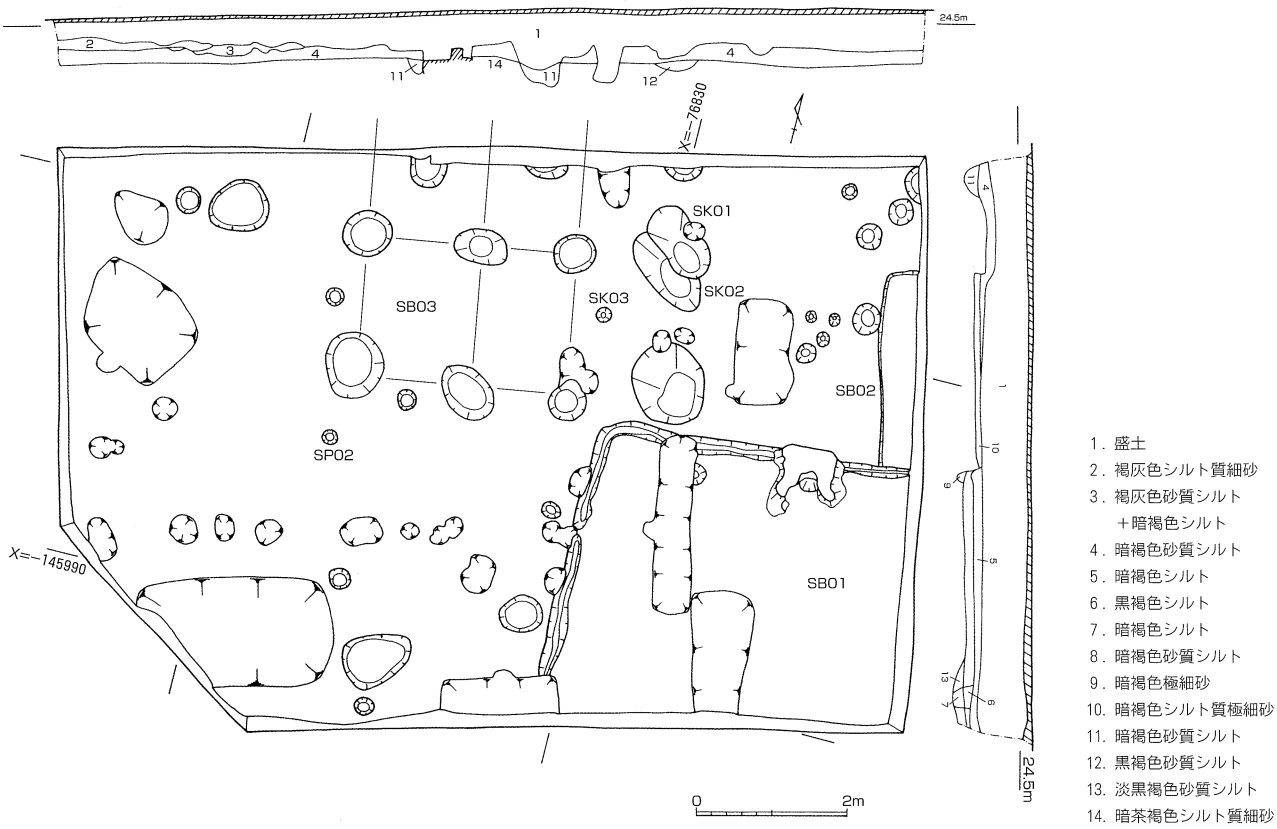


fig.24　遺構平面・断面図

土坑　ＳＫ01～03から出土した遺物はいずれも微細片であり、時期の特定は困難であるが、概ね６世紀前半（古墳時代後期）の時期が考えられる。

遺構名	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	形状	埋　　土	遺　物
ＳＫ01	1.08	0.56	2.2	楕円形	黒褐色粘質土、暗褐色粘質土	須恵器・土師器
ＳＫ02	1.2	0.6	0.2	楕円形	黒褐色粘質土	須恵器・土師器
ＳＫ03	1.1	0.9	0.32	不整円形	黒褐色粘質土	須恵器・土師器

ピット　22基を検出した。直径は0.15～0.8m前後、深さは検出面から0.1～0.3m前後である。遺物が出土したのはごくわずかであり、大半は出土遺物がなかった。

3．まとめ

今回の調査では古墳時代の遺構が中心に検出された。古墳時代の遺構は昭和53年度の調査でも６世紀前葉の竪穴住居が確認されていたが、今回の調査で古墳時代の遺構が荒田町４丁目付近にも分布することが確認された。特に、竪穴住居と掘立柱建物が確認された点は調査地付近に古墳時代の遺構が濃密に分布するものと推定され、集落の中心である可能性も想定される。

今回検出された竪穴住居と掘立柱建物の時期については、出土した遺物は微細な小片であるため、時期の特定は困難であるが、わずかな時期の確認できる遺物から判断すれば、竪穴住居ＳＢ01がＴＫ47～ＴＫ10型式にかけての時期が考えられ、ＳＢ02は出土遺物がなかったが、切り合い関係からＳＢ01よりも古く、掘立柱建物ＳＢ03はＴＫ23～ＴＫ47型式にかけての時期が考えられ、ＳＢ01よりも先行するものと思われる。

弥生時代の遺構については、遺物の出土が確認されたのは、ピット１基であり、遺物の出土も極めて少量であることから、調査地付近での遺構の存在は希薄である可能性が考えられる。

fig.25　ＳＢ01

5．兵庫松本遺跡　第４次調査

1．はじめに　兵庫松本遺跡は、六甲山系から流れる旧湊川をはじめとする幾つかの小河川によって形成された扇状地上に位置する。平成10年度に市営住宅建設に伴い初めてその存在が確認され、調査が行われた。その結果、弥生時代末～古墳時代初頭の住居、また弥生時代前期～古墳時代前期の自然流路が検出された。その後、数回調査が行われているが、遺構・遺物の密度が薄く、遺跡の内容を把握できるような資料は得られていない。

遺跡の周辺には、北に弥生時代中期～後期の集落である東山遺跡、東西には縄文時代末～中世の複合遺跡である楠・荒田町遺跡、上沢遺跡が存在している。

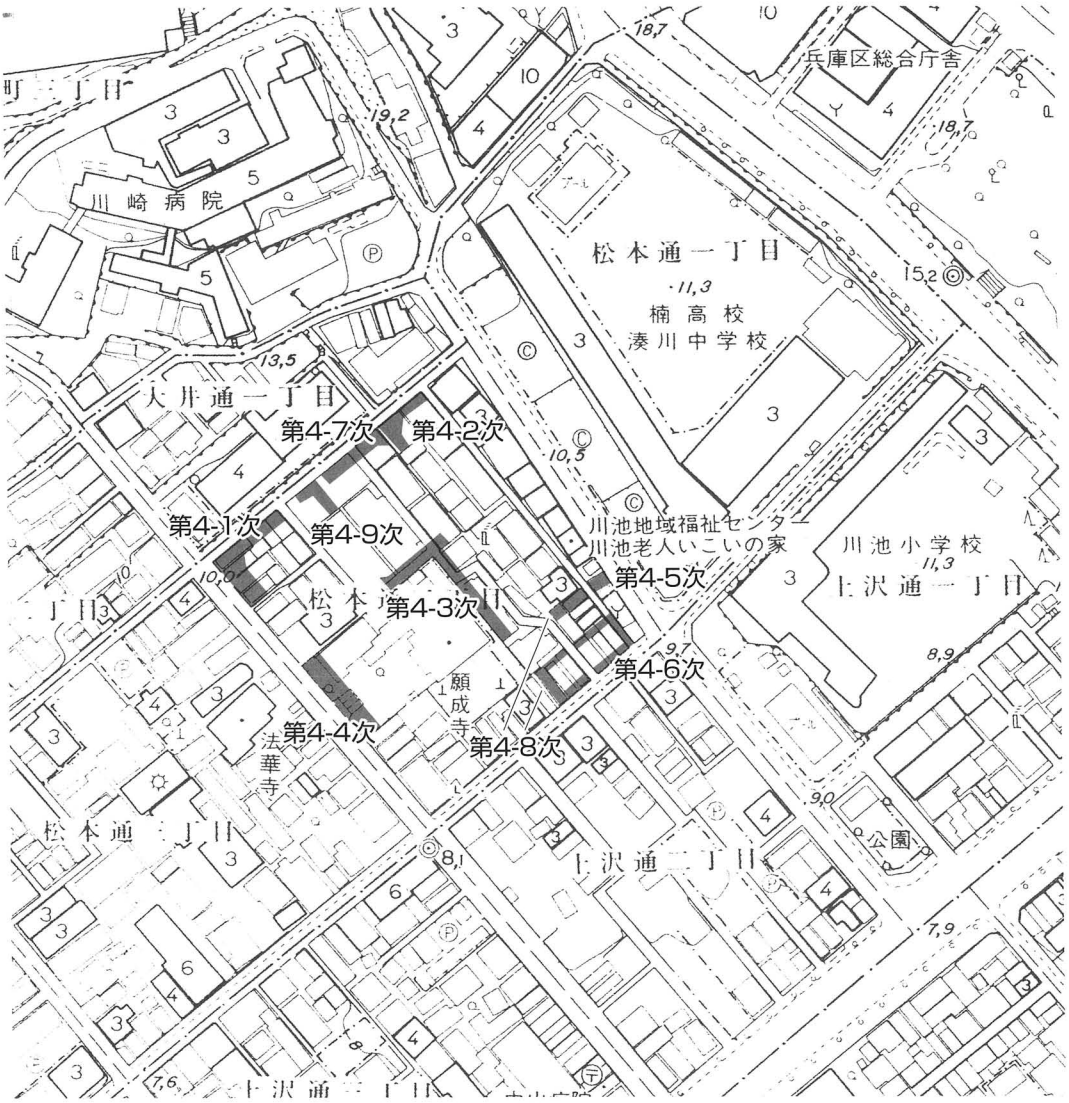


fig.26
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要　今回の調査は、平成11年度から継続して行われている区画整理事業に伴い、区画街路予定地の調査可能な箇所について調査を実施した。

調査の結果、弥生時代前期～中世の遺構・遺物を確認している。以後は調査区毎に時代を追って記述する。また第4-1次～第4-3次については、南北トレンチをⅠ区、東西トレンチをⅡ区と呼称する。

第4-1次調査　今回の区画整理計画地の北西隅に位置する調査地である。盛土・耕作土を除去すると中世の遺構面（灰褐色砂交じり粘質土）、さらに0.2m掘り下げると、古墳時代以降のベース面（灰黒色粗砂）、また0.3m掘り下げると、弥生時代前期（灰色シルト質極細砂）の遺構面が検出された。標高はそれぞれT.P.8.6～8.9m、8.6m、8.2mである。

中世　耕作に伴う溝５条、土坑３基、ピット２基を検出した。

鋤溝は、ほぼ2.0mの等間隔に並んでおり、幅0.3m、深さ0.05m～0.15mの規模をもち、北東～南西方向に延びている。底部には僅かに耕作具の痕跡が確認された。埋土は、灰色または灰黄色砂質土で、須恵器・土師器の小片が出土している。土坑は、ＳＸ101以外は窪みのようなものであった。ＳＸ101は、直径0.6m、深さ0.2mの楕円形の土坑で、埋土からは須恵器・土師器の小片が出土している。

古墳時代以降　Ⅰ区北端部分～Ⅱ区で、土坑２基・ピット７基を検出している。遺構は、ほとんど0.05mほどの浅い堆積で、明確な遺構は確認されなかった。Ⅰ区中央で、最大長7.0mの浅い落ち込みを検出したが、上層の土が堆積しており、窪みとして理解すべきものと考えられる。また地形は南に緩やかに下がっていく。

遺構面として検出することはできなかったが、断面観察および第4-2次の成果から、弥生時代中期～後期の生活面が存在しているようである。Ⅱ区で検出した２条の流路ＳＲ301・ＳＲ302がそれに当たると考えられる。東側は幅約4.0m以上、深さ0.8m、西側は幅約3.0m、深さ0.8mと比較的規模が大きい。埋土は灰色細砂～粗砂で、遺物はほとんど出土しなかった。

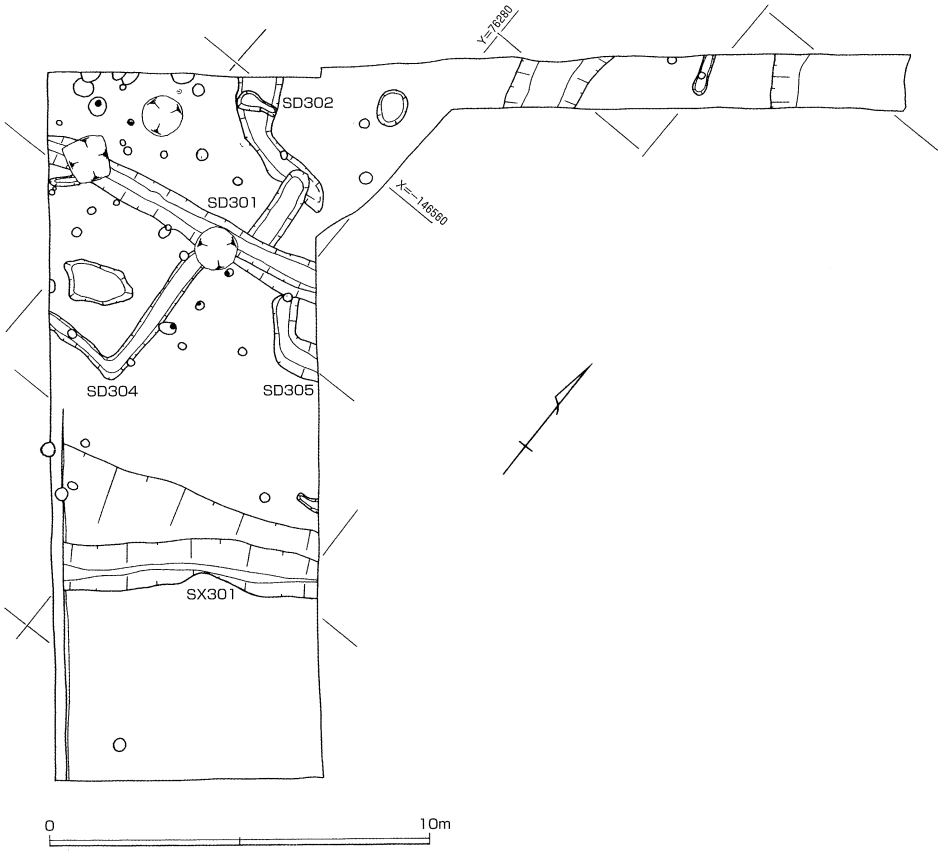


fig.27　第4-1次第３遺構面平面図

弥生時代前期　溝５条、土坑４基、ピット40基、落ち込みを検出した。なお、落ち込み以外からは時期の明確な遺物は出土していない。

溝　ＳＤ301は、自然地形に並行して掘削された溝で、その規模や断面形から集落内部を区切る溝のように考えられるが、遺物が細片のため明確な時期は判明していない。

遺構名	検出長（m）	幅（m）	深さ（m）	断面形	埋　土	遺物	備　考
ＳＤ301	8.0	1.0	0.3	U	暗灰色系のシルト	弥生土器	東西方向に直線的
ＳＤ302	4.0	1.0	0.15	Ⅲ	黒灰色砂質シルト	無	「く」字形に屈曲し調査区外へ
ＳＤ303	2.5	0.8	0.1	Ⅲ	黒灰色シルト質細砂	無	ＳＤ301のため南部分を消失
ＳＤ304	6.5	0.4	0.1	Ⅲ	暗灰色粘性細砂	無	「く」字形に屈曲しＳＤ301と合流？
ＳＤ305	2.0	0.6	0.1	Ⅲ	暗灰色粘性細砂	弥生土器	「く」字形に屈曲し調査区外へ

土坑　４基の土坑を検出している。Ⅱ区西端で検出したＳＫ302は、最大長0.9ｍ、深さ0.1ｍの楕円形で、埋土は暗灰色シルト質細砂である。埋土からは、弥生時代前期の土器が出土している。しかし他の土坑は、深さ0.05ｍ前後の浅い窪み状で、遺物は出土していない。

ＳＸ301　調査区のほぼ1/3をしめており、最深部は検出面から約0.5ｍの深さがある。北側ではなだらかな傾斜を形成し一旦急激に落ち込み、また徐々に高くなっている。埋土は３層に大別され、上・中層で大量の弥生時代前期の土器が出土している。土器はほとんど投棄された様な状態で出土しているが、肩部西端で検出した土器は据えられたような状況である。埋甕とも考えられるが、掘形は確認されなかった。なお、土器が捨てられた時点では、湿地状であったと考えられ、肩部付近や、Ⅰ区南端には多くの禺蹄目の足跡が確認された。

小結　今回は３面におよぶ遺構面を検出したが、明確な遺構を検出したのは、弥生時代前期と考えられる生活面だけであった。多量の土器が出土した落ち込みより北側に、ＳＤ301をはじめとする遺構が検出され、当時の集落の中心が近いことを示唆している。また弥生時代前期の土器とともに突帯文土器片も出土している。

第4−2次調査　今回の区画整理事業計画地の北東部分で、第3−3次調査区の西隣に位置している。盛土・耕作土・旧耕土・床土を除去すると、GL−1.0ｍ前後で中世遺構面および古墳時代遺物包含層、さらにその下には、弥生時代末〜古墳時代初頭遺構面を検出している。層位的には、布留式並行期・庄内式並行期に区分できると考えられる。またGL−1.3ｍ前後では、弥生時代中期頃の遺構面も確認している。GL−2.0ｍまで掘削を行ったところ、人頭大の礫を多く含む層を確認している。

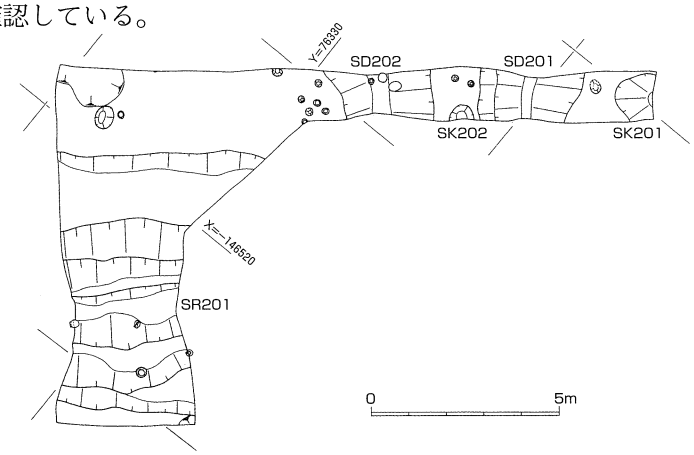


fig.28　第4−2次第２遺構面平面図

平安時代　調査区全体にピットを17基検出した。柱痕跡を確認したものはＩ区の１基のみで、それ以外は直径0.25～0.3ｍ、深さ0.3～0.4ｍで、暗灰色・淡乳茶色シルト質細砂～極細砂が堆積している。Ⅱ区西部に柱間2.5ｍで３間分の柵列状の遺構が検出された。

弥生時代末～古墳時代初頭　検出した遺構は溝２条、土坑２基、ピット16基、自然流路１条である。ただし調査区壁面の断面観察から若干の時期差をもつことが判明している。

溝　Ⅱ区で検出された遺構で、ＳＤ201が検出長1.4ｍ、最大幅2.3ｍ、深さ0.5ｍで断面形は開いたＶ字形、ＳＤ202が検出長1.4ｍ、最大幅2.9ｍ、深さ0.5ｍで断面形は逆蒲鉾形である。埋土に若干の差があるため時期差が存在する可能性はあるが、規模や方向性が共通することから、何らかの関連がある遺構と考えられる。

自然流路　Ｉ区のほぼ全域に位置し、規模は検出長3.6ｍ、幅5.2ｍ、深さ1.1ｍである。第１次調査のＳＲ01と同一のものと考えられる。北肩部で一旦テラス状の平坦面を形成し、そこから大きく落ち込む。また底面は凹凸が激しく一定していない。埋土は上層がシルト質細砂層、下層が砂礫層である。上層では、拳大の礫を多く含み、完形の庄内式土器が数点出土している。下層では、木葉文をもつ弥生時代前期の土器片が少量出土している。

弥生時代　溝１条・自然流路１条を検出している。溝はＩ区北西隅に位置し、規模は検出長4.3ｍ、幅1.4ｍ、深さ0.6ｍで南北方向に走っている。埋土は３層に分けられ、弥生時代中期と考えられる土器片が出土している。断面観察でも弥生時代末～古墳時代初頭の遺構面より下層から掘り込まれている。また自然流路の位置はほぼ変わっていない。弥生前期の遺構面は掘削深度が２ｍを超えると予想されたため、安全上から調査は行わなかった。

小結　この調査区では弥生時代前期～古墳時代初頭の自然流路を検出しただけではなく、平安時代の遺構面も検出した。この時期の遺構はこれまで確認されておらず、今後周辺で同時期の遺構のさらなる発見が期待される。

第4－3次調査　平成10年度に行なわれた第１次調査地点に接している。Ｔ字形の形状をした調査区は東西約24ｍ、南北約40ｍの範囲に及ぶが、堆積状況はほぼ同一である。盛土・耕作土・旧耕土・床土を除去すると、古墳時代遺物包含層若しくは、淡灰黄色砂質シルト（古墳時代初頭遺構面）を検出する。さらに１ｍ弱下層に黒灰色シルト（弥生時代前期遺物包含層）を検出する。その下層には灰色粗砂・砂礫といった河川堆積が確認された。

弥生時代末～古墳時代初頭　検出された遺構は竪穴住居２棟、掘立柱建物２棟、土器溜まり１ヵ所、溝６条、ピット41基を検出している。その他には南端では流路、西半では落ち込みを検出しており、それを境に遺構・遺物の分布が希薄になるため、集落域の境界となるものと考えられる。

ＳＢ101　Ｉ区北部に位置しているおよそ４×４ｍの方形の竪穴住居であるが、東半分が調査区外に延びている。また北は江戸時代末頃の井戸によって、南はＳＤ102によって切られている。大きく削平を受けており、深さは0.1ｍ程度であるが、検出した部分についてはほぼ周壁溝が検出された。またピットを数基確認しているが、主柱穴は検出されていない。北側は暗灰色シルトで盛土し、床面を仕上げている。埋土からは土師器片が出土している。

ＳＢ102　Ｉ区北東端部に位置しているおよそ６×６ｍの方形の竪穴住居で、ほぼ1/2を検出した。検出面からの深さは約0.3ｍで、比較的良好な状態で検出された。内部は幅1.3ｍのベッド状遺構が存在し、さらに床面には厚さ１～２㎝の貼床が施されていた。コーナー部に直径

0.2m、深さ0.5mの主柱穴を2基検出している。また一部の周壁溝底に板状の痕跡を確認した。埋土からは土師器が出土しており、特に上層からの出土が多かった。

SB103　Ⅰ区中央部に位置している2間×1間以上の掘立柱建物である。主軸方向は現在の地割と一致している。柱間は1.2～1.4mで、掘形直径・深さが0.2～0.3mで、直径0.2mほどの柱痕跡をもつピットで構成されている。また建物は西方向に延びるようである。埋土からは土師器片が出土している。

SB104　Ⅱ区中央部に位置し北側に延びる2間×1間以上の掘立柱建物である。柱穴はいずれも掘形で直径0.5～0.6m、深さ0.4m前後で、柱痕跡は0.1m前後である。埋土からは土師器片が数点出土している。

fig.29　SB102

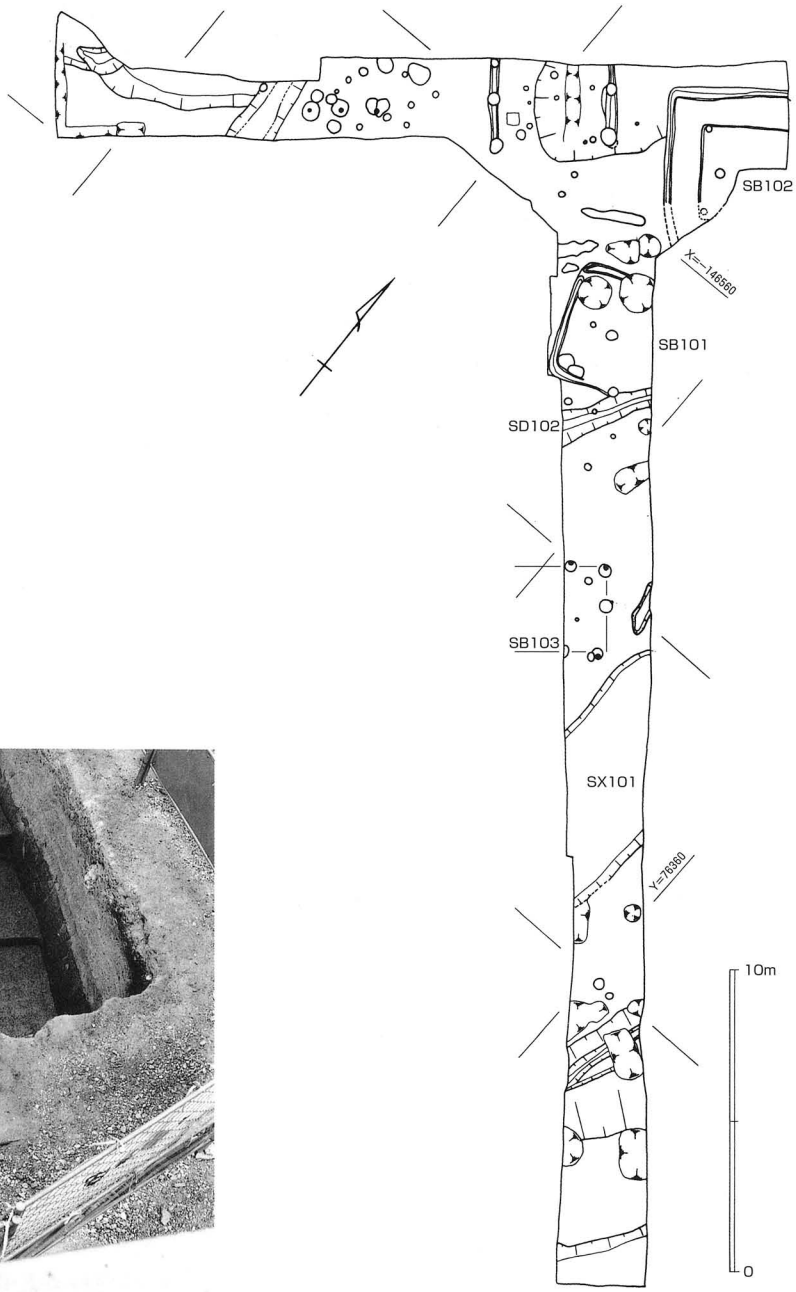


fig.30　第4-3次第1遺構面平面図

ＳＸ101　Ｉ区中央部に位置している検出長4.0ｍ、幅4.6ｍ、深さ0.2～0.3ｍの土器溜まりである。弥生時代末～古墳時代初頭の土器が多量に出土しており、完形の甕などの土器や人頭大の礫が出土している。土器は、遺構の肩部付近に比較的多量に分布する傾向がみられる。

底面は平坦で、ピットなどの遺構は確認されていない。

ＳＤ102　Ｉ区中央部に位置し、ＳＢ101を切る検出長3.2ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.3～0.4ｍの溝である。断面はやや崩れたＶ字形をしており、埋土からは土師器片が出土している。

ＳＤ107・108　Ｉ区北端部に位置している検出長3.0ｍ前後、幅0.3ｍ、深さ0.3ｍの並行した溝である。いずれも断面形は箱形で、暗灰色・灰黄色砂質シルトが混じった土で埋まっている。溝と重複して直径0.8ｍ、深さ0.6～0.7ｍのピットが溝の南端から1.3ｍの間隔で掘られている。南端のピットは溝上面から検出したが、他のピットは溝を掘り終えた段階で検出している。その検出状況から布掘りの掘立柱建物である可能性がある。

弥生時代前期　遺構面上層には弥生時代前期の遺物包含層が堆積しており、その中から削出突帯・多条沈線・貼付突帯をめぐらす壺・甕などの土器類と蛤刃石斧片が出土している。遺物包含層を除去すると、北側では灰色粗砂を、中央～南側では淡灰褐色砂質シルトをそれぞれ遺構面として検出した。残存状況は良好ではないが土坑９基、溝１条、不明土坑１基、ピット31基を検出した。

土坑　数基の土坑を除いてはすべて深さ0.05ｍ程度で、暗灰色シルトが僅かに堆積していた。その中で残りの良かったものはＳＫ201である。

ＳＫ201は長さ0.8ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.2ｍの規模を持つ長方形土坑である。埋土は黒灰色砂質シルトで、弥生土器の小片が出土した。

またＳＫ206～209は直径0.5ｍほどの円形土坑で、検出面から0.3ｍ程度掘り込まれていた。炭粒が混じった暗灰色細砂交じりシルトが堆積し、弥生時代前期の土器片を含んでいた。

ＳＸ201　Ｉ区中央やや北よりで検出された検出長一辺4.0ｍ、深さ0.1ｍ弱の竪穴住居状の遺構である。肩部はなだらかに落ち込み、周壁溝などは確認されなかった。

小結　第１次調査で検出した弥生時代末～古墳時代初頭の集落の一部を確認した。トレンチ状の調査ではあるが、遺構の広がりを押さえることができたことや、弥生時代前期の遺物包含層が広域に広がることなど大きな成果を得た。

第4－4次調査　区画整理用地の南西端にあたる調査地で、北側を平成12年度に行なわれた第3－2次調査地点、南側を第3－5次調査地点に挟まれている。調査区は、道路の拡幅部分で幅６ｍ、延長36ｍの南北に長い。

調査区の堆積状況は、ほぼ同一である。盛土・耕作土・旧耕土・床土を除去すると、中世の遺物を含む旧耕土状の淡灰色砂質土・褐灰色土を経て遺構面と思われる暗褐灰色砂質土・淡灰黄色粘砂を検出する。この層より下はシルト・細砂～粗砂・砂礫といった河川堆積が確認された。

中世～古墳時代　今回の調査においては、遺構のベース層となると考えられる暗褐灰色砂質土や淡灰黄色粘砂は検出されたものの明確な遺構等は確認されなかった。

弥生時代前期　先述の暗褐灰色砂質土・淡灰黄色粘砂層には弥生時代前期の遺物が含まれており、さら

に下層に堆積する砂・シルト層からも同時期の遺物が出土する。周辺の調査成果より弥生時代前期の流路が存在すると考えられる。さらに調査区の南側で検出された砂礫中からは縄文時代晩期頃の遺物が出土しており、より古い時期の流路が存在すると思われる。いずれの流路についても明確な肩は検出されていない。

小結　今回の調査では、明確な遺構は確認されなかった。遺構面の下層において検出された流路状の堆積も、第１次調査において確認されている弥生時代前期の遺物を多量に含む流路とも違うようである。しかし、さらに下層に縄文時代晩期の遺物を含む流路が存在することが確認された。

ただ前回の第3-5次調査との成果ともあわせて、遺構の存在が希薄なことや流路に含まれる遺物も少量であることなどから、やはり今回の調査地付近が遺跡の西限および南限である可能性が高い。

第4-5次調査　今回の区画整理計画地の南東隅付近で、平成12年度の第3-4次調査区の北隣に位置している。現在の遺跡分布範囲の東端であったが、現地表面から盛土・旧耕土層を除去したGL-1.0mで古墳時代初頭の遺物包含層・遺構面を検出した。その下層には灰色砂礫など河川状堆積が確認された。

弥生時代末～古墳時代初頭　検出された遺構は土坑２基、溝１基、ピット６基である。北東部では削平が激しく、遺構は確認されていない。

土坑　ＳＫ101は長さ1.6m、幅1.2m、深さ0.15mの不整形な長楕円形土坑である。暗灰褐色シルトの埋土からは土師器片とともに、穿孔のある小型の砥石が出土している。ＳＫ102は直径0.8m、深さ0.15mの円形土坑である。埋土から土師器片が出土している。いずれの土坑も削平を受け浅く、底面も凹凸があり一定していない。そのため墓坑のようなものではないと考えられる。

ＳＤ101　調査区南西隅で検出された南北方向に走る溝である。検出長2.3m、幅0.7m、深さ0.2mで、断面形は開き気味のＶ字形、底面はピット状の窪みがあり一定していない。埋土からは土師器片が出土している。

ピット　ほとんどが直径0.3m前後の規模で、半数のピットで直径0.15m、深さ0.2～0.4mの柱痕跡を確認している。これまで検出されてきた建物の柱間と同様な規模であるため掘立柱建物である可能性が高い。柱穴からは土師器片が出土している。

小結　今回の調査では、削平は受けているが良好な遺物包含層と遺構面を検出し、第3-3次調査の結果と異なる成果を得た。しかし北東方向では削平が激しく、包含層・遺構が検出されず、おそらく遺跡の東限は２丁目の区画内に収まる可能性が高い。また南側には流路状のものが存在するものと推定される。

第4-6次調査　北・東側は擁壁部分、南側は道路拡幅部分に相当する。西接する個人住宅部分と一括して調査を行っており、以下の遺構の記述についてはそれを含めて行う。

堆積状況は第4-5次とほぼ変わらない。ただし西部分では遺物包含層は希薄であった。淡茶灰色シルト質

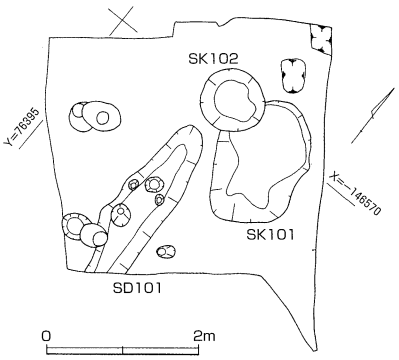


fig.31　第4-5次遺構平面図

細砂の上面で掘立柱建物１棟、溝５条、ピット４基を検出した。

ＳＢ101　南半部で検出された１間×３間以上の掘立柱建物である。柱穴はいずれも直径0.3ｍ前後、深さ0.3ｍで、柱痕跡は直径0.2ｍ前後である。東西の柱間隔は約1.3ｍ、南北約2.8ｍである。建物方位は現在の地割とほぼ同様である。柱穴から土師器の小片が出土している。

その他遺構　溝は５条検出しているが、大半が幅0.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍほどの規模である。ＳＤ103は幅1.0ｍ、深さ0.3ｍと規模はやや大きいが、個人住宅部分に延びており未調査分が多く不明な点が多い。

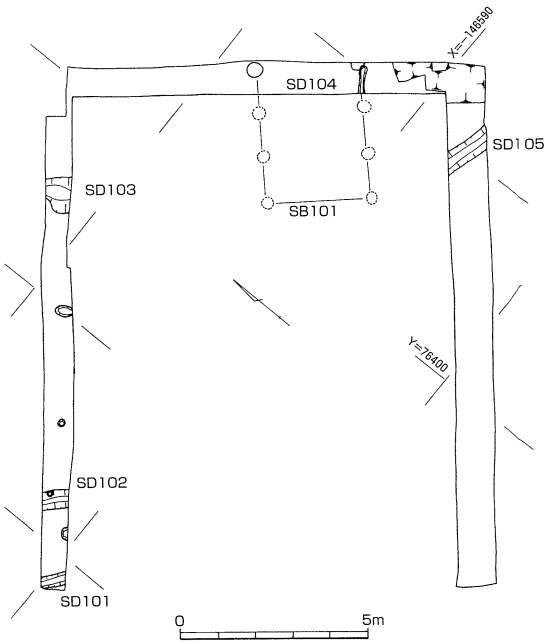


fig.32　第4-6次遺構平面図

またピットも検出しているが、小規模で建物を構成するものとは考えられない。

小結　この調査区では、これまで遺構が乏しいと考えられた街区南側を考える上で大きな成果が得られた。さらにこの周辺で掘立柱建物などの遺構が存在する可能性が高く、遺跡の範囲が南に広がる可能性を示している。また、北東部で確認されている遺物包含層は大きな落ち込みの埋土である可能性がある。

第4-7次調査　道路拡幅部分に相当する。市営住宅入口部分に接していることや既存埋設管保護のため、調査区を３分割して調査を実施した。

遺構面は平安時代後半・弥生時代末～古墳時代初頭・弥生時代前期の３面を検出した。

平安時代後期　弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層上面で検出した遺構面で、柵列２列・溝１条・ピット８基を検出している。

柵列　調査区東半部で検出したＳＡ101・中央部で検出したＳＡ102があり、どちらも柱穴が直径0.3ｍ前後、深さ約0.4ｍ、柱痕跡は約0.2ｍ程度の規模で、柱間距離は約2.0ｍある。前者は５間分を検出しており、そのうち１基には、平安時代後期の須恵器椀が柱の抜き取り後に埋められた状況が確認できた。

一方後者は、２間分を検出したのみで、目立った特徴はみられない。

溝　調査区東端で検出した幅0.4ｍ、深さ0.2ｍの南北方向の溝である。埋土は淡灰褐色粗砂混じりシルトの単層で断面形は逆蒲鉾形である。埋土からは土師器小片が出土したのみであった。

弥生時代末～古墳時代初頭　遺物包含層を除去した後に検出した遺構面で、溝１条・河道１条・落ち込み１ヶ所を検出した。

河道は落ち際を検出したのみに止まっており、全体の規模等は不明なことが多い。

また、落ち込みは、遺物包含層の土が幅約3.5ｍで、深さ0.4ｍの範囲に堆積するものであった。

明確な遺構として捉えられたものは、調査区東半部で検出した溝ＳＤ204だけであった。

規模は幅0.3m、深さ0.2mである。濁灰褐色砂質土が堆積しており、断面形はU字形である。遺物は出土していない。

弥生時代前期　上層の遺構面・間層・弥生時代前期遺物包含層を除去した面で遺構を検出した。遺構は東端および西端に検出された。遺構は、土坑・溝・河道を各1基検出した。

ＳＫ301　東端に検出された長さ約0.9m、幅約0.6m、深さ約0.3mの規模の隅丸方形土坑である。断面は若干いびつな逆蒲鉾形で底面は一定ではない。埋土は、暗灰色シルトで炭粒が多く交じっており、土器片・サヌカイト剥片が出土している。

ＳＤ301　調査区西端で検出した南北方向の溝である。規模は幅1.3m、深さ0.2mで、断面形は皿形である。埋土からは遺物は出土していない。断面観察等から上層の落ち込みは、この溝を踏襲して形成されていたようである。

ＳＲ301　調査区東端で検出した河道である。上層の河道とほぼ同じ場所で検出した。灰色粗砂がかなり鋭角に落ち込んでいる。既存埋設管の保護により未調査の部分が多くあり、幅・深さ等不明な点が幅5mを超える規模と推定される。埋土からは弥生土器片が出土している。

小結　第4-2次調査と同様に平安時代後期の柵列等が検出され、都市計画対象地のさらに北側に遺跡が広がる可能性が高くなった。

しかし弥生時代末～古墳時代初頭の遺構はわずかに検出されるのみに止まった。これまでの調査と同様、自然河道の右岸での遺構の希薄さをより鮮明にした。

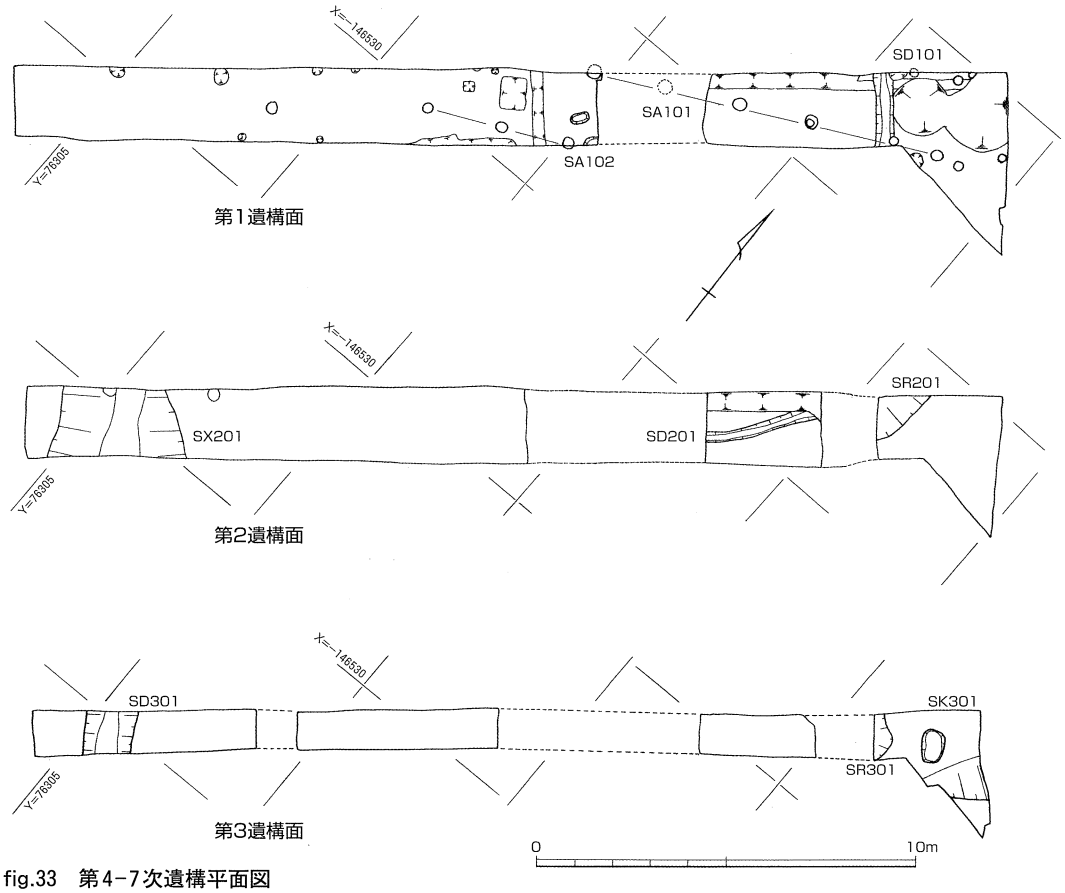


fig.33　第4-7次遺構平面図

第4-8次調査　道路予定地部分と擁壁部分の調査である。北東側の調査区をⅠ区、南西側の調査区をⅡ区と仮称する。

基本層序　Ⅰ区の基本層序は、盛土・洪水砂・旧耕土・黄褐色粘性砂質土（旧床土）・灰褐色砂および暗褐色粘性砂質土（遺物包含層）・暗茶灰色粘性シルト・茶灰色細砂質土・淡褐灰色細砂である。以下、深掘で下層を確認したが、淡黄褐色細砂質シルト・淡灰色シルト・淡褐色細砂・淡褐灰色シルトとなり、標高6.8ｍで湧水が確認された。なお、淡灰色シルト層上面で縄文時代と思われる土器片がごくわずか出土した。

Ⅱ区の基本層序は、盛土・濁灰色砂質土・淡灰茶色細砂質土・黄褐色粘質土（床土）・灰褐色粘性砂質土・暗灰色粘性砂質土（マンガン含む）・黄灰色粘性シルト・灰黄色粘性シルト・灰茶色シルト・暗黄褐色シルト・淡黄褐色シルト・茶灰色細砂・淡褐色シルト質細砂（遺構基盤層）で、ほぼ水平な堆積を示す。遺構面のレベルは7.5～7.75ｍである。Ⅱ区-2調査区において、下層確認のため一部深掘をおこなったが、以下淡黄灰色シルト・淡黄灰色粘性細砂・淡黄灰色細砂・淡青灰色シルト・淡青灰色極細砂（植物遺体含む）・植物遺体層・青灰色粗砂となり、湧水が認められた。

淡黄灰色シルト層よりサヌカイト片が１点出土している。

Ⅰ区

第１遺構面　黄褐色粘性砂質土を除去した後、調査区東半は遺物包含層上面で、調査区西半は灰褐色砂層上面で検出した遺構面である。ピット、土坑、溝を確認した。遺構面の時期は、近隣の調査結果から、平安時代後半から鎌倉時代にかけてと思われる。

東半のピット群は東西方向に並ぶものがみうけられるが、掘立柱建物としては確認できなかった。遺構の埋土は、ほとんどが暗褐灰色シルト質土である。

第２遺構面　調査区東半で、暗褐色粘性砂質土を除去して検出した遺構面である。溝、ピット、土坑を検出した。遺構面の時期は、弥生時代後期から古墳時代初頭と思われる。

ＳＤ201　調査区中央で検出した溝である。東西方向に緩く弧を描く。幅1.8ｍ、深さ0.4ｍで、埋土は上層が暗褐色粘質土、中層が暗褐灰色粘性砂質土、下層が灰褐色粗砂である。遺物は、弥生土器とサヌカイトが出土している。

ＳＸ201　調査区中央で検出した深さ0.1ｍほどの浅い落ち込みである。遺物は、庄内式期に属すると思われる土器が出土している。

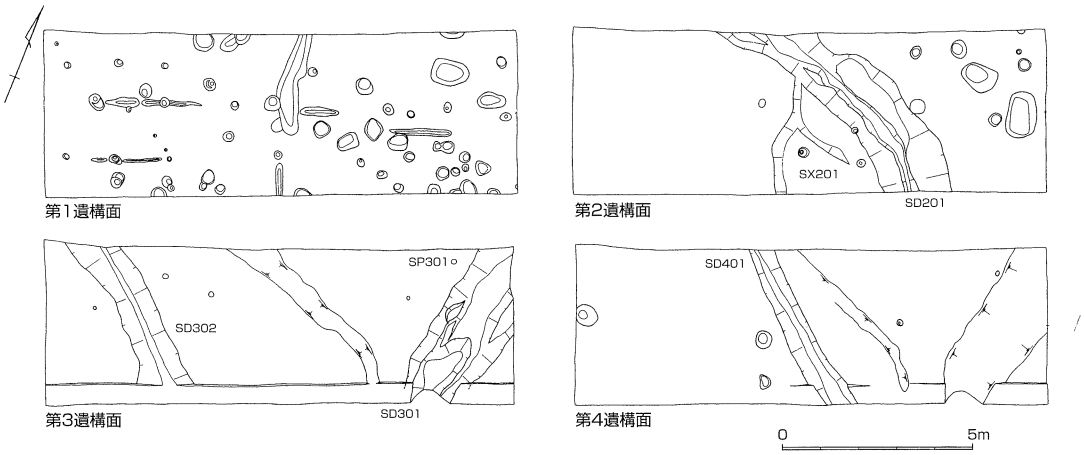


fig.34　第4-8次Ⅰ区遺構平面図

第３遺構面　暗茶灰色粘性シルト上面で検出した遺構面である。溝２条とピットを検出した。遺構面の時期は、弥生時代中期と思われる。

ＳＤ301　調査区西端で検出した南北方向の溝である。幅1.9ｍ、深さ0.8ｍで、埋土は黄褐色砂から暗褐灰色砂である。強い水流があったようで、壁面や底面は平坦ではなく凹凸が著しい。遺物は弥生土器が出土している。

ＳＤ302　調査区東半で検出した北西～南東方向の溝である。幅1.1ｍ、深さ0.3ｍを測り、断面は浅いＶ字形を呈する。遺物は弥生土器が出土している。

ＳＰ301　ＳＤ301西側で検出したピットである。直径0.24ｍ、深さ0.27ｍで、埋土は暗茶褐色粘性細砂質土を主体とする。遺物は、弥生土器が出土している。

第４遺構面　淡褐灰色細砂層上面で検出した遺構面である。中央部から西は緩く傾斜していき、約0.2ｍ深くなる。遺構は、溝とピットを検出した。遺構面の時期は、弥生時代前期から中期にかけてと思われる。

ＳＤ401　調査区中央で検出した北西～南東方向の溝である。幅0.86ｍ、深さ0.33ｍで、埋土は暗褐灰色シルト質細砂を主体とする。遺物は、弥生時代中期の甕形土器が、底部が欠損しているもののほぼ直立した状態で出土している。検出は第４面であったが、出土遺物から考えると第３面での遺構であった可能性が高い。

Ⅱ区－1　工事影響深度の関係で現地表下１ｍの灰茶色シルト層までしか掘削していない。遺物は、旧耕土および黄灰色粘性シルトより土師器が出土している。遺構は確認できなかった。

Ⅱ区－2　西側は現在も排水路が供用されているため、調査予定範囲は全掘できていない。

灰褐色粘性砂質土層以下、各層ごとに精査をおこなったが遺構は確認されず、現地表下約1.3ｍの淡褐色シルト質細砂層上面でピット、土坑を検出した。遺物は黄灰色粘性シルトから土師器、灰茶色シルト・淡黄褐色シルト・茶灰色細砂から弥生土器が出土している。

各遺構の埋土は茶灰色細砂で、深さ0.1ｍ以下の浅いものがほとんどである。遺構からは、小片ながら弥生土器が出土している。

Ⅱ区－3　Ⅱ区－2同様、淡褐色シルト質細砂層上面で土坑、ピットを検出した。遺物は、黄灰色粘性シルトから土師器、灰茶色シルト・茶灰色細砂から弥生土器が出土している。

各遺構の埋土は茶灰色細砂で、深さ0.1ｍ以下の浅いものがほとんどである。遺物は、弥生土器が出土している。

Ⅱ区－4　調査面積が著しく狭小であったため、明瞭な遺構を確認するにはいたらなかった。

小結　今回の調査では、Ⅰ区において４時期の遺構面を検出できた。第１遺構面はピット群が検出され、掘立柱建物が存在した可能性がある。第２面以下は溝が主体となるが、東西と南北の２方向が認められる。遺物は、弥生時代中期の土器が出土しており、当該期の遺構の分布に関して新たな資料を得ることができた。

またⅡ区－2、Ⅱ区－3では、淡褐色シルト質細砂層上面で遺構が検出され、当遺跡の範囲が南側にも若干拡がる可能性が高まった。

第4－9次調査　今回の調査は区画道路予定地にあたり、西に隣接する個人住宅新築予定地と一括して調査を実施した。以下の記述については個人住宅新築予定部分（第８次調査）も含めて行う。

隣接する第4－1次・第4－7次調査地点の調査成果と同様、弥生時代前期から平安時代後

半の３面の遺構面を検出した。

第１遺構面　平安時代後半の遺構面で、弥生時代末から古墳時代初頭の包含層上面で検出された。南西方向に緩やかに傾斜しており、溝・土坑等が数基検出されたにとどまる。

ＳＫ101　長径約2.2ｍ、短径約1.7ｍ、深さ0.15ｍを測る不定円形の土坑である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ102　長径1.8ｍ以上、短径約1.6ｍ、深さ0.15ｍの不定形の土坑である。埋土より直径10㎝程度の円礫を10数点検出したが、遺物は出土しなかった。

ＳＤ101　幅約1.5ｍ、深さ約0.6ｍの溝で、調査区を東西方向に流れる。埋土より平安時代後半の遺物が若干出土した。

ＳＸ101　深さ0.1ｍ程度の不定形の落ち込みで、調査区の西側に続く遺構である。遺物の出土はなかった。

ＳＸ102　短辺1.8ｍ、長辺2.6ｍ以上の不定形の遺構である。遺物の出土はない。

第２遺構面　弥生時代末から古墳時代初頭の遺構面である。南西方向に緩やかに傾斜しており、溝と不明土坑が検出されたにとどまる。

ＳＤ201　幅約2.0ｍ、深さ0.8ｍの溝で、調査区のほぼ中央を南北方向に流れる溝である。埋土より当時期の遺物が少量出土した。

ＳＸ201　短辺約2.3ｍ、長辺約3.7ｍの不定形の遺構である。北端部は逆Ｌ形に曲がる溝が付設されている。当溝の用途は不明である。南辺部は２段に落ち込み、南壁に取り付く溝が確認できた。用途は不明である。

第３遺構面　弥生時代前期後半の遺構面で、南方向に緩やかに傾斜している。柱穴、土坑等が数基検出された。

ＳＰ301　直径約0.5ｍ、深さ0.3ｍの柱穴で、弥生時代前期後半の壷が、約1/2個体分出土した。対応する柱穴は検出できなかった。

ＳＫ301　短辺約0.5ｍ、長辺1.0ｍ以上、深さ約0.05ｍの土坑である。杭状の木製品の痕跡が検出された。

小結　弥生時代前期後半の遺構・遺物は比較的豊富で、第4-1次調査地点の様相と類似している。第4-7次調査地点では、当時期の遺構の分布は希薄である事から、前期の居住域の広がりは、北西方向から南東方向に伸びる微高地上に展開することが判明した。弥生時代末以降の遺構分布は希薄になり、第4-3次地点で見られたような居住域は、当調査区までは展開しない。平安時代後半も同様であり、以降は生産域として利用されている。

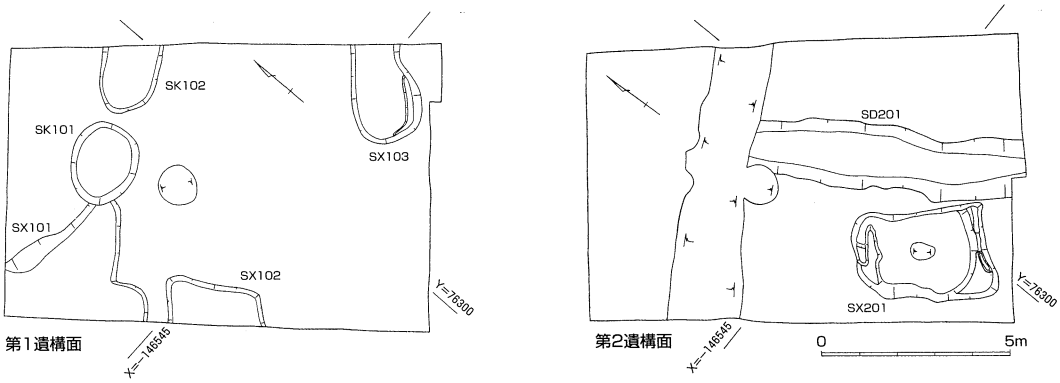


fig.35　第4-9次遺構平面図

3．まとめ

今年度は、現在のトレンチ調査であるが遺跡範囲内を満遍なく調査することができた。その結果、第4-4次調査区では明確な遺構は確認できなかったが、他の調査区からは縄文時代末～中世の遺構・遺物が発見された。今回の重要な成果として挙げられるのは、街区北側で検出された平安時代後期の柵列などの遺構群である。これまで遺物は出土していたが、柱穴などの遺構は確認されておらず、第4-2次・4-7次・4-9次調査区を中心として集落が形成された可能性が高くなった。

また、第１次調査で確認された弥生時代末～古墳時代初頭の集落が、さらに南東側に延びていることが判明した。第4-3次調査区は集落の中心と考えられ、竪穴住居・掘立柱建物などが４棟も検出された。また第4-6次調査区で検出された掘立柱建物も方位や規模から同時期のものと考えられ、集落が２丁目街区の南端まで広がっていたことが判明した。一方、第4-4次調査区など遺跡の西側は弥生時代末～古墳時代初頭の建物などは確認されず、流路や湿地のような地形が広がっていたものと考えられる。

第１次調査では、流路肩部で土器を集積させた祭祀遺構が検出されており、今回も同じ流路から鋸歯文を施した壺や、赤色顔料が塗布された高坏などの遺物が出土しており、周辺で祭祀が行われていたことが推測される。一方、第4-6次調査区では西部瀬戸内地域の影響を受けた壺、第4-2次調査区では讃岐もしくは河内産と考えられる壺片が出土しており、兵庫松本遺跡の交流範囲を考える上で重要な遺物であるといえる。

若干であるが、弥生時代中期と考えられる遺構が第4-2次・4-8次調査区で検出された。これまでこの時期の遺構は確認されておらず、集落が縄文時代末～古墳時代初頭に至るまでほぼ途切れることなく営まれた集落であることが判明した。また北隣に位置する東山遺跡との関係も今後考えていく必要がある。

さらに今回の調査では、これまであまり明確ではなかった弥生時代前期の遺構・遺物が比較的多く検出された。遺構は主に北部から中央部に存在し、ほとんどは浅い窪みもしくは土坑であった。しかし第4-1次調査区では溝やピットなどが密集して検出されており、当時の集落が現在の遺跡範囲の北東隅を中心に広がっていたものと推測する。また遺物の大半は遺物包含層からの出土であるが、ヘラ描き沈線を２～５条施す甕や、削出突帯・貼付突帯を施す壺などが出土した。これらの遺物からおそらく遺構面は前期後半に属するものと考えられる。しかし、第4-2次調査区のＳＲ201から木葉文土器が出土していることや、下層の砂礫層から突帯文土器がわずかながら出土することから、兵庫松本遺跡周辺に縄文時代末～弥生時代前期中頃の遺跡が存在する可能性がある。

6．大開遺跡　第10次調査

1．はじめに

大開遺跡は、六甲山系南面、旧湊川右岸の沖積地に所在する。これまでの９次にわたる発掘調査の結果、縄文時代晩期から近世にいたるまでの遺構・遺物が確認されている。とりわけ1988年、はじめて行われた発掘調査で、弥生時代前期前半の環濠集落のほぼ全域が確認され注目をあびた。その後、第１次調査の東で行われた第５次調査・第８次調査で第１次調査のものとは別の環濠と思われる時期的にもやや新しい溝が確認され、大開遺跡における弥生時代集落の変遷についての手掛かりが得られるようになった。しかし、これらは小面積の調査で、それぞれで確認された溝同士の関係、また、どの位置に集落が展開するのかも明らかにされていなかった。

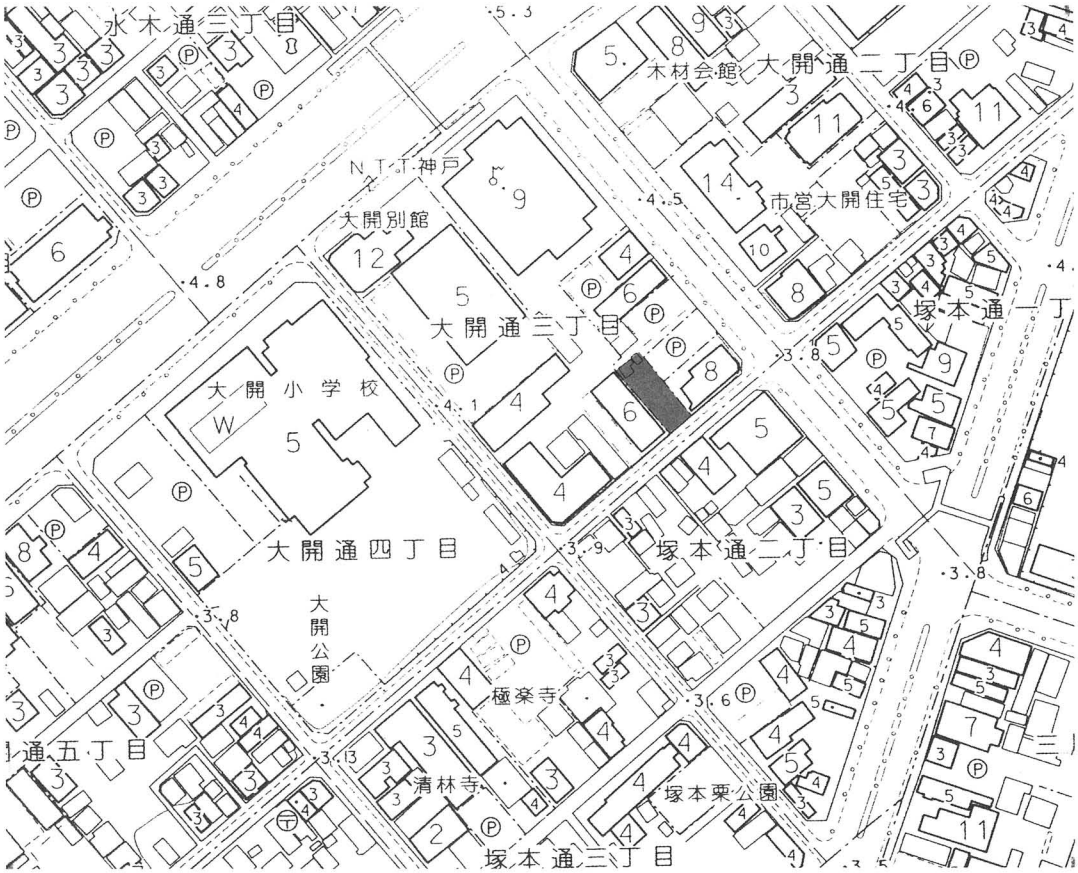


fig.36
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

遺構面

今回の調査は集合住宅の建設によって遺跡が破壊される範囲・深度について実施した。発掘調査の結果、４面で遺構を検出した。それぞれの標高は以下の通りである。

現　地　表	（1a層上面）	：約4.4～4.1m
第１遺構面	（5a層下面　中世）	：約3.4～3.5m
第２遺構面	（5b層下面　古代～中世）	：約3.2～3.5m
第３遺構面-1	（6a層下面　弥生時代前期）	：約3.2～3.3m
第３遺構面-2	（6b層下面　弥生時代前期）	：約3.1m

この遺跡は遺構の検出が困難で、淡い色のシルト層である場合など遺構の底面が明瞭な場合、この底面を追っていくと検出時のプランとおよそ違ってくるということがある。過

去の調査における遺構プランが不整形であるのもそのためであろう。

第2面の検出時に第3面の遺構の一部、炭などを多く含むものについてはこれを検出できるものがあった。また環濠についても平面的には確認できなかったが、土層断面を観察すると6a層のうちから切り込まれているようである。したがって第3遺構面で確認した遺構のほとんどは本来第2遺構面を確認した面から掘り込まれたものと考えられる。

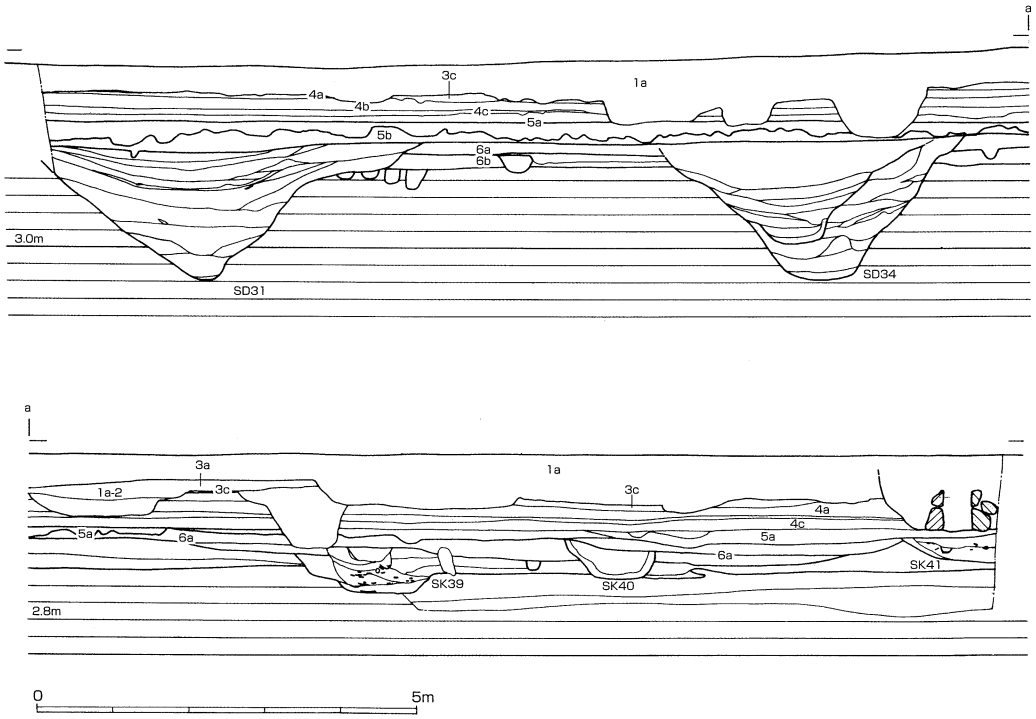
また第3遺構面-2で検出した遺構のうち、土層断面観察の結果、明らかに第3遺構面-2のものと確認できた遺構も存在するが、第3遺構面-1から切り込まれたものであることを確認できたものも存在する。両遺構面はその弁別が困難であり、時期的にも共に弥生時代前期であるため、ここでは両面をあわせて報告する。

なお第3遺構面の調査完了後、下層の状況を確認するため、一部断ち割りをおこなったが、この範囲内では下層に遺構・遺物は確認されなかった。

第1遺構面　中世の遺構面。畠の耕作痕と掘立柱建物が検出された。

畠　この耕作痕に対応する耕土である5a層から出土した遺物の主体は中世のものである。より細かな時期の比定は遺物の整理後に行いたいが、中世でも後半のものであると思われる。なお、注意すべき遺物として馬の歯と動物の骨4点が近接した位置から出土している。

SB01　同じ面で確認された畠より新しい遺構である。真北から西へ32°振った方向に主軸をもつ掘立柱建物で、柱は南北2間×東西2間分が検出されたが、調査区外に建物の範囲は拡がるものと思われる。南北の柱間は約1.8m、東西の柱間は約2.5m。柱穴プランは直径約0.25～0.3mの円形ですべてに直径0.1～0.15mの断面円形の柱痕が残る。出土遺物は小破片ばかりで、遺物からの時期判断は困難だが、畠との関係、また埋土の色調などから中世でも新しい方、あるいは近世のものである可能性が考えられよう。



1a.現表土（盛土・撹乱土）
1a-2.1945年戦災後の整地土
2a.1945年戦災時表土
3a.1938年以降1945年以前の表土
3c.1938年阪神大水害の際の洪水砂
4a.1938年までの表土
4c.洪水砂
5a.中世の耕土
　下面が第1遺構面
5b.にぶい黄褐色砂交じり粘土
　下面が第2遺構面
6a.灰黄褐色シルト質粗砂
　含弥生時代前期遺物
　下面が第3遺構面
6b.にぶい黄褐色シルト交じり粗砂
　含弥生時代前期遺物
　下面が第4遺構面

fig.37　調査区西壁土層断面図

第２遺構面　5b層下面で検出される遺構面。平安時代後期から室町時代にかけての遺構面。掘立柱建物・土坑・柱穴などが検出された。

ＳＢ02　調査区南部で検出された掘立柱建物で、真北から西に35°振った方向に主軸をもち、南北４間（8.0m）×東西１間が検出された。東の調査区外に建物の範囲は拡がるものと思われる。南北の柱間は約1.8～2.2m、東西の柱間は約2.1～2.2m。柱穴プランは直径約0.3～0.4mの円形でそのうち４本に直径約0.2mの断面円形の柱痕が残っていた。Ｐ4の柱痕内から土師器小皿１枚が出土している。出土した遺物からこの遺構は平安時代終わりごろのものと推測される。その他全域で柱穴は確認されているが、建物などとして把握できたものは他になかった。

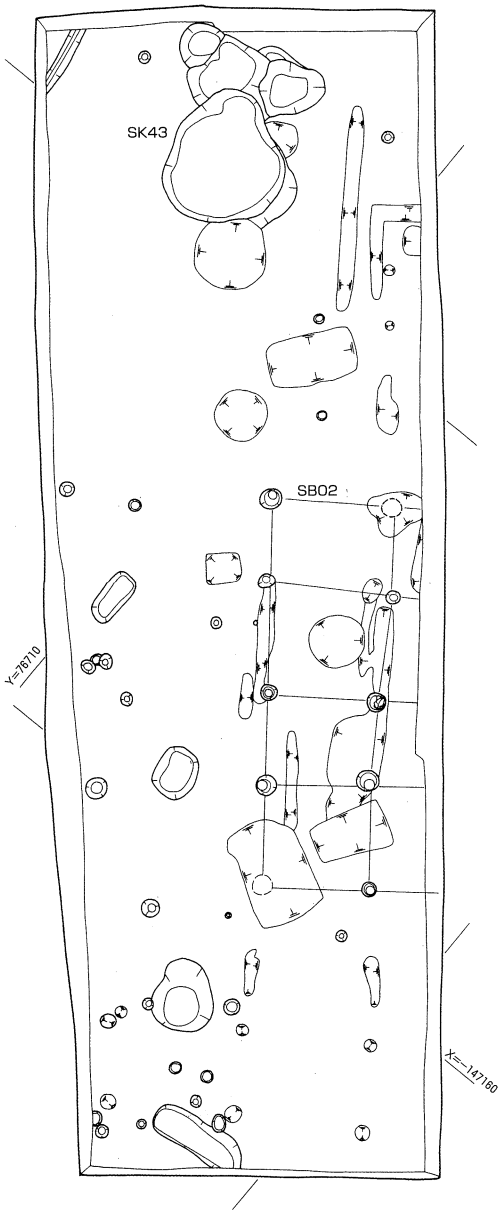


fig.38　第２遺構面平面図

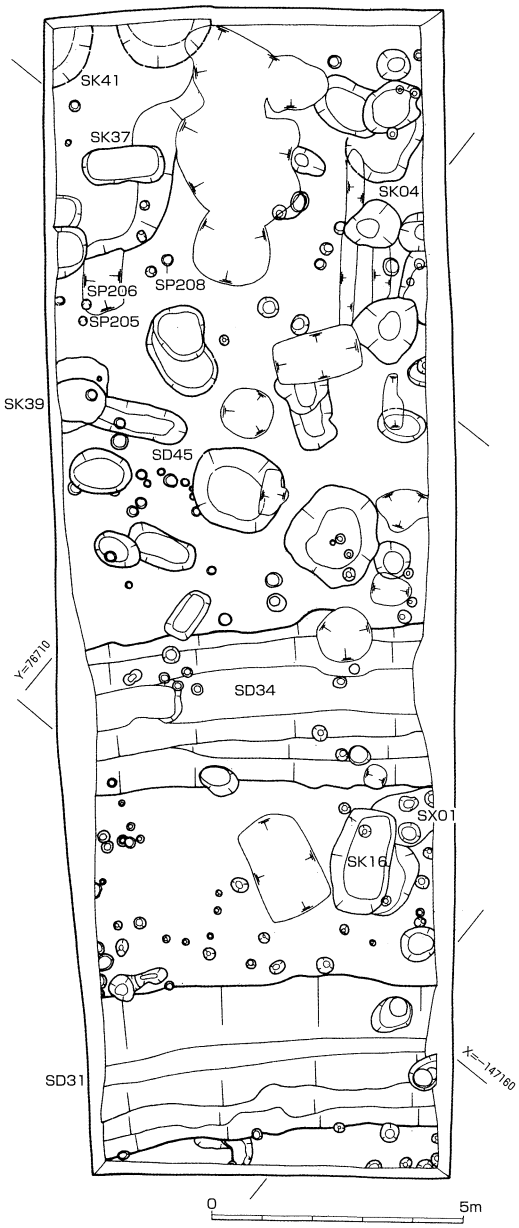


fig.39　第３遺構面平面図

第３遺構面　第３遺構面−１は６a層下面で、第３遺構面−２は６b層下面で検出した遺構面である。弥生時代前期の環濠・土坑・溝・柱穴などが検出された。

ＳＤ31　調査区南部で確認された集落を囲う環濠である。環濠幅約3.4ｍ、底面幅約0.4ｍ、６b層下面からの深さ約1.7ｍを測る断面Ｖ字形の溝である。底面の標高は1.6ｍ前後で、底面には段違いとなっている部分がある。これがどういう意味合いをもつものか、環濠掘削の単位などとして考えられるのか興味をひかれる。

下半の埋土は土壌化の進んだ粘土層で、土器の他、炭粒子や焼け焦げた木材等が比較的多く出土した。この他、炭化した籾塊・猪牙・骨等が出土している。

ＳＤ31は、第５次調査地で確認された環濠と形状が近似しており、位置的な関係からも両者は同一のものと判断される。第５次調査では、この南側で数棟の竪穴住居が確認されており、その状況から、この遺構は多重に巡らされる一番内側の環濠である可能性が高い。ＳＤ31の外側には、約3.8ｍの間隔をおいて、別の環濠ＳＤ34が存在する。

ＳＤ34　集落を囲う環濠である。環濠幅約3.4ｍ、底面幅約0.7ｍ、６a層上面からの深さ約1.7ｍを測る断面逆台形の溝である。底面の標高は1.6ｍ前後で、この環濠も底面が段違いとなっている部分を確認した。またＳＤ31では確認されなかった環濠の掘りなおし、あるいは浚渫の行われている状況が確認されている。埋土の下層は土壌化の進んだ粘土層で、遺物の出土量はＳＤ31より少なく、炭化物等もあまり目につかない。

ＳＫ16　調査区南部、ＳＤ31とＳＤ34の間にある隅円長方形プランの土坑である。一辺約2.2ｍ×約1.2ｍ、遺構検出面からの深さ0.3ｍを測る。ＳＸ01と切り合い関係にあり、ＳＸ01より古い遺構である。土器類がまとまって出土している。なお試掘調査の際、試掘坑がこの遺構をかすめており、その際に土器とともに太型蛤刃石斧が出土している。あるいはこの遺構に属する遺物かも知れない。

ＳＸ01　調査区南部、ＳＤ31とＳＤ34間にある遺構である。1.3ｍ×0.7ｍの範囲で焼けて赤化した粘土があり、その下面も炭等を含む遺構である。ＳＫ16と切り合い関係にあり、ＳＸ01の方が新しい。粘土中からも若干の土器が出土している。火を扱う焼成あるいは鋳造にかかわる遺構と思われるが判然としない。同様の遺構は第５次調査でも確認されている。

土坑群　ＳＤ34の北側では炭粒子を多量に含む土坑が10基以上確認されている。それらのうちＳＫ41・ＳＫ39等からは大量の土器が出土している。とりわけＳＫ04からは土器・礫とともに石包丁片・砥石・石匙・粘土塊・骨片などが出土しており、注目に値する。

fig.40　第３遺構面全景

ＳＫ37　調査区の北部で確認された約1.7ｍ×約0.8ｍの隅円長方形プランの土坑である。遺構確認面からの深さ0.4ｍを測る。遺構の北東隅、埋土上位から横倒しになった状態で甕形土器１個体が出土している。この甕の内部および口縁付近だけに炭が集中して出土しており、当初この炭は甕に納められていたものであることが推測される。

ＳＤ45　調査区中部で確認された溝で、多量の土器が出土したＳＫ39からのびる。遺構埋土は炭が主体である。

地震の痕跡　調査区北部において地震の痕跡が確認された。ＳＤ45・ＳＰ205・ＳＰ206・ＳＰ208・ＳＫ37等の遺構で地震による北から南への土層の側方移動の起きている状況が確認できた。

３．まとめ

今回の調査でも周辺で行われた調査と同様、中世の耕作地・平安時代の掘立柱建物・弥生時代前期の環濠集落などが確認されたが、他の調査とあわせ、環濠集落の規模等が明らかになったことが特筆される成果としてあげられる。

今回の調査区の西で実施した第９次調査地においても二重の環濠が確認されている。溝底のレベルは第５次調査区・第10次調査区が標高約1.6ｍであるのに対し、第９次調査区は標高約2.1ｍである。第９次調査地点の方が、0.5ｍほど高いものの、プラン的には第10次調査区のものとうまくつながる。また、環濠の底の平坦面も内側が幅狭く、外側が広いという共通性があり、外側の環濠が掘りなおされている点も両者共通している。両地点の

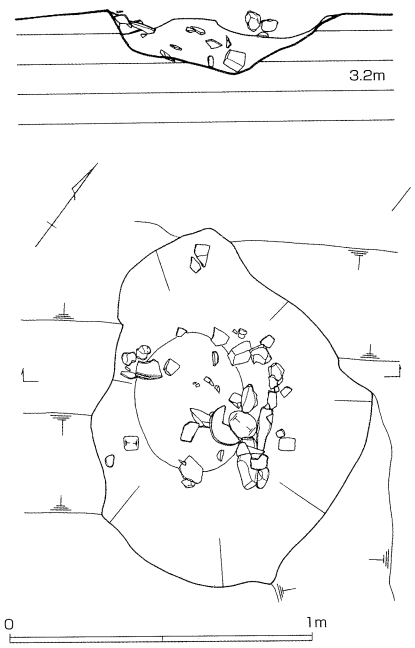


fig.41　ＳＫ04

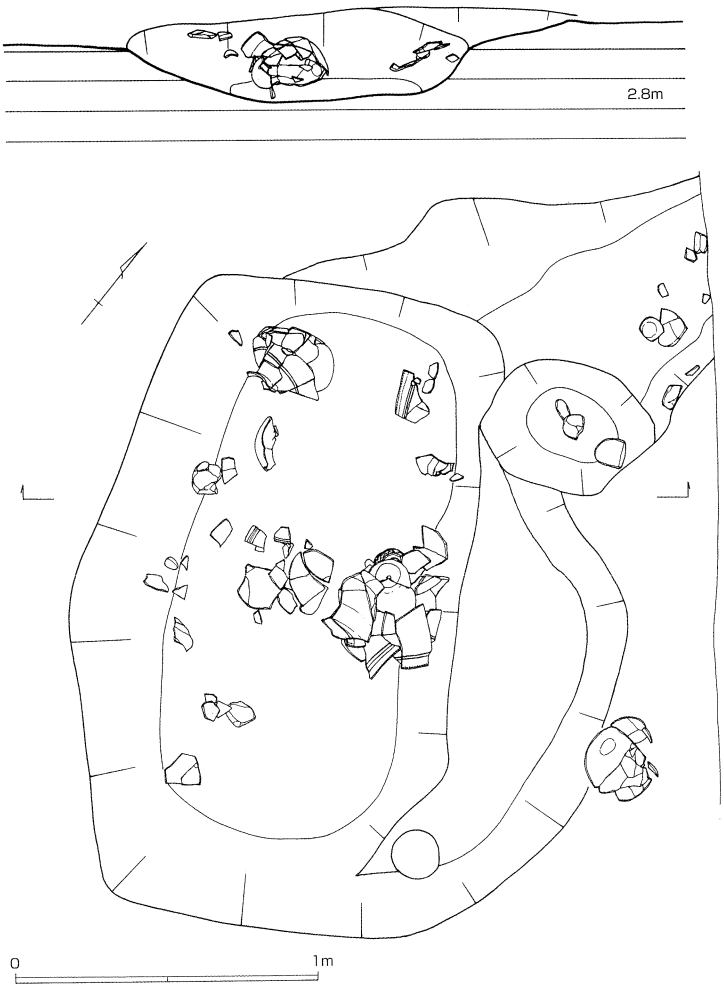


fig.42　ＳＫ16・ＳＸ01

環濠は同一の遺構と考えてよいだろう。先の第５次調査地点で確認された環濠と合わせると、この環濠集落の南西－東北方向の内法は、約120ｍに復元することができる。

また、第８次調査区では、この２本の環濠とは別の環濠が確認されている。この環濠も内側２本の環濠の形状を相似形になぞるかたちでカーブしている。第１次調査区にこの環濠の延長と重なる部分があるが、その部分は大きく攪乱を受けており、その存否が確認できない。この溝が同心円状に巡る３重目の環濠になるのか、あるいは拡張ないし張出し部になるのかは現在これを判断できないが、いずれにせよ大規模な環濠集落になることにはかわりない。

多重に環濠をめぐらす弥生時代の集落は近年類例が増えてきており、ここにもう一つの例を加えることができた。とりわけこの遺跡で貴重なのは環濠集落が２つ近接して確認されたことである。第１次調査で確認された内法東西幅約65ｍの小型環濠集落（第１期環濠集落と仮称）は弥生時代前期前半のものであるのに対し、今回おおよその規模が明らかになった大型の環濠集落（第２期環濠集落）から出土する遺物は（出土土器の整理が行われていない現状では確定できないが）、第１期集落の廃絶する時期に前後する時期のものが一番古いものであるようで、弥生時代前期中頃から後半にかけて展開する集落であることは大勢として認められる。

このことから初期入植者のごく小さなムラから規模の大きなムラへと移動する状況がとりあえず読み取れる。これからの検討課題として、第１期環濠集落を拡張あるいは取り込む形で集落を拡張するのではなく、これを放棄したかのようなかたちでその隣接地に大型の第２期環濠集落を展開した理由の解明等があげられるだろう。

また第１期環濠集落も環濠の拡張が行われているが、第２期環濠集落は、ＳＤ31の掘りなおしがなされず、同じ弥生時代前期後半のなかでその埋没後にそこに土坑が掘削されるという状況があり、逆にＳＤ34（＝第５次調査のＳＤ301・第９次調査のＳＤ201）では環濠の掘りなおしが行われている状況等が確認されており、第２期集落のなかでの集落の変遷の解明も必要になってこよう。

第２期環濠集落の構造は、環濠という仕切りによって明瞭に区分されている。ＳＤ31の内側の区画は竪穴住居が複数確認され、居住域、集落の中心であることが明らかである。ＳＤ31（＝第３次調査・ＳＤ201）からは土器・焼けた木材等とともに焼けた籾殻・獣骨・歯牙などが出土しており、生活の場という雰囲気を出している。

これに対してＳＤ34の外側では土坑や溝が確認され、それらの遺構埋土には炭が多く含まれるのが特徴となっている。この区域では今のところ住居址は確認されておらず、火を扱う作業を行う、あるいはそれによって生じた不要物を廃棄する区画ということになろうか。

また第８次調査で確認されている三重目（？）の環濠からは「木製農具」が多く出土しているのに対し、内側の環濠にはそれがない。「木製農具」が農具であるなら、これらを環濠集落の外側には農地が存在するという常識的な予想に合致する出土遺物として位置づけられるだろう。

7．兵庫津遺跡　第25次調査

1．はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区の海岸部に立地する古代から近世に及ぶ複合遺跡である。これまでの調査で中世後半から近世にかけての兵庫の町の様子が次第に明らかになってきている。今回の調査地である恵林寺は兵庫津遺跡の北東部に位置し、寺院が集中しているいわゆる「寺町」に所在する。元禄９年の『元禄兵庫津絵図』によると寺の敷地は現在よりも広く東西方向に長い長方形の敷地であったようである。調査の対象となった地点は、恵林寺と隣接する西光寺の境界付近に当たる。今回の調査は寺院本堂再建工事に伴うもので、工事により遺跡に影響を及ぼす範囲について発掘調査を実施した。

fig.43
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

調査地の基本土層は、①盛土・撹乱、②暗褐色砂質土、③暗茶褐色細砂、④褐色粗砂、⑤暗灰色細砂、⑥暗褐色細砂、⑦暗灰色細砂、⑧暗茶灰色細砂、⑨暗灰色細砂、⑩淡灰黄色中砂であり、このうち２層以下９層までに遺物が含まれている。作業は盛土・撹乱を重機で掘削し、それ以下を人力によって掘削し遺構の検出に努めた。その結果計９面の遺構面を確認した。調査区の南半部は従前の建物による撹乱が著しく、第５遺構面より下層の遺構面のみ残存していた。但し現在遺物洗浄等の整理が完了しておらず、以下の記述は現地調査終了時の見解で、今後の整理作業の進捗により訂正の必要が生じると考えられる。

第１遺構面

盛土・撹乱を除去した段階で検出した遺構面で調査区の北半で町屋と考えられる礎石建物１棟と土間及び瓦積みの井戸１基を検出した。調査区南半部は大きく撹乱を受けており礎石と思われる石は数石存在するものの建物としてはまとまらなかった。遺構の時期についてはおそらく明治時代のものと思われる。

第２遺構面　第１遺構面のベース土である暗褐色砂質土を除去した後に検出した遺構面で、六角形もしくは八角形と思われる基壇の縁石を検出した。削平が著しく基壇の高まりは確認できなかった。出土した陶磁器より幕末から明治時代のものと思われる。なお、アワビ等の貝殻が多く出土している。

第３遺構面　第２遺構面のベース土である暗茶褐色細砂を除去すると礎石列や縁石等を検出した。遺存状況が悪く建物としてはまとまらないが、第１遺構面と同一方向の石列である。19世紀前半から中頃の時期のものと考えられる。

第４遺構面　第３遺構面のベース土である褐色粗砂は盛土であり、これを除去したところ第４遺構面を検出した。主な遺構は胞衣壺埋納遺構、石組遺構、礎石、土間、瓦列、土坑等である。石組遺構は貯蔵施設と考えられるもので、北側部分約２ｍのみ残存している。瓦列は約３ｍの長さで平瓦を立てており、南側の地面が一段高くなっている。建物の敷地の区画であろうと思われる。調査区の北半には土間を検出したが、付近の礎石は除去されたのか存在せず、建物の規模は不明である。遺構面の時期は18世紀後半頃であろう。

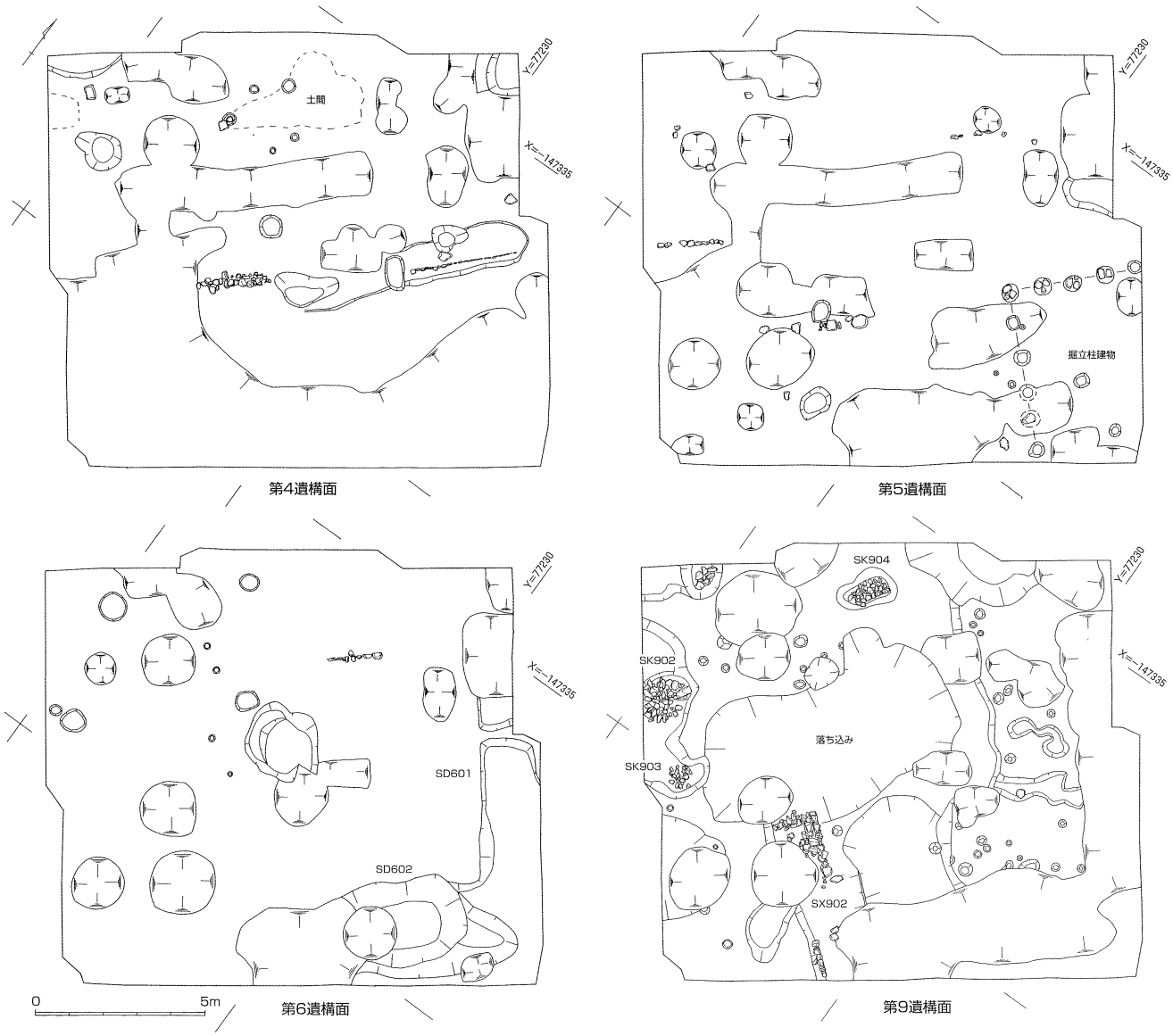


fig.44　遺構平面図

第５遺構面　第４遺構面のベース土である暗灰色細砂を除去すると第５遺構面になり、掘立柱建物、礎石列、縁石等を検出した。礎石列、縁石列については遺存状況が悪く建物を復元することはできなかった。

掘立柱建物　東西４間以上、南北５間以上の規模で、柱間は約１ｍである。柱穴は直径約0.5ｍ、深さ0.2ｍの規模で、削平が著しいが柱を受ける根石が遺存しているものもある。建物の用途は不明である。第５遺構面の時期は18世紀中頃を中心とした時期であろう。

第６遺構面　第５遺構面のベース土である暗褐色細砂を除去した後に検出した遺構面で、検出遺構は縁石、ピット、土坑、溝である。ピット、縁石については建物としてまとまるものはない。溝は２条検出した。

ＳＤ601　幅約２ｍ以上、深さ約0.8ｍの南北方向に延びる溝である。隣接する西光寺との境界の溝と推定される。

ＳＤ602　幅約2.5ｍ、深さ1.1ｍの東西方向に延びる溝である。埋土の堆積状況から、ある時期には水が溜まっていたことがわかる。この溝の肩付近の埋土より土師器皿いわゆる「かわらけ」が28ℓコンテナ４箱分出土した。なお、埋土の堆積状況からこの溝は第５遺構面を造成する際に人工的に埋められていることがわかる。第６遺構面の時期は18世紀前半から中頃と考えられる。

第７遺構面　第６遺構面のベース土である暗灰色細砂を除去した後に検出した遺構面であり、調査区の北西部分にのみ遺構が存在する。検出遺構は、土坑５基と井戸１基である。

井戸　工事影響深度の関係で完掘できなかったが掘形は直径2.5ｍであり、内部に直径約0.8～0.9ｍの瓦積みの井戸枠がある。第７遺構面の時期は18世紀前半頃と考えられる。

第８遺構面　第７遺構面のベース土である暗茶灰色細砂を除去した後に検出した遺構面であり、土坑８基、溝１条、ピット２基を検出した。土坑は円形のものと方形のものがあるが、埋土に遺物をあまり含んでおらず、その用途は不明である。そのうち１基には埋土に桟瓦を含むものが見受けられる。遺構面の時期は17世紀後半～末頃と考えられる。

fig.45　第４遺構面全景

fig.46　第９遺構面全景

第９遺構面　第８遺構面はベース土が暗灰色細砂であるが、東半部の一部についてはこの層が存在せず、10層の淡灰黄色中砂がベース土となっている。このうち暗灰色細砂を除去したところ、土坑４基、ピット多数、不明遺構１基、落ち込み等を検出した。

ピット　いずれも直径0.2～0.3m、深さ0.2～0.3mのもので建物としてはまとまらなかった。

ＳＫ902　直径約1.5mの円形で、内部に川原石を多数含む集石土坑である。

ＳＫ903　直径約0.8mの円形で、内部に川原石を多数含む集石土坑である。

ＳＫ904　長辺約1.6m、短辺約1.0m、深さ約0.3mの長方形の土坑で、底に川原石を敷き詰めている。用途は不明である。

ＳＸ902　短辺1.6m、長辺4.8m以上、深さ約0.4mの長方形の落ち込みで、現況では北東部コーナー付近に石積みが残存する。石積みの上部は削平されているが、現存で３段確認できる。石積みの面が内側で揃っており、地下倉庫のような貯蔵施設であると思われる。

落ち込み　調査区の中央部で検出したもので、工事影響深度の関係で完掘できなかったが、埋土に川原石を多く含んでおり、第８遺構面造成時に埋められたものと考えられる。出土遺物には15～16世紀代の土器が目立つが、第９遺構面がこの時期に該当するかは明らかではない。

出土遺物　各遺構面より陶磁器・瓦が多数出土している。また、寛永通宝も約50枚程度出土している。土人形、キセル、かんざし等もあるが、それぞれ未整理のため詳細な内容を明確にできない。第９遺構面では土師器羽釜、瀬戸美濃の陶器が出土している。なお、遺物総数は28ℓコンテナ30箱である。

３．まとめ

今回の調査は、元禄９年『元禄兵庫津絵図』では恵林寺の境内に当たるが、発掘調査では明確に寺院関連の遺構を検出することはできなかった。瓦についても本瓦の出土は少なく、桟瓦が多く出土している。寺院の中心的な建物よりも、庫裏のような町屋に類似した建物が建っていたことが考えられる。全般的に各遺構面は造成による削平・撹乱が著しく、礎石・縁石が除去されており、建物の区画等も明らかにすることはできなかったが、七宮神社付近で検出される宝永５年（1708）の大火の焼土層が今回の調査地では認められず、宝永の大火がこの地に及んでいなかったことが明らかになった。

8．兵庫津遺跡　第26次調査

1．はじめに

兵庫津遺跡は、旧湊川河口の西側に位置する、兵庫の港と集落により構成される遺跡である。兵庫津は古くは「大輪田泊」と呼ばれ、瀬戸内海航路の基幹港として栄えたといわれ、平清盛による修復後は日宋貿易の港として繁栄した。中世に入ると「兵庫津」と呼ばれる様になり、戦火や地震などにより度々壊滅的な打撃を受けながらも、基幹港として栄え、町の中心には兵庫城が築かれた。江戸時代には西国街道が迂回して兵庫の町を通る様になり、交通の要衝として繁栄し、幕末には重要港として兵庫（神戸）開港を行った。

今回の調査は共同住宅建築に伴うもので、工事による掘削影響範囲について発掘調査を実施した。

fig.47
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

基本層序

調査区内の基本土層は近代～現代の盛土、撹乱層の下に近世の遺構面が存在する。これより下層の褐灰色シルト質細砂（31層）、褐灰色砂質シルト（33層）は奈良時代～中世、その下層の灰色混礫細砂（34層）は、古墳時代～平安時代の遺物包含層である。この下層は褐灰色混礫粗砂（36層）で、東側は砂丘状に高く淡茶褐色粗砂（37層）である。その間には黒褐色シルト（35層）等の湿地が存在する。この面上で第２遺構面を検出した。

第１遺構面

町家、溝２条、道路、河道を検出した。

町家群

４軒以上の町家を検出した。後世の撹乱による影響が著しく、また、礎石等の遺構も存在していなかったため、規模、構造については不明である。長方形の区画が、道路側に対して、長軸を垂直にして検出されたことから、町家群であると考えられる。

最も残存状況の良好なＳＢ03で東西８ｍ、南北４ｍ程と考えられる。軟弱な地盤を整地し、建物を構築したものと推定される。

ＳＤ01

南北方向に延び、やや南に振りながら屈曲して西側に続く、石垣で護岸をした濠状遺構である。幅は南側で3.2ｍ、中央部で3.1ｍ、深さは検出面から0.85～1.28ｍで北側へ行く程深くなっている。底部からは常に湧水があり、水を湛えた状態であったと考えられる。

石垣は人頭大の石により築かれているが、砂地である軟弱な地盤であるため直径0.3～

0.4m大の丸太材を根太として敷き、杭で固定をして、その上に石垣を構築している。石垣は2～3段が遺存していたが、元来は、もう少し高かったものと推定される。また、改修も行われたと思われ、東側部分の南端部は大振りな石材を使用しているが、根太材は使用しておらず、出土遺物からも改修以前のものであると考えられる。

埋土はシルト層を中心とした、砂とシルトの交互堆積層であるが、「濠さらえ」などの清掃が行われたと考えられる。近世後期～近代にかけての陶磁器、土師器、瓦、木製品、石造物、銅銭などの遺物が多量に出土した。多くは18世紀～19世紀前半にかけてのもので、陶磁器、瓦が大半を占める。出土した遺物には燭台、五輪塔、石仏等寺院に関連するものも多く含まれている。

ＳＤ01は検出された位置、形状から元禄９年（1696）の『元禄兵庫津絵図』に描かれた真光寺の境内地を巡る濠であると考えられる。

ＳＤ02　東西方向の溝で、調査区西側へと続いている。幅は上部が後世の撹乱の影響を受けていたため、判然としないが、調査区西壁の土層観察から2.5m前後と推定される。深さは同

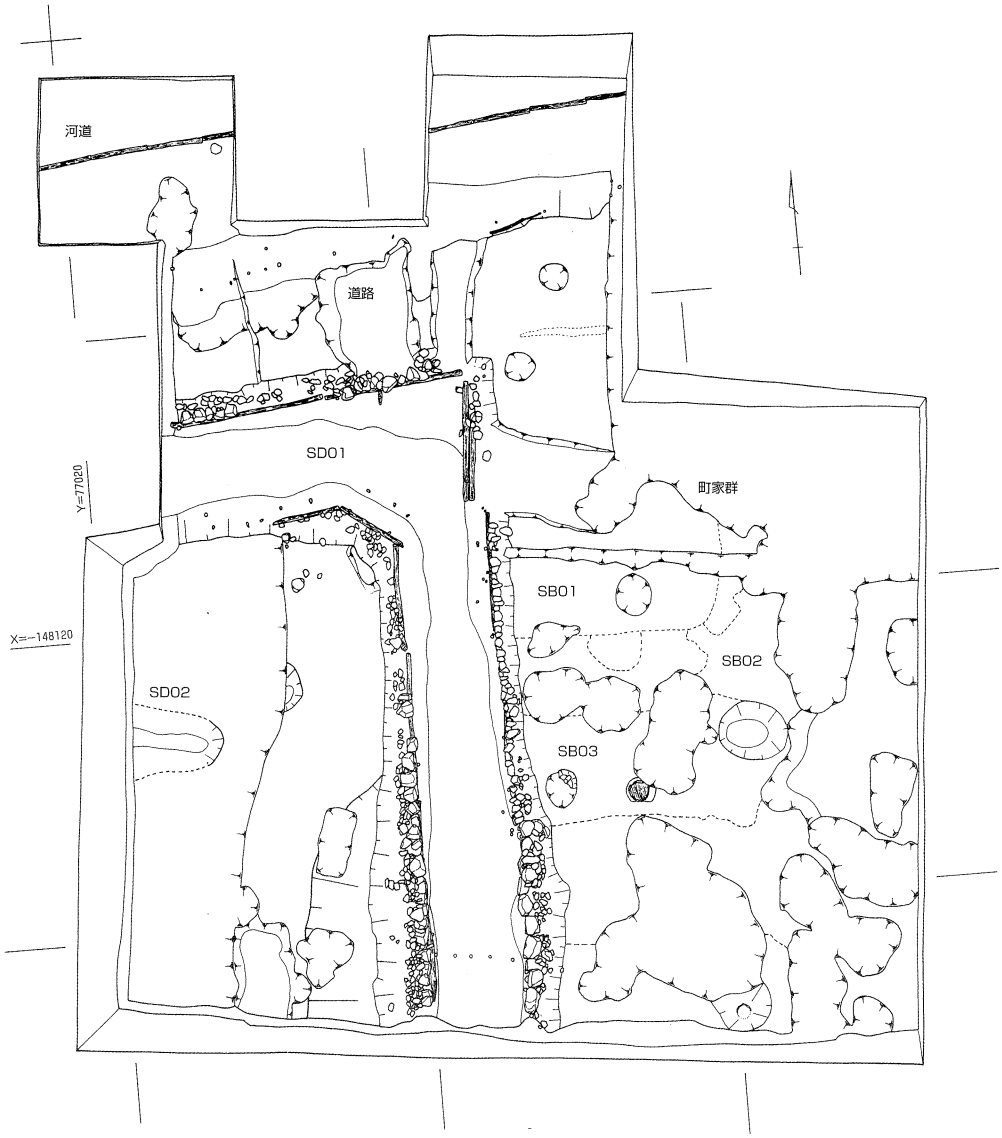


fig.48　第１遺構面平面図

0　10m

じく撹乱の影響と工事影響深度の関係により、底まで掘削ができなかったが、西壁の土層観察から0.7m以上と考えられる。

ＳＥ01　北側は後世の撹乱により消滅している。井戸の掘形は直径2.2mである。板材を２段に組み、井戸枠としているが、上段は上部が撹乱を受け、また腐朽してわずかに遺存している状況であった。下段については良好な状況で遺存していたが、調査区西壁崩落の危険が高く、検出面から深さ1.3mまで掘削を行ったが、底まで確認することはできなかった。断割り断面から８枚の板材を八角形に組み合わせて井戸枠としたと考えられ、木の皮を巻いて補強を行っていた。埋土中から、壁材と考えられる漆喰の塊、瓦が出土した。

河道　今回の調査で検出したのは南側の岸と考えられ、河道は北側に広がるものと推定される。砂とシルト層を交互に積み、杭、木材で護岸をした堤が検出された。

河道内には根太材と考えられる丸太材列が検出された。護岸を目的としたものであると考えられるが、堤の護岸杭列よりも3.5～5.0m河道内に位置しており、丸太材下部から出土した遺物や、明治14年（1881）の『兵庫神戸実測図』では『元禄兵庫津絵図』よりも河道の幅が狭くなっていることから、近世後半～近代初頭にかけて改修がなされたものと考えられる。『元禄兵庫津絵図』の「須佐之入江」に注ぐ川が、今回検出した河道にあたるものと考えられる。近世後半から近代にかけての陶磁器、瓦が出土した。

道路　『元禄兵庫津絵図』に描かれた、道路と考えられる整地面を検出した。従前建物の撹乱等の影響で、ごく一部で遺存していた。上から茶灰褐色細砂、褐灰色細砂が水平に堆積し、上層の茶灰褐色細砂は固くしまっていた。ＳＤ01掘形と河道の杭列から復元した道路の幅は3.5mである。

第２遺構面　井戸１基、土坑３基、ピット２基を検出した。

ＳＥ201　掘形の直径は1.6m、検出面からの深さ0.8mで、下段は長さ10cmの長台形の板材12枚を木の皮で巻いて、桶状に組んだものを据え、上段に曲物を組み合わせて井戸枠としている。

土坑　ＳＫ201は直径1.2m、検出面からの深さ0.2m前後で、埋土に多量の二枚貝の貝殻を含んでいる。ＳＫ203は長径0.9m、短径0.7mの楕円形で、深さは上部が後世の撹乱の影響を受けており、現状では深さ0.16mである。埋土中から中世の須恵器、土師器が出土した。

ピット　２基のピットを検出したが、建物等を構成するものであるかは、確認することはできなかった。

fig.49　ＳＤ01

3．まとめ

今回の調査では近世の真光寺の濠を中心に道路、河道等が『元禄兵庫津絵図』、『摂津名所図会』そのままに検出された。

特に真光寺の濠（ＳＤ01）は真光寺境内地の北東角の部分であり、今後の兵庫津全体の復原の上で基点となるものであると言える。また、『元禄兵庫津絵図』の中で場所が特定でき、絵図の正確性が立証された成果は大きなものである。しかし、出土した多量の遺物はまだ、水洗、復原作業が完了しておらず、構築の時期及び、石垣改修の時期の詳細な検討はこの作業の完了を待ちたい。

古地図等から、明治末期までは真光寺境内地を巡る濠が記載されており、濠としての機能が伺われる。昭和７年（1932）の地図では区画として確認できるが、道路になっていることから、この時期までには埋め戻され、道路になったものと考えられる。昭和35年（1960）の地図では、ほぼ現在の姿となっているため、最終的には戦後の区画整理の実施により、現在の状況になったものと考えられる。

『元禄兵庫津絵図』では畑地として表現されていた濠の外側に、町家が検出された点についても、『摂津名所図会』ではすでに町家が描かれており、寛政年間には宅地化していた事が絵図から伺われていたが、今回の調査により町家の存在が確認されたことから、近世後期～近代初頭にかけての真光寺境内周辺の状況も確認することができた。

下層からは平安時代を中心に、遺物包含層から古墳時代後期～中世の遺物が出土した。

第２遺構面は東側が高く、６区では第１遺構面と同一面であり砂丘状を呈するが、西側は低く落ち込み、後背湿地の状況を呈していた。京都大学理学部増田富士雄教授による現地調査の結果、南北に形成された砂嘴と西側に広がる後背湿地であるとの所見を得た。

今回の調査で、平安時代～中世頃の遺構の存在が確認された事から、調査地周辺にも当該期の遺構の存在が予想され、兵庫津遺跡の変遷、全体像を考察する上で貴重なデータを得ることができた。

fig.50　第２遺構面平面図

0　10m

9．上沢遺跡　第45次調査

1．はじめに

上沢遺跡は、兵庫・長田両区にまたがる縄文時代から平安時代・中世におよぶ集落遺跡で、苅藻川が形成した標高約10mから20mの扇状地に立地している。

当遺跡における発掘調査では、弥生時代・古墳時代の遺構や奈良時代から平安時代の掘立柱建物・井戸・溝・土坑・自然流路などが検出されている。特に今回の調査地の東隣にあたる第44次調査では、古墳時代初頭から古墳時代中期にかけての竪穴住居が検出されている。また、南側の山手幹線歩道部分にあたる第８次調査では、中世・古墳時代・弥生時代後期・弥生時代前期の遺構が検出されている。

今回の調査は個人住宅兼事務所兼共同住宅建設に伴うもので、建物基礎により埋蔵文化財に影響をおよぼす部分についてのみ調査をおこなった。

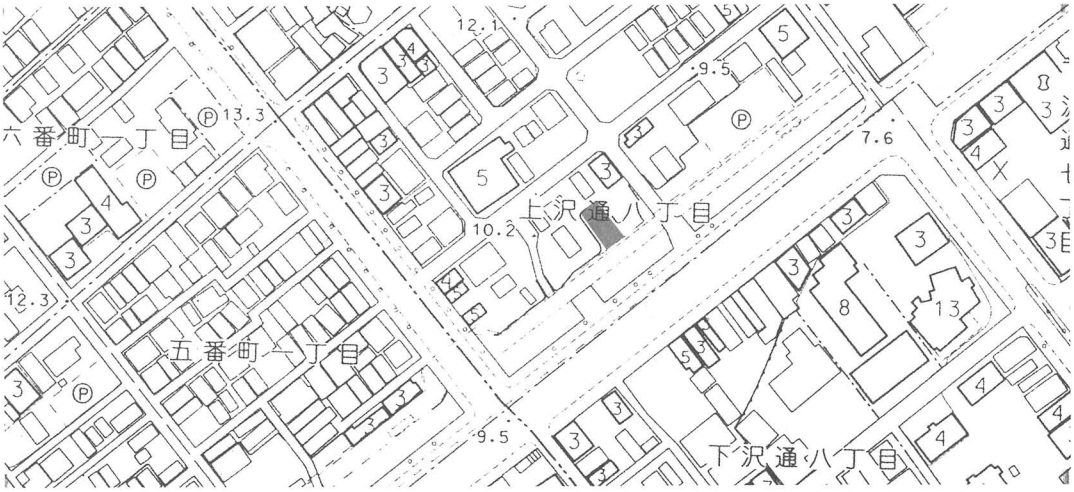


fig.51
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

基本層序　当該地は北西から南東へ傾斜する地形で、北端ではほとんど現地表面直下で遺物包含層および遺構面が検出された。南側は、耕作地および宅地造成に伴い削平されており、段差が生じている。基本層序は盛土・暗茶褐色粘性砂質土・黒褐色砂質土・暗褐色砂質土・暗黄灰色砂である。

第１遺構面　北端部は削平が著しく、すでに古墳時代の遺物包含層があらわれていたが、中央部以南は中世の遺物包含層が残存する。第１遺構面は、遺物包含層を除去した後の黒褐色砂質土上面で検出した遺構面である。

遺構は、灰色砂質土を埋土とするピットや東西方向の鋤溝状遺構、落ち込みなどが検出された。遺物は、土師器、須恵器、瓦器や瓦が出土している。

ＳＸ01　調査区中央部で検出した南北約４ｍ、東西５ｍ以上の方形の浅い落ち込みである。埋土は、上層が淡褐灰色砂質土で下層が灰色砂質土である。遺物は小片ながら、須恵器、土師器、瓦器、白磁などが比較的多く出土した。時期は、鎌倉時代と思われる。また、下層上面で牛と思われる獣足痕を検出している。

第２遺構面　暗褐色砂質土上面で検出した遺構面である。茶褐色砂質土は、北側では削平されて存在しない。遺物包含層からは土師器を主体として、須恵器・弥生土器、土錘、馬歯やサヌカイトなどが出土している。遺構面の時期は、弥生時代後期から古墳時代、奈良・平安時代

にかけてと思われる。遺構は、北端部で黒褐色土を埋土とするピットや土坑、中央部で暗灰色土を埋土とするピットなどのほか、溝を検出した。

ＳＤ02　調査区東半で検出した北西蟠南東方向の溝である。南北端とも調査区外にのびる。幅約0.4ｍ、深さ約0.4ｍで、断面Ｖ字形を呈し、緩く蛇行する。埋土は、上層が黒褐色粘性砂質土で、下層が暗褐色砂質土である。埋土上層から、甕や高坏など、弥生時代後期の遺物が出土している。

ＳＫ07　調査区北半西端で検出した柱穴である。辺0.74×0.6ｍ、深さ0.3ｍを測り、北西側に柱痕を確認した。土師器と柱材と思われる木片が出土している。

この他、比較的明瞭な柱穴を何基か検出しており、掘立柱建物が存在したものと思われるが、復元には至っていない。

第３遺構面　暗黄灰色砂上面で検出した遺構面である。土坑、ピット、溝などを検出した。ただし、南半では第２遺構面で検出しきれなかった遺構も若干存在する。遺物は、弥生土器やサヌカイトなどが出土しており、弥生時代前期の遺構面と思われる。

ＳＤ04　東西方向の溝である。幅0.2ｍ、深さ0.15ｍを測る。弥生土器が出土している。

ＳＫ10　直径0.8～0.88ｍ、深さ0.24ｍを測る。弥生土器が比較的まとまって出土している。

ＳＫ11　直径1.4ｍ前後、深さ0.3ｍを測る。埋土は褐色粘性砂質土で、弥生土器が出土している。

３．まとめ

今回の調査では、３面の遺構面を検出することができた。各時期は既述のとおり、第１遺構面が中世、第２遺構面が弥生時代後期から奈良・平安時代、第３遺構面が弥生時代前期になると思われる。これは、隣接した調査地と同様の結果である。

遺構では、竪穴住居は確認できなかったが、ピット、土坑、溝などを検出した。第２遺構面のピットには掘形が比較的大きいものも存在しており、掘立柱建物が想定することができる。北東部で検出したピット群は、第44次調査で検出された掘立柱建物と関連するものであろう。また、ＳＤ02は第８次調査で検出された溝との関連がうかがえる。

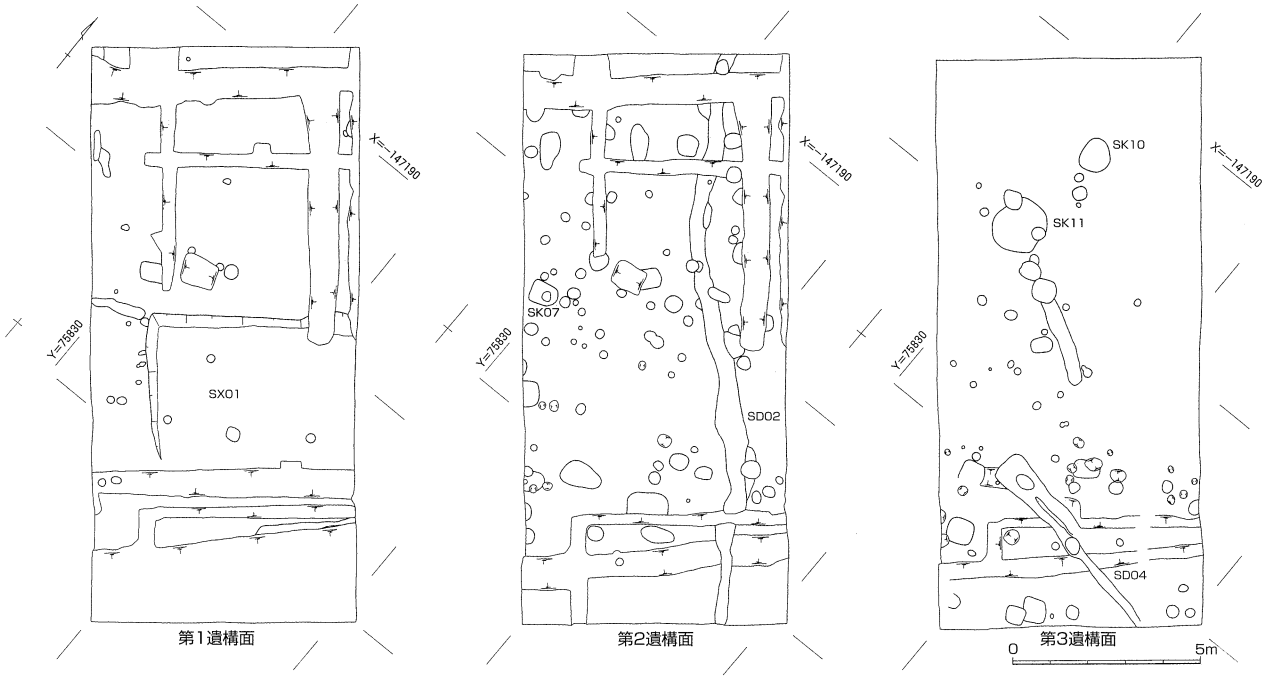


fig.52　遺構平面図

10. 御蔵遺跡　第49次調査

1．はじめに

今回の調査区は、南北18m、東西16mで区画整理事業の換地に伴う事務所の建築によるものである。計画建物の影響深度の関係から、基礎部分で設計GL−1.1m、梁部分で同−0.8mまで調査した。

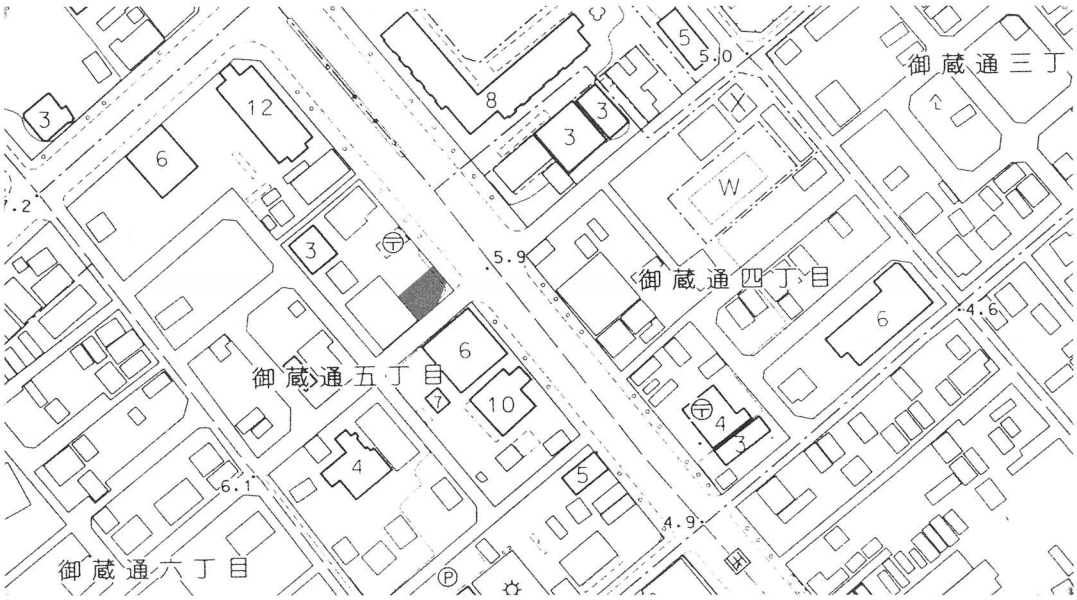


fig.53
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

基本層序

調査地の基本層序は、地表より0.6mほどの表土・盛土の下に薄い旧耕土である灰黄色砂質土がみられ、さらに中世の遺物を含む旧耕土状の灰黄色土、奈良時代の遺物を多く含む暗灰褐色粘質土をへて平安〜奈良時代の遺構面である黄褐色粘質土・暗褐黄色砂礫になる（第１遺構面）。さらに調査区の西側では、下層に暗灰黒色粘質土・灰黒色粘質土等の庄内期の遺物を含む層の堆積がみられその下で淡褐黄色粘土・淡青灰色シルトなどをベースとする庄内期の遺構面が存在する（第２遺構面）。

なお、調査地の南半分（Ⅱ区）については、大半が既存の建物の基礎によって、地表より深さ1.2m以上の削平を受けており、遺構面は地中梁の部分など比較的撹乱が浅かった部分に島状に残されているのみであった。

第１遺構面

第１遺構面は、古墳時代〜平安時代の遺構面で撹乱による削平を受けていない部分の全面において確認された。掘立柱建物、溝、土坑およびピット等が検出された。

ＳＢ01

調査区の北隅において検出された掘立柱建物である。南辺２間分が検出された。建物は、調査区外北方へ拡がると思われる。柱掘形は、一辺0.7〜1.2m程の楕円形に近い隅丸方形で深さは、0.2〜0.4mである。

ＳＤ01

幅1.2〜1.7m、深さ0.7mを測り、断面は大きく開くＵ字形を呈する。埋土の上〜中層にかけて遺物を多く含むが、下層では粘土状の土が堆積し遺物を殆ど含まない。

ＳＤ05

幅0.9m、深さ0.35mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

ピット群

直径0.2〜0.4mほどの円形のピットを20基ほど検出された。調査範囲内においては、建物として確定できなかったが、明確な柱痕跡を伴うものも認められるため掘立柱建物が存在するものと考えられる。

第２遺構面　部分的に第２遺構面を検出した。検出された遺構は、不定形の落ち込みと井戸状の遺構である。

ＳＸ101　調査区を蛇行する溝状の落ち込みである。上層では東西2.5ｍ、南北1.0ｍほどの範囲に遺物が集中する。

ＳＥ101　ＳＸ101の南に接する1.2×0.9ｍの楕円形の井戸状遺構で深さ0.7ｍを測る。上層から中層にかけて完形に近い土器が集中している。下層では細砂、粘土の堆積がみられ湧水が激しい。

３．まとめ

今回の調査は、南側の大半について撹乱を受けていたものの、それ以外の部分においては比較的多くの遺構を確認することができた。

第１遺構面においては掘立柱建物が確認された。またＳＤ01やＳＤ05などのように方向性をもった溝は、何らかの区画を意図するものと考えられ、大規模な掘立柱建物が存在する御蔵遺跡の性格を考えるうえで非常に興味深いものである。

さらに第２遺構面においては、庄内期の遺構面が確認された。ＳＸ101およびＳＥ101からは多量の遺物が出土した。従来、御蔵遺跡においては、この時期の遺物は比較的多く確認されるものの、遺構面や遺構については不明確な場合が多かった。今回の調査は弥生時代末から古墳時代初頭の遺構の広がりを考える上においても重要な成果であるといえる。

fig.54　ＳＸ101

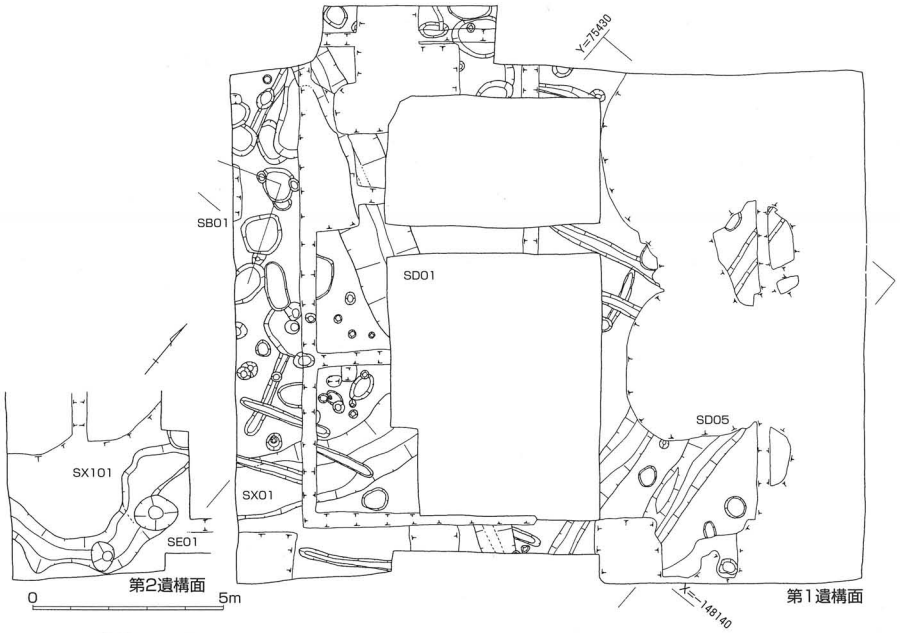


fig.55　遺構平面図

11. 水笠遺跡　第16次調査

1．はじめに

水笠遺跡は長田区のほぼ中央部、苅藻川右岸の沖積地に位置する集落遺跡である。過去の調査においては、弥生時代～近世の遺構、遺物が確認されている。

今回の調査は土地区画整理事業の街路工事（細田線拡幅工事）に伴うもので、縄文時代晩期～近世の遺構、遺物が確認された。

fig.56
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

基本層序

上層より盛土、２～４層の旧耕土層、遺物包含層の順で、遺物包含層の下層上面が第１遺構面となる。第１遺構面のベース層を除去した層位面が第２遺構面となる。遺物包含層は0.05～0.2ｍの層厚で存在し、黒褐色系の土色である。概ね砂質を呈するが、東に行くほどシルト質が強くなる。第１遺構面のベース層は、砂質土層あるいは砂層で構成される所と、砂質系のシルトである。遺構面は現GL－0.3～－1.0ｍの範囲内で、西から東に下り傾斜になっている。

第１遺構面

全体的に遺構面の攪乱が著しく、検出された遺構は数少ない。小規模なピットや土坑状遺構などが数カ所検出されたが、埋土中や遺構面を覆う遺物包含層中からの出土遺物も少なく、その時期、性格等の詳細は不明である。

幅約1.0ｍ、深さ約0.3ｍの溝（ＳＤ01）が検出された。埋土中からの出土遺物は少なく、いずれも須恵器、土師器の小片であるが、それらに混じって緑釉陶器と考えられる皿が１点確認された。その形状から平安時代前期（９世紀後半頃）に属するものと考えられる。また、小規模なピットが約１間の間隔で直交するように並ぶが、東側が攪乱されており連続するピットは確認できなかった。

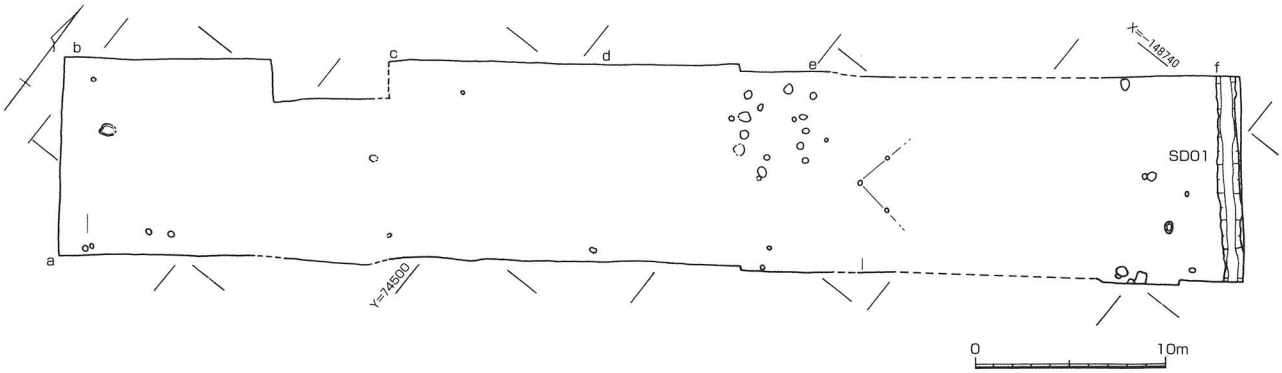


fig.57　遺構平面図

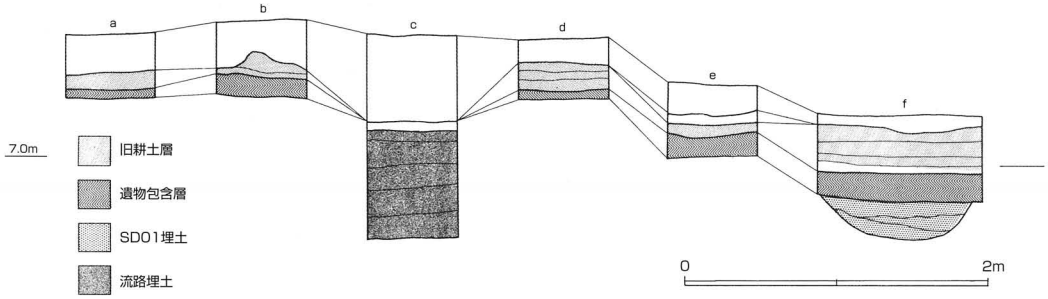


fig.58　調査区北壁土層断面柱状図

第２遺構面　幅約４ｍ、深さが検出面より約0.8ｍを測り、北西から南東方向にはしる流路を検出した。埋土中より縄文時代晩期～弥生時代前期に属すると考えられる土器の小片とサヌカイトの剥片が数点出土した。

３．まとめ

今回の調査における成果は、調査地の多くが攪乱されていることもあって、遺構、遺物共に乏しい。過去の調査で検出された遺構は、今回の調査の第１遺構面に相当する遺構面のものであるが、弥生時代後期～平安時代と時期幅も大きく、今回のように遺構内や遺物包含層からの出土遺物がほとんどない状況では、遺構の時期、性格を検証することもやや難しい。その中で唯一時期が判明できそうなのがＳＤ01である。ただし、先述の通り緑釉陶器の皿が１点出土しているものの、それ以外の遺物が小片で少ないこと、周辺に遺構も少なく、その時期も不明であることから、周辺調査（特に東側の水笠通２丁目地区）における資料の蓄積が全容解明の条件になるものと思われる。また、第２遺構面で検出された流路より土器片やサヌカイト片が出土したことは、集落遺跡としての成立や様相を考える上で重要な成果と言えよう。

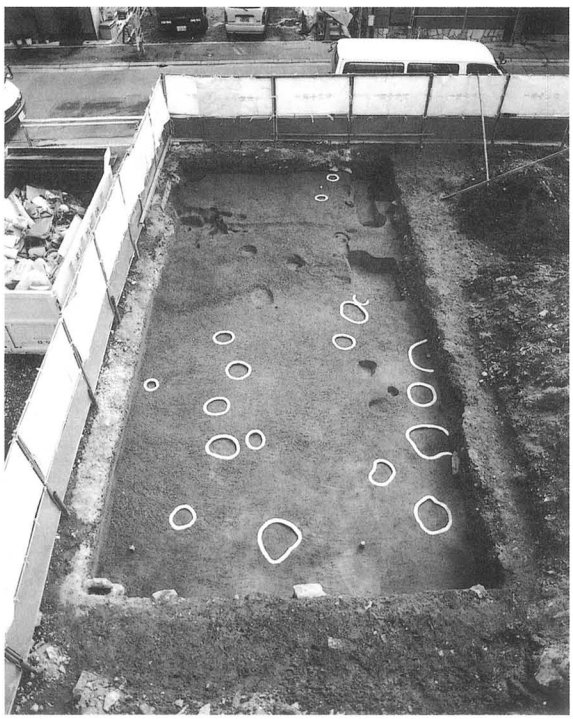


fig.59　ピット群

12. 松野遺跡　第27次調査

1. はじめに

松野遺跡は、妙法寺川と苅藻川によって形成された複合扇状地末端部から自然堤防帯に位置する。微地形的には北西方向から南東方向へ徐々に下がる緩斜面地で、標高約７ｍの細長い微高地上に立地する。

この遺跡は昭和56年に市営住宅建設に伴う発掘調査が行われて以来、20数次にわたる調査が実施されてきている。その結果、縄文時代晩期から弥生時代前期の流路、弥生時代の土坑、溝、古墳時代の掘立柱建物、竪穴住居、井戸、平安時代末から鎌倉時代初めのころの掘立柱建物、井戸、木棺墓などが検出された。

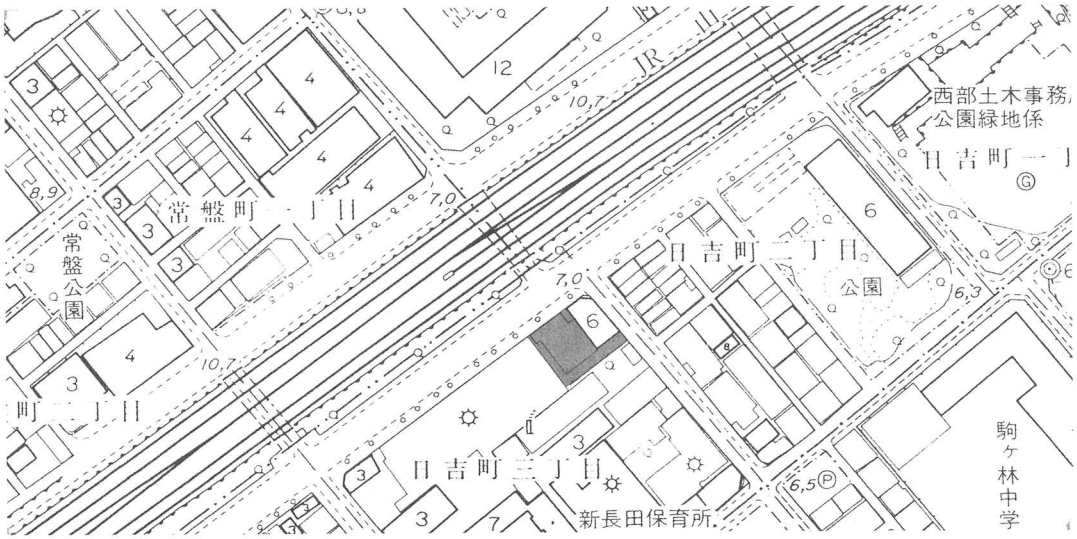


fig.60
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

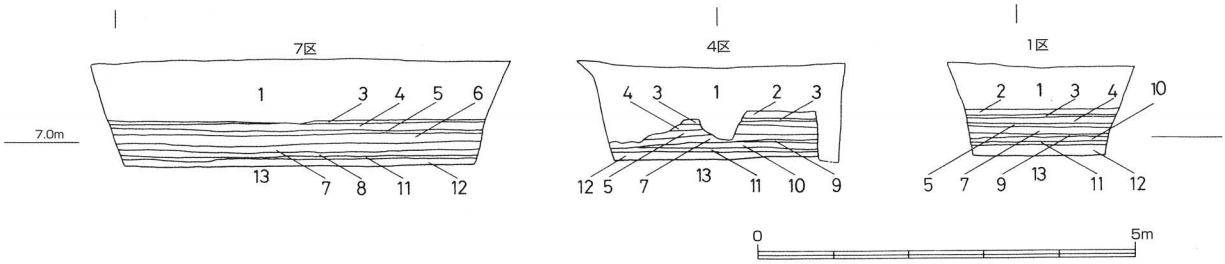
今回の調査は社屋建築に伴うもので、建築工事により埋蔵文化財に影響を及ぼす基礎部分についてのみ発掘調査を実施した。なお、調査区は西北から１区～９区と設定した。

基本層序

基本層序は、盛土・耕土・床土・淡褐灰色砂・灰色シルト・黒褐色粘性シルト（遺物包含層）・灰黄色シルトである。遺物包含層の厚さは10～15㎝で、遺構面は西側の１区では標高6.76ｍ、東側の９区では標高6.61ｍを測る。部分的に遺物包含層上面で、中世以降の耕作痕を検出した。

2区

ピット状の遺構５基と浅い土坑状落ち込み、そして幅0.2ｍ、深さ0.1ｍの細い溝を検出した。埋土はいずれも黒褐色粘質土である。南隅の落ち込みからは古墳時代の須恵器、土師器が出土している。



1. 盛土　2. 耕土　3. 床土　4. 灰色粘質砂　5. 淡褐灰色砂　6. 淡灰色砂　7. 淡灰色粘性砂
8. 灰色粘性シルト　9. 淡灰色シルト　10. 灰色シルト質粘土　11. 灰色粘土
12. 黒褐色粘性シルト（遺物包含層）　13. 灰黄色シルト

fig.61　調査区西壁土層断面図

3区　ピット（ＳＰ06）を１基のみ検出した。直径0.3ｍ、深さ0.35ｍで、埋土は黒褐色粘質土である。古墳時代の須恵器片が１点出土している。

5区　幅0.9ｍ、深さ0.3ｍの北西－南東方向の溝（ＳＤ02）を検出した。埋土は上層が黒褐色シルト、下層が暗褐色シルトである。２区南隅で検出した落ち込みにつながると思われる。遺物は古墳時代の土師器が出土している。

6区　ピットと溝を検出した。ピット（ＳＰ19）は直径0.4ｍ、深さ0.5ｍで、埋土は柱痕部分が淡黒色粘性シルト、掘形部分が黒褐色～暗褐色シルトである。ピット上面の柱痕にあたる位置から古墳時代の須恵器坏身が出土し、その内部から滑石製臼玉が３点出土した。

9区　南東隅で幅0.2ｍ、深さ0.05ｍの浅い溝を検出した。

3．まとめ　今回の調査では、竪穴住居や建物の確認には至らなかったが古墳時代のピットと溝を検出することができた。４区や７区でもピットを検出したが、そのほとんどは浅く不明瞭なものである。対して３・５・６・９区など東側の調査区では、比較的遺物量も多く明瞭な遺構も検出できた。当該地は松野遺跡の西端に近い部分であり、西側に行くほど遺構・遺物は稀薄になっていくようである。５区で検出したＳＤ02は、第５次調査のＳＤ206に形状が類似しており、関連性がうかがえる。さらに、ある一時期の集落を区画する溝である可能性も考えられる。

遺物は、包含層から古墳時代の須恵器、土師器が出土したが、多くは小片であり時期も決定しがたい。しかし、ＳＰ19出土の須恵器や周辺の調査結果から、包含層の遺物も古墳時代中期末～後期前半とみて大差ないものと思われる。その他、滑石製臼玉や土錘、砥石が出土した。

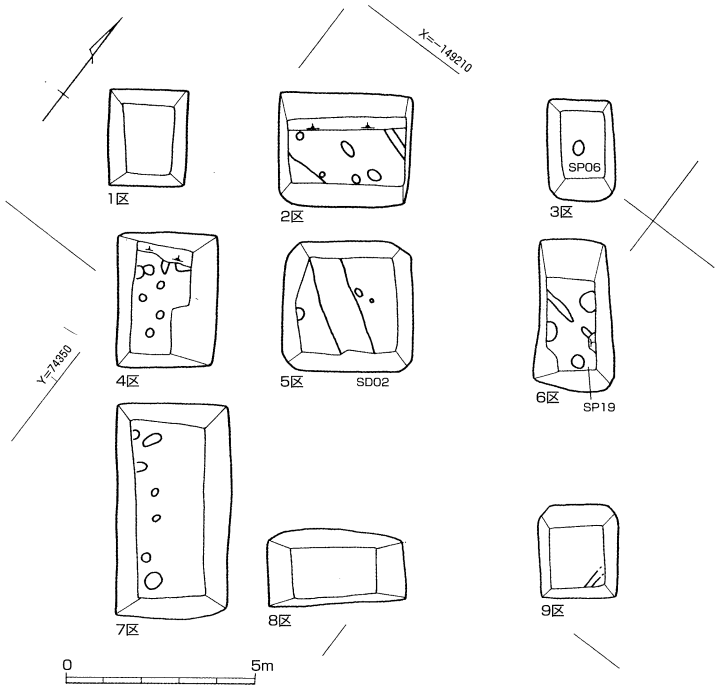


fig.62　遺構平面図

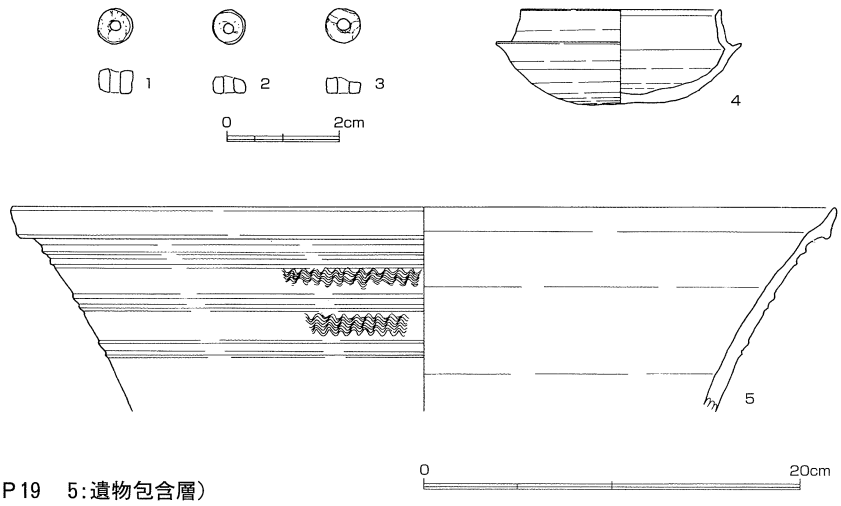


fig.63　出土遺物
（1～4：ＳＰ19　5：遺物包含層）

13. 松野遺跡　第28次調査

1．はじめに

松野遺跡は旧摂津国の西部、雄伴郡（のち八部郡）、六甲山系の南、苅藻川右岸の沖積地に位置する。これまでの27次にわたる発掘調査の結果、縄文時代晩期から近世にいたるまでの遺構・遺物が確認されている。特に昭和56年、道路をはさんで今回の調査地の南に接する地点で行われた第１次調査において、古墳時代後期の豪族居宅と推定される建物遺構が確認され、松野遺跡の名を有名なものにしている。

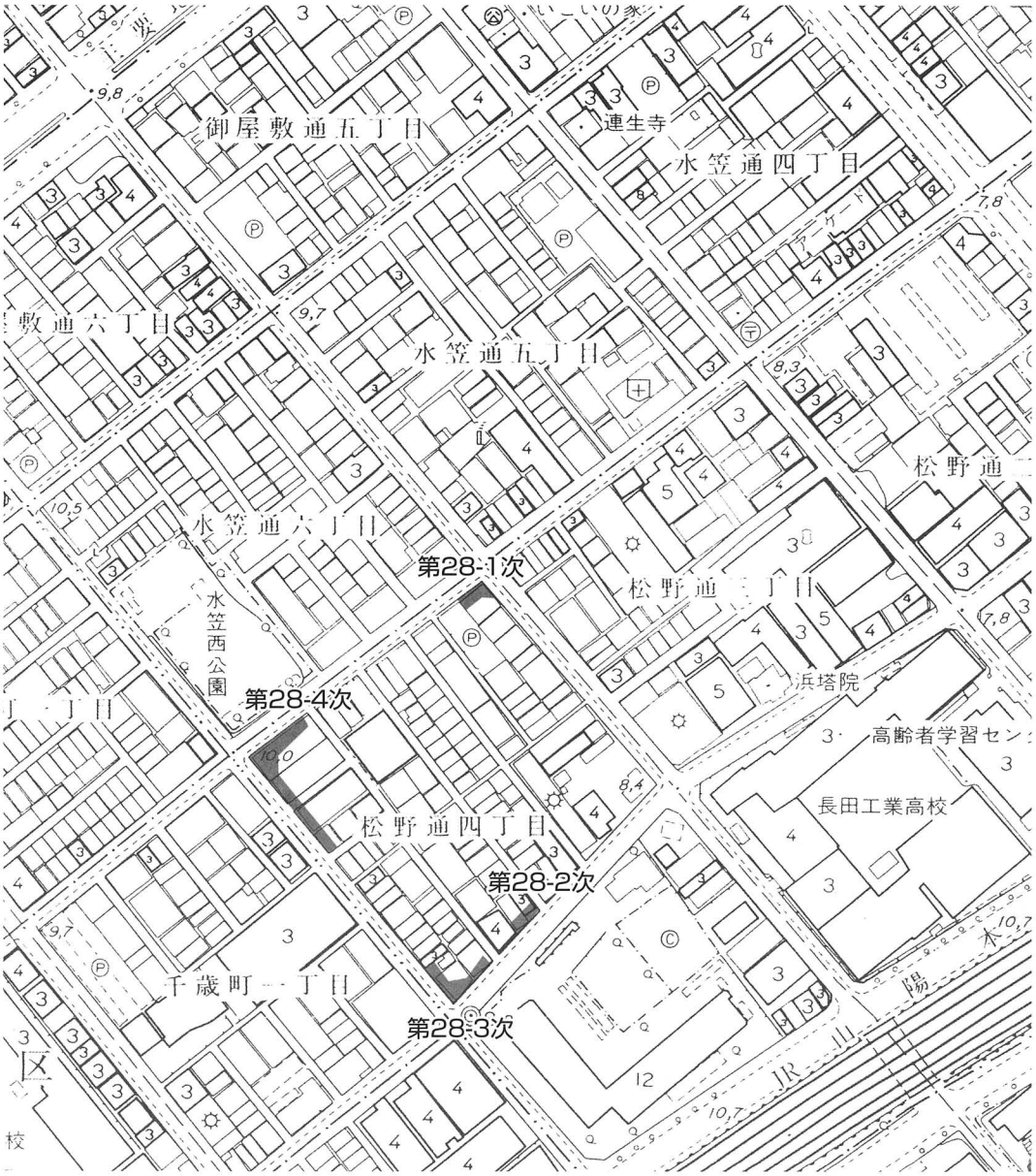


fig.64
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

今回の調査は阪神淡路大震災の復興事業に伴う土地区画整理事業に先立つもので、松野通４丁目の４地点についてこれを行った。調査の結果、１面あるいは２面の遺構面が確認され、第１遺構面では近世の遺構および中世の耕作地が、第２遺構面では古墳時代と弥生時代の遺構が検出された。また第２遺構面のベースとなる洪水砂4c層からは弥生時代と縄文時代晩期の遺物が少量出土した地点がある。

第28-1次調査　松野通４丁目街区の北隅に位置する調査区。既存建物の建設による攪乱を受け、遺構面は約１㎡を残し遺存していない。この１㎡では遺構が確認されなかった。遺物の出土もない。現況地表の標高は9.2m、遺構面の標高8.5mをはかる。

第28-2次調査　層序は現代盛土の下層が３～５層の旧耕土層となっており、その下層に遺物包含層（黒褐色粘砂土＝第28-3・4次調査の4a層）が存在する。この遺物包含層の下層上面が遺構面となる。この遺構面以下については、遺物を包含する層位は確認されなかった。現地表の標高は約9.5m、第２遺構面の標高は8.25mである。

遺構　検出された遺構は、溝（ＳＤ01～03）の他、ピット、落ち込みなどで、いずれも規模としては小さい。出土遺物も少なく、その性格等の詳細は不明である。

遺物　遺物包含層から弥生時代後期～古墳時代後期の土器片が出土しているが、その大半が弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属するものである。遺構内からの出土遺物は量的には少なく、小片であるため詳細は不明であるが、概ね弥生時代後期後半～古墳時代初頭の範疇に入るものと考えられる。

第28-3次調査　調査区は松野通４丁目街区の西辺中ほど、居宅が確認された地点の北側に位置する。

基本層序　２面の遺構面が確認された。それぞれの標高は以下の通りである。

現　地　表（1a層上面）　：約9.2m
第１遺構面（4a層上面）　：約8.6m
第２遺構面（4a層下面）　：約8.5m

第１遺構面　洪水砂である3c層に覆われる遺構面。耕作痕が検出された。

耕作痕　調査区の西の街路方向は真北から西に約39°振るが、これに平行する溝が多数検出された。鋤溝等の耕作痕と考えられ、3c層の出土遺物から中世の畠と推測される。

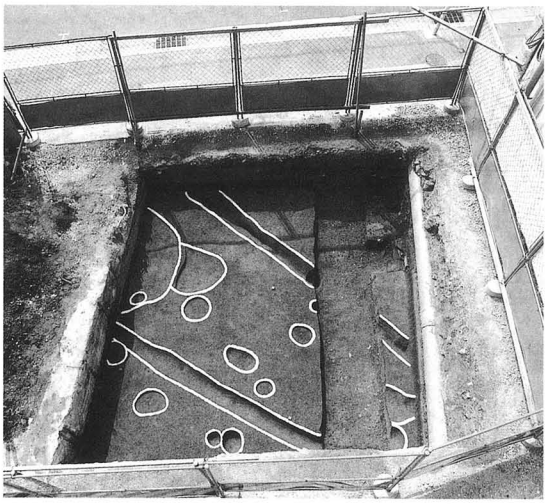


fig.65　第28-2次全景

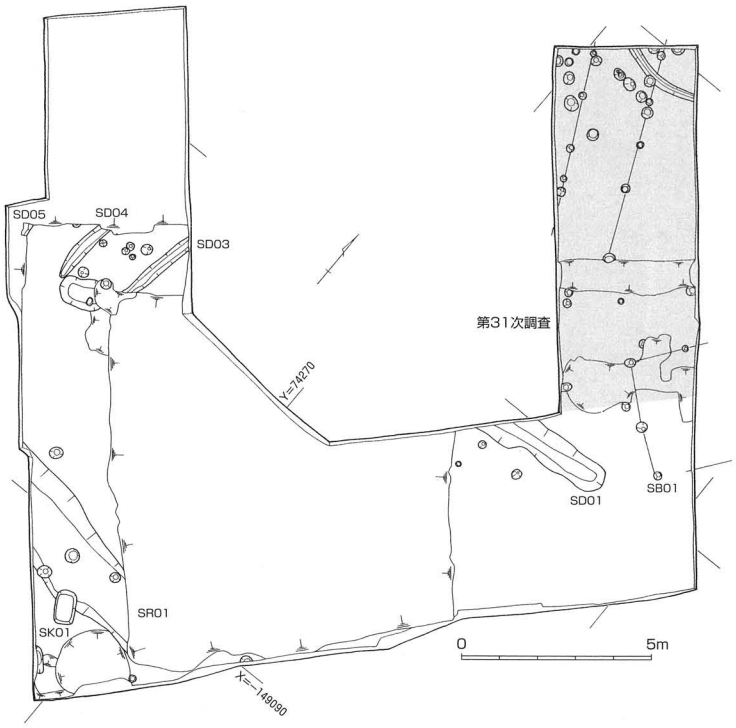


fig.66　第28-3次第２遺構面平面図

第２遺構面　古墳時代後期・前期の遺物を主体に含む４a層下面で検出。古墳時代前期の土器溜まり・土坑・溝・耕作溝・柱穴、弥生時代中期の自然流路、時期不明の掘立柱建物・柱穴等が検出された。

ＳＸ02　調査区南隅付近で検出された土器溜まり。調査地外に範囲が拡がるため、全体の広がりは確認できないが、北西－南東方向で約2.5ｍの範囲に土器が集中して出土した。

ＳＫ01　調査区南隅付近で検出された0.9×0.55ｍのプラン隅円方形を呈する土坑。遺構確認面からの深さは約0.6ｍ。埋土からは少量の古式土師器片が出土したにとどまる。

ＳＤ01　調査区の東半南部で確認された溝状の遺構。幅約1.0ｍ、遺構確認面からの深さ約0.4ｍをはかり、真東から北へ５°振った方向にのびる。埋土から古墳時代初頭の土器が出土している。

ＳＤ03～ＳＤ05　調査区西隅で検出された並行する３本の溝状遺構。真北から10°東へ振った方向にのびる。幅0.3～0.4ｍ、溝の横断面は皿形で遺構確認面からの深さ約0.05ｍをはかる。ＳＤ03・04間で約1.4ｍ、ＳＤ04・05間で約1.2ｍの間隔がある。同様の遺構は同じ長田区の御蔵遺跡第31次調査などでも確認されており、耕作に関わる遺構と推測される。

柱穴　並行して行われた第31次調査の分と合わせ、60基程の柱穴が検出されている。そのうちＳＢ01と第31次調査分にある杭列ＳＡ01・02を遺構としてのまとまりとして把握できた。出土した遺物は古墳時代前期のものと後期のものがあり、少なくとも２時期の遺構があると思われるが、埋土はともに４a層に近い黒褐色土で区別できない。

ＳＢ01　調査区東隅で検出された南北２間・東西１間以上の掘立柱建物。真北から西へ53°振った方向に主軸方向をとる。その東が調査区の外にのびるため東西の規模については確定できない。出土遺物は土器の小片のみで、この建物の帰属する時期は確定できない。

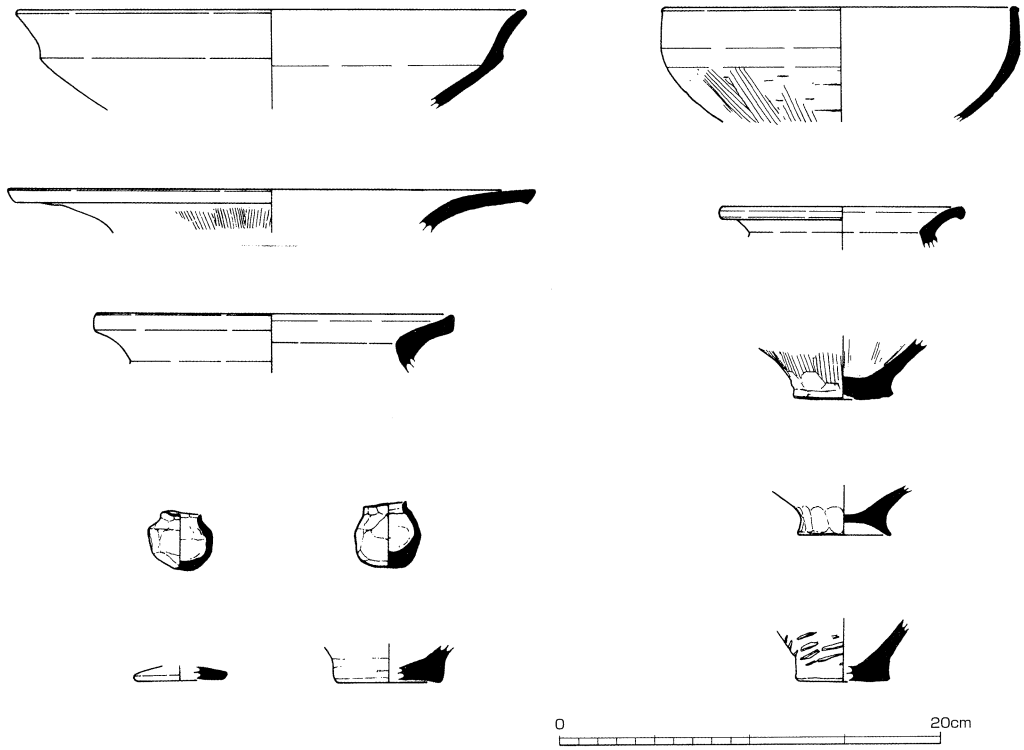


fig.67　第28-3次出土遺物

ＳＲ01　調査区西隅で検出された溝あるいは自然流路と考えられる遺構。東西方向にのび、幅約1.9m、遺構確認面からの深さ約0.2mをはかる。埋土から少量の弥生土器片とともにミニチュアの壺形土器２個が出土している。

第28-4次調査　調査区は松野通４丁目街区の西隅に位置する。

基本層序　２枚の遺構面が確認された。それぞれの標高は以下の通りである。

現　地　表（1a層上面）　：約9.6～9.9m
第１遺構面（4a層上面）　：約9.1～9.2m
第２遺構面（4a層下面）　：約9.0～9.2m

第１遺構面　中世までの土器・陶磁器類などを含む洪水砂層3c層に覆われる遺構面。明初の中国銭「洪武通宝」がこの面の検出時に出土し、溝・耕作痕・牛蹄跡などの遺構が検出された。近世以降の井戸あるいは水溜め状の遺構であるＳＫ02は3c層の上から掘り込まれる。

調査区北半はベースとなる4a層が削平されて存在せず、第１遺構面・第２遺構面が同一面で検出される。

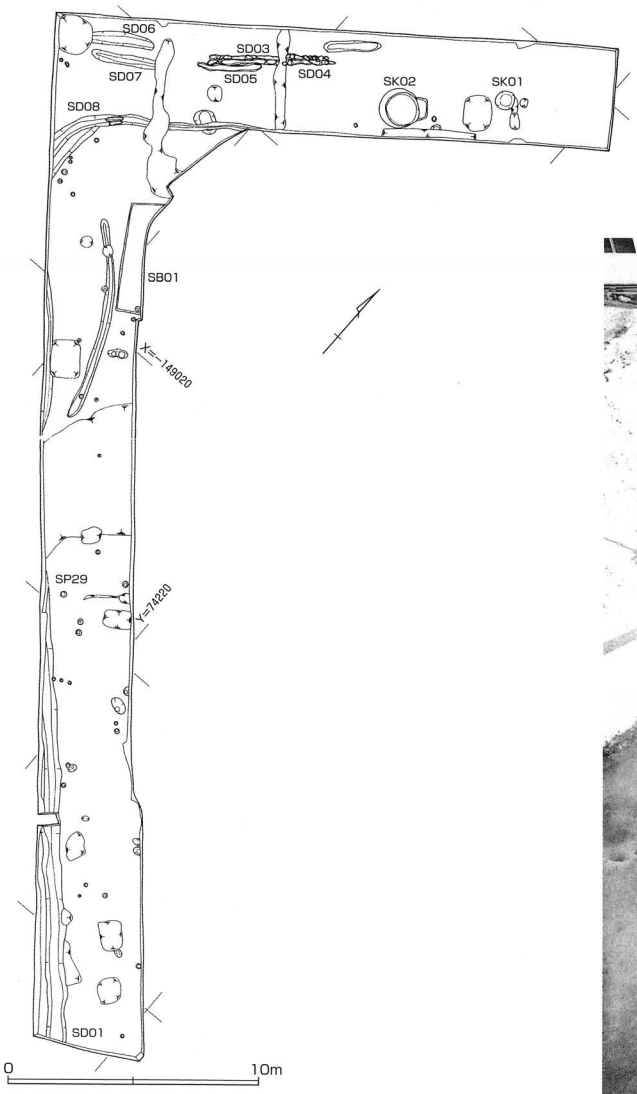


fig.68　第28-4次第２遺構面平面図

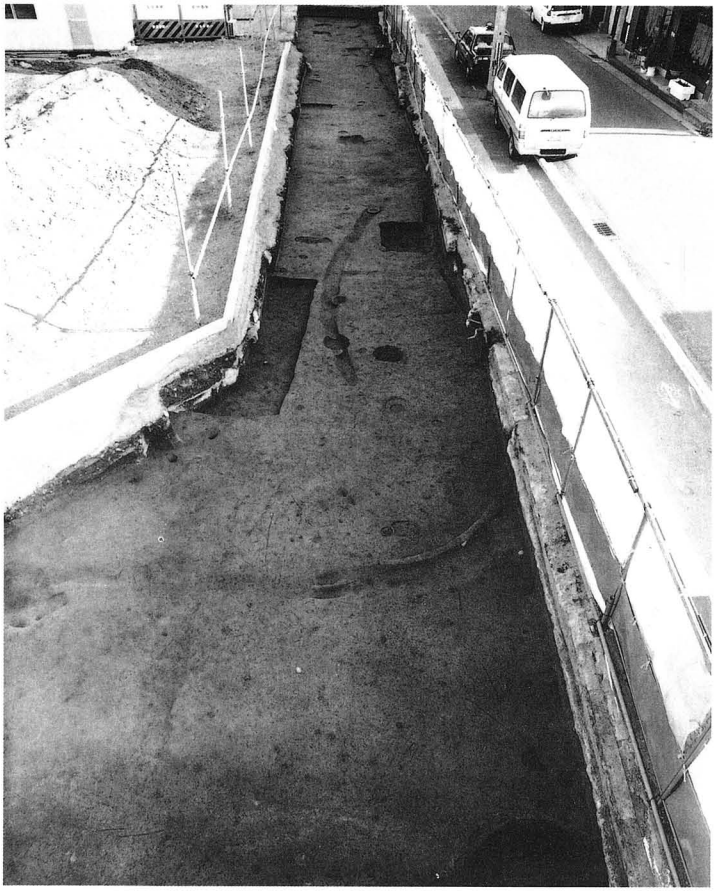


fig.69　第28-4次第２遺構面

ＳＫ02　調査区北部で検出された直径1.3ｍのプラン円形の枠が据えられた井戸あるいは水溜め状の遺構。枠板自体は抜かれて残らないが、これを締めたタガ２条が遺存していた。遺構確認面からの深さ約0.5ｍをはかる。掘形の直径は1.6ｍで、北西側に方形に張り出す部分がある。掘形の埋土から近世の陶磁器片が須恵器片とともに出土している。

溝　ＳＤ01は調査区の南部で検出された幅約0.7ｍ、遺構確認面からの深さ約0.15ｍを測る溝で、真北から43°西に振った方向へ直線的にのびる。埋土である洪水砂からは中世までの遺物が出土したが、細片がほとんどであり時期の特定は困難である。

ＳＤ01にほぼ直交する方向に並行してのびる溝であるＳＤ02～07には底面に偶蹄目、おそらく牛の蹄跡が密集している。特に遺構面の土が粘土である部分での残りが良く、溝周辺にも蹄跡が集中して確認された。

ＳＤ08はＳＤ02～07と２ｍほどの間隔をおいてそれらに並行する溝で調査区の西端付近で南方向に屈曲する。ＳＤ09はＳＤ08に切られる溝状遺構で、ほぼ同様の方向にのび、埋土も同質である。ＳＤ08の掘りなおしがＳＤ09であると推測される。

これらの溝は現況の地割りとほぼ一致しており、条里の区画に関係する遺構であると推測される。

耕作痕　4a層の残る部分で確認できた鋤溝状の溝。ＳＤ01に平行する。

第２遺構面　調査区の南部では4a層が残り、この下面で検出される。北部は4a層が削平され、第１遺構面と同一面で検出される。この面で確認される遺構は、古墳時代後期のものと古墳時代前期のものがあるが、ともに埋土は4a層の暗褐色シルト交じり粘土を基調とするもので両者の弁別はできない。竪穴住居・土坑・溝等の遺構が検出された。

ＳＢ01　調査区北寄りで検出されたプラン方形の遺構。真北から西へ33°振った方向に主軸をもち、南西辺の長さ4.4ｍ、遺構確認面からの深さ約0.2ｍをはかる。遺構の一部、南西部を確認しただけで柱穴等も確認できていないが、プラン・構造等から竪穴住居であると推定した。掘形内に0.1ｍほど粘土を貼り、床面を整形しているが、これが貼床であるのかベッド状遺構になるのかは判断できない。

埋土からは少量の土器片が出土しただけで、時期の判断に苦しむが、遺構検出面で須恵器片が出土しており、古墳時代後期の遺構である可能性が高い。貼床内からの出土遺物は土器小片がごく少量であり、時期の判断には耐えない。

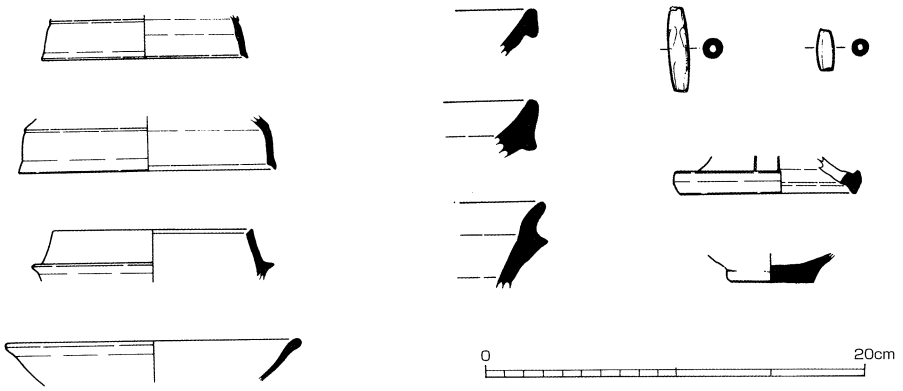


fig.70　第28-4次出土遺物

ＳＤ10　ＳＢ01の南西側にある弧状の溝。長さ約8.0ｍ、幅約0.4ｍ、遺構確認面からの深さ0.1ｍ程度を測る。遺物の出土はなく、時期も判断できない。

柱穴　30基以上を確認したが、掘立柱建物等として把握できるものはなかった。出土遺物から古墳時代後期のものと古墳時代前期のもののあることが確認できる。

3．まとめ

第２遺構面は弥生時代中期・弥生時代後期後半～古墳時代初頭・古墳時代後期の遺物・遺構が確認できるが、遺構埋土からは三者を弁別できない。先述のとおり対応する遺物包含層から出土する遺物のうち主体となるのは弥生時代後期後半～古墳時代初頭のもので、時期の判断できる遺構もこの時期のものが多い。

今回報告した調査地は柵で囲われた６世紀初頭頃の居宅と推定されている建物群が検出された第１次調査（1981年度）地の北側に位置する。居宅との関連で注目される古墳時代後期の遺構・遺物についてみると、居宅にすぐ隣接する第28-2・3次調査地点の遺物包含層から出土した遺物は須恵器片が少量のみとごく少ない。

ただし、第28-3次調査と同時に発掘の行われた第31次調査地点には、第１次調査で検出された柱列＝柵ないし塀にほぼ平行する柱列ＳＡ01・ＳＡ02が存在する。時代判定に耐える遺物の出土がなく、埋土からの判別もできず、規模等も１次調査で確認されているものと比較にならない点など不安はあるが、この周辺では、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての遺構、特に溝等は方位方向にほぼ合致するものが多いという傾向がありそうで、これと異なる方向であり、居宅関連の遺構とこの柱列の方向が一致することは、特に居宅の区画ということを考えた場合、注目される遺構となるだろう。

震災復興に伴うこれまでの発掘調査で、松野遺跡について判明してきた部分がある。一つは居宅と南の集落の標高には差があり、わずかとはいえ居宅は一段高い立地を占めているということである。そしてもう一つは遺物包含層のかなり削平されている状況が判明しているものの、居宅の南には当該期の集落が存在するのに対し、その隣接地および北側には当該期の遺構は皆無といってよいほど存在しないという状況である。

一般の集落構成員が山の手に顔を向ければ一段高いところに首長の居宅があり、逆に居宅から村の衆の暮らしを見渡せるという立地は集落の中心となる首長の居宅という性格からすれば当然のことであろう。

また居宅にごく隣接して一般の集落が立地することも考えにくいことで、その周囲に遺構の空白地帯があるのも当然のことだろう。ある程度の遺構空白地帯をおいてその外側に同時期の集落の存在する可能性が考えられる。第28-4次調査で確認された竪穴住居がそうであれば、ここまでが遺構の空白地帯で、居宅からみてその外側に集落の存在が予想できるかもしれない。

試掘調査などの結果により、今回の調査地の北側は２街区離れ北側にある戎町遺跡との間の遺跡空白地区としてこれまで推定されていた。しかし、今回の調査地ではその北部で竪穴住居が確認されており、その埋土も4a層と共通するものであるにもかかわらず、遺物包含層である4a層はほとんど遺存していない状況、すなわち遺物包含層の削平のあったことが明らかになった。遺跡範囲が北に広がり、北の戎町遺跡と接する可能性も考慮されるだろう。

14. 松野遺跡　第32次調査

1．はじめに

区画街路築造工事に先立ち埋蔵文化財の調査を実施した。南側の区画街路予定地は当初幅６ｍ、総延長29ｍのＬ字形で調査を実施する予定であったが、北側の幅６ｍ、長さ約９ｍ、東側の長さ約７ｍについては地下鉄工事の際に掘削が行われ既に消滅しているため街路の南西隅55㎡について調査を実施した。（第32-1次調査）北側の調査地は幅６ｍ、長さ30ｍである。（第32-2次調査）

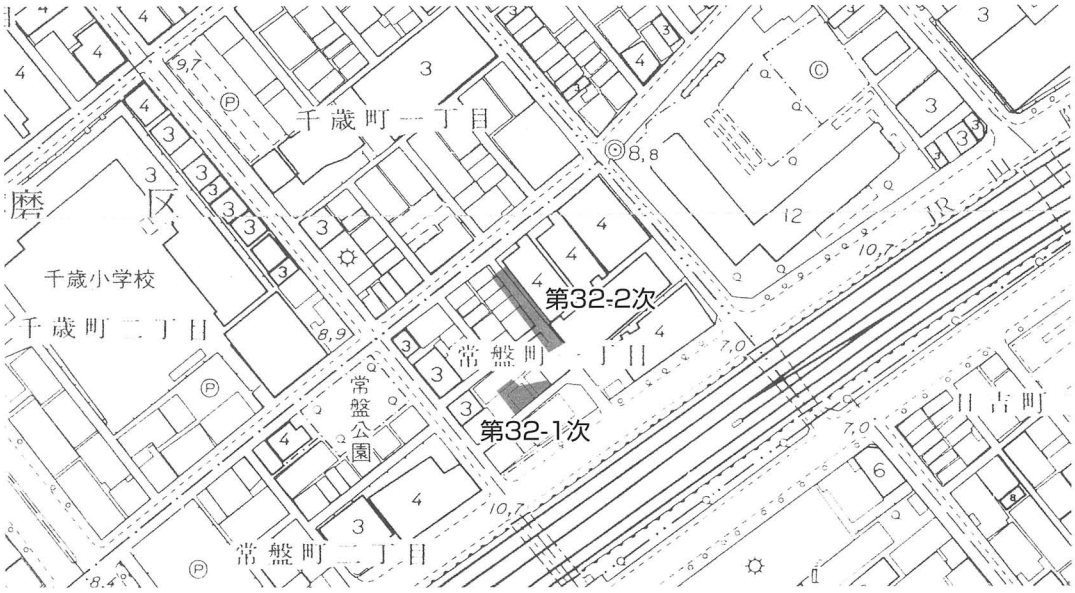


fig.71
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

第32-1次調査

層序は、大別して上層より盛土、旧耕土、古墳時代後期の遺物包含層である暗灰褐色砂質シルト・黒褐色シルト、そして遺構面である暗灰黄色砂質シルトとなる。現地表面から約1.1ｍで検出された遺構面である。溝３条、ピット、土坑が確認された。

溝

ＳＤ01は、幅約3.0ｍ、深さ約0.8ｍを測り、溝の基底は平らで、断面形状は逆台形を呈している。溝埋土の下層は、黒灰色系のシルトが堆積していて、水が流れる際澱んでいたことが判る。上層の埋土は周辺の土が徐々に流入し堆積して埋まったことが断面観察で判る。なお、この上層の埋土から弥生時代後期頃の土器が少量出土している。

ＳＤ02は、ＳＤ01と並行に流れ、幅約1.8ｍ、深さ約0.65ｍを測る。溝の断面形状はＵ字形を呈している。ＳＤ03は、幅約0.3ｍ、深さ約0.1ｍを測る。ＳＤ02・03ともに遺物は出土していない。

ピット

約0.2ｍのピットを数基検出した。ＳＤ01が埋まった後掘られたものと考えられる。

下層

この遺構面の下層に黒灰色砂混じりシルトが堆積しているため、遺物・遺構の検出を試みたが、確認できなかった。

第32-2次調査

基本層序

層序は第32-1次調査同様、大別して上層より盛土、旧耕土、古墳時代後期の遺物包含層である黒褐色シルト、そして遺構面である暗灰黄色砂質シルトとなる。

遺構

現地表面から遺構面までの深さは、調査区北側で約0.8ｍ、南側で約1.0ｍである。溝２条、ピット、土坑が確認された。

ＳＤ04

調査区の南側を南北方向に流れる溝である。第32-1次調査で検出したＳＤ01の続きと考

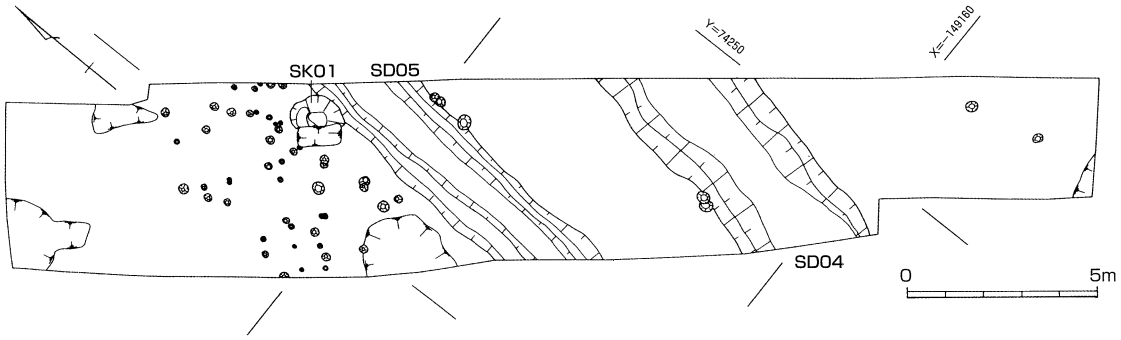


fig.72　第32-2次遺構平面図

えられ、幅3.0～3.2m、深さ約0.8mを測る。溝の基底はＳＤ01同様平らで、断面形状は逆台形を呈している。この溝の上層から弥生時代中期頃の土器が少量出土している。

ＳＤ05　第32-1次調査で検出したＳＤ02の続きと考えられ、ＳＤ05と並行に南北方向に流れている。幅0.9～1.0m、深さ約0.5mを測る。溝の基底は平らで、断面形状は逆台形に近い形をしている。溝内からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ01　調査区の中央北寄りで検出された土坑である。最大幅約1.45m、深さ約0.4mを測る。土坑内からの遺物の出土はなかった。ＳＤ05を切っていることから後出である。

ピット　ＳＤ05の北側で0.15～0.3m程のピットを無数検出した。ピットは散在しているため建物としてのまとまりはない。遺物の出土はないが、一部これらの溝の上面で確認したピットもあるため溝が埋まった後掘られたものと考えられる。

下層　第32-1次同様遺構面の下層に黒灰色砂混じりシルトが堆積しているため、遺物・遺構の検出を試みたが、確認できなかった。

3．まとめ

今回の調査地は松野遺跡の南西辺にあたり、近隣では過去に調査が行われていない区域である。昭和56年に松野遺跡第１次調査で古墳時代後期の豪族居館と推定される建物を確認した地点より西に60m離れた場所である。

調査で検出した溝は、２条の溝が並行して掘られていることが判った。そして、これらの溝は方位の方向と一致していることも注目される。ＳＤ01・ＳＤ04から少量であるが、弥生時代中期と後期の土器が出土している。出土量が極めて少ないことと後世の混入も考えられるが、出土状況からしてこの２条の溝は弥生時代中期～後期にかけて同時に掘削され埋没したと考えたい。

今回同一面で溝とピット・土坑等を検出しているが、ピット・土坑・小溝は２条の溝が埋没した後に掘られたことが考えられる。遺構からの遺物の出土がなく時期の決め手に欠けるが、遺物包含層の時期が古墳時代後期の土器を含んでいることから、これらの遺構は古墳時代後期頃のものと推察される。

周辺の調査で弥生時代の遺構を確認しているが、散発的で実態がよく判っていない。今回の調査で２条の大溝を検出したことにより、この溝の続きを検出することによって今後松野遺跡の弥生時代の様相が明らかになってくると考えられる。

15. 二葉町遺跡　第15次調査

1. はじめに

二葉町遺跡は長田区の南西部、苅藻川と妙法寺川に挟まれた沖積微高地上に位置する集落遺跡である。過去の周辺での調査において、縄文時代～近世の遺構、遺物が確認されており、特に中世に関しては、多大な成果を挙げている。

今回の調査は再開発ビル建設工事に伴うもので、中世～近世の遺構、縄文時代晩期～近世の遺物が確認された。

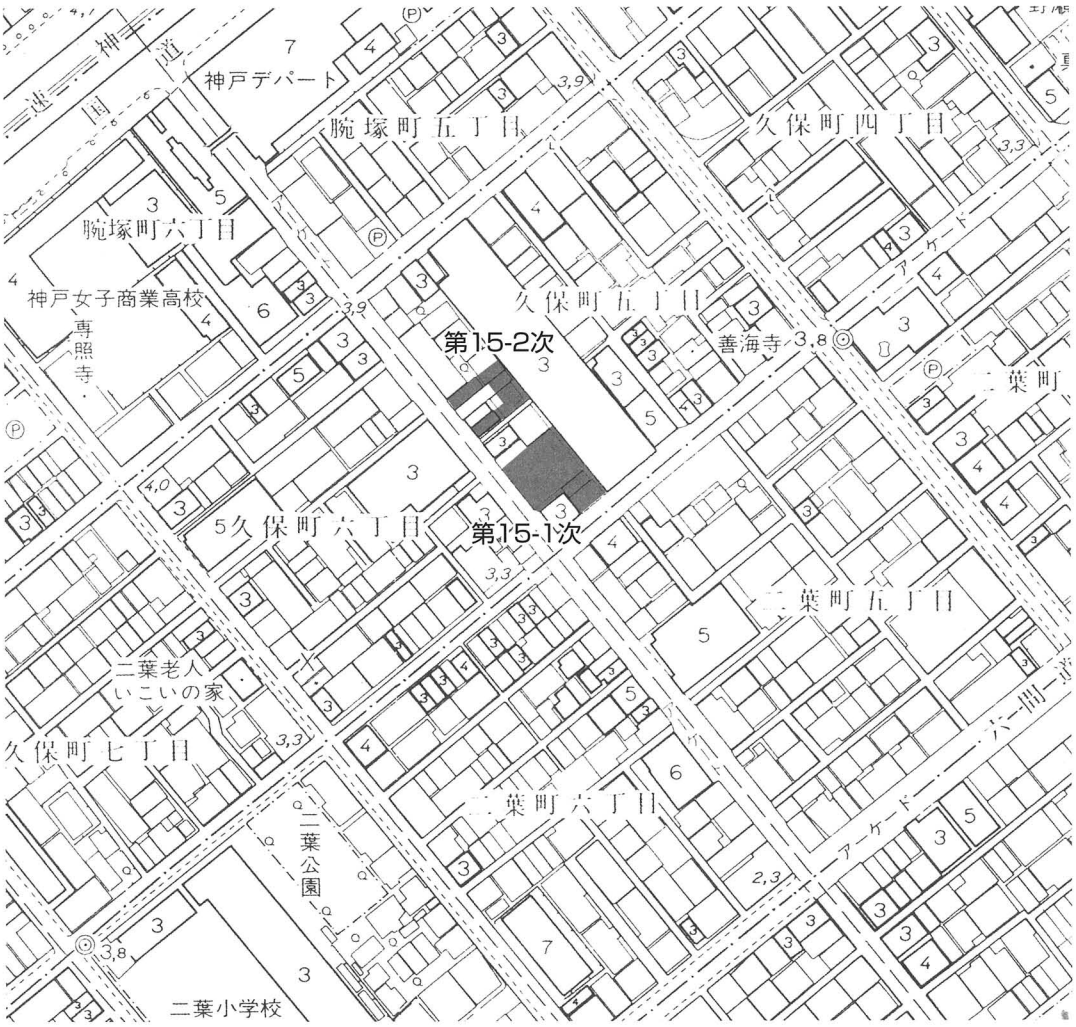


fig.73
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

第15-1次調査

基本層序

上層より現代盛土、2～3層の旧耕土層、遺物包含層の順で、遺物包含層の下層上面が遺構面となる。遺物包含層は地区によって若干の土質の差がみられるが、概ね暗褐色の砂質系の土層である。遺構面のベースを形成している層位は、砂層、砂質土層または砂質系のシルト層である。遺構面までの深度は、北西から南東に向けてやや下り傾斜になっている。

遺構面の下層の状況については、砂層または砂質土層中より縄文時代晩期～弥生時代前期に属すると考えられる土器片とサヌカイトの剥片が数点出土した。しかしながら、遺構面になりうる層位面も確認できず、また、砂質土層自体も遺構埋土とは考え難いため、洪水砂状の堆積層中にこれらの遺物が含まれるものと思慮される。

遺構　近世末葉と考えられるＳＸ01の他は、中世の範疇に入る遺構と考えられる。木棺墓（ＳＴ01)、井戸（ＳＥ01)、溝（ＳＤ01～05)、ピットなどの遺構が検出されたが、東側または南側へ行くほど希薄になる。

遺物はＳＥ01の埋土内から出土したものが多く、その他の遺構や遺物包含層のものは少ない。遺物包含層からの出土遺物は11世紀後半～13世紀前半に属すると考えられるが、検出遺構もＳＸ01以外は概ねこの時期に該当するものと推定される。

ＳＸ01　東西約6.0ｍ、南北約6.5ｍ、深さ約5.5ｍを測る掘形をもつ井戸で、中位以下に桶を４段分積み重ねた井戸側が遺存していた。出土遺物は極めて少なく、陶磁器片が数点とカツラを使用した漆器椀が１点出土したのみである。近世末期の所産と考えられる。

ＳＴ01　長辺約2.7ｍ、短辺約0.8ｍを測る掘形をもつ木棺墓で、木棺は腐食により遺存しないが、土層の違いからその痕跡を確認した。また、深さが検出面より約0.1ｍと非常に浅く、上位部分が著しく削平されているようである。出土遺物は棺内、掘形共に少なく、詳細な時期比定は難しいが、11世紀後半～13世紀前半の範囲内に属する可能性が高い。

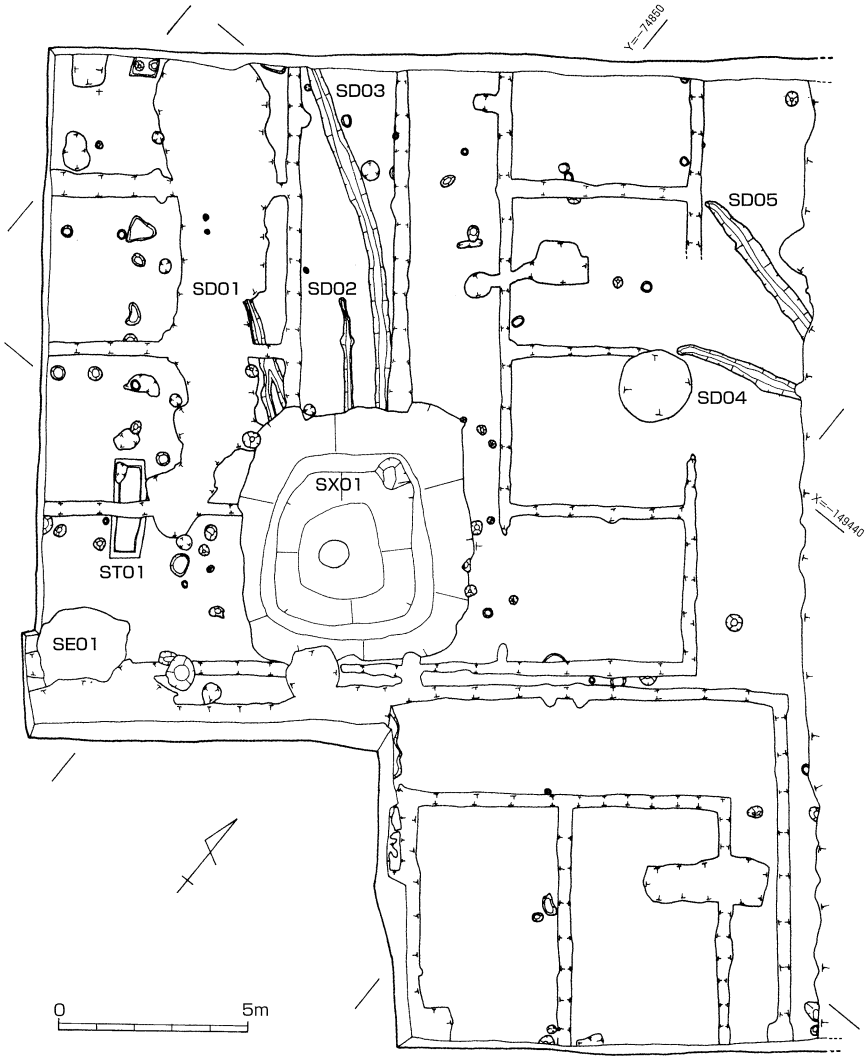


fig.74　第15-1次遺構平面図

ＳＤ01～ＳＤ05　幅約0.15～0.5ｍ、深さ約0.1～0.15ｍを測る小規模な溝で、攪乱や他の遺構によって大きく削りとられており、また、出土遺物も少なく、ＳＤ03で12世紀中頃に属すると考えられる須恵器片が１点確認された以外は、いずれも時期不詳の土師器、須恵器の小片であることから、それぞれの溝の性格等の検討は困難である。

ＳＰ01　ＳＤ03の東側で検出された直径、深さ共に0.15ｍ程度の小規模なピットである。11世紀後半頃に属すると考えられる“ての字状口縁”の土師器小皿が１点出土した。

ＳＥ01　一辺約2.5ｍの隅丸方形状の掘形をもち、井戸側が縦板組隅柱横桟留構造に分類される井戸である。井戸底の水溜部分は曲物を３段組み上げており、検出面から水溜底までの深さは約4.4ｍを測る。井戸側部分の平面形は一辺約１ｍのほぼ正方形で、横桟は約0.7ｍの間隔で４段分遺存していた。この井戸の特徴的な点として、四隅の隅柱の下に柱を固定するための偏平な根石を据えていること、中位以下は掘形と井戸側との隙間がほとんどない点などが挙げられる。出土遺物は他の遺構と比較してやや多く、完形に近い土器も数点みられる。器種としては、土師器・須恵器の皿、椀類が多く、少量ではあるが瓦器や白磁なども確認されている。その他、墨書土器や曲物桶などの木質遺物、砥石などもあわせて出土している。遺物の時期は、上層出土のもの、下層出土のもの共に12世紀中葉～後半に属するものと考えられる。

樹種同定の結果を概して記しておく。ほとんどの構成部材は複数の針葉樹材が用いられており、広葉樹材はごく一部の部材のみに用いられていた。過去の同遺跡における調査で検出された平安時代末葉～中世にかけての井戸は、部材に針葉樹材を多く用いる傾向があるようだが、井戸ごとに優占使用される樹種は異なるようである。今回の調査で検出されたＳＥ01については、側材と板材はヒノキ、モミ属、スギ、割材はヒノキ、モミ属、横桟はヒノキ、スギが多く用いられており、隅柱はヒノキ、アカマツ、ツブラジイが用いられていた。また、水溜部分の曲物はヒノキであった。

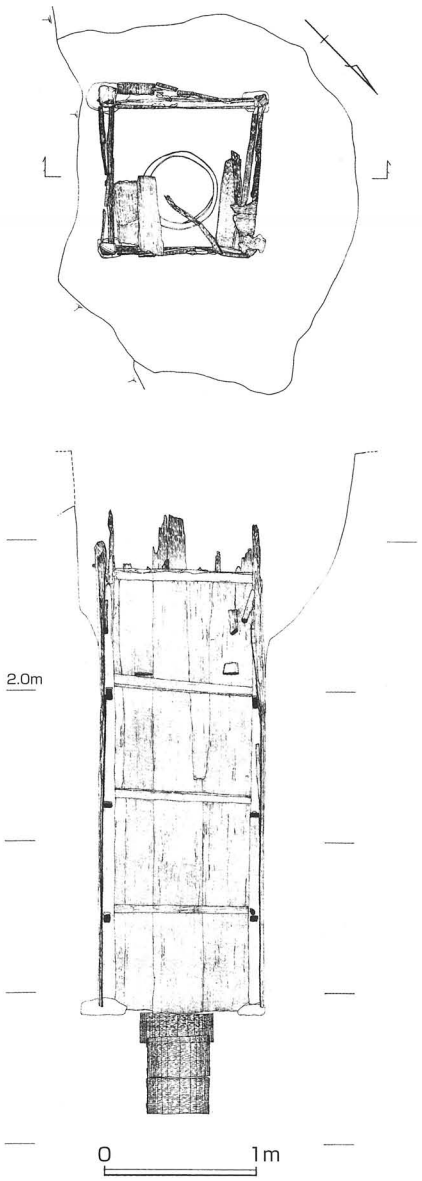


fig.75　ＳＥ01

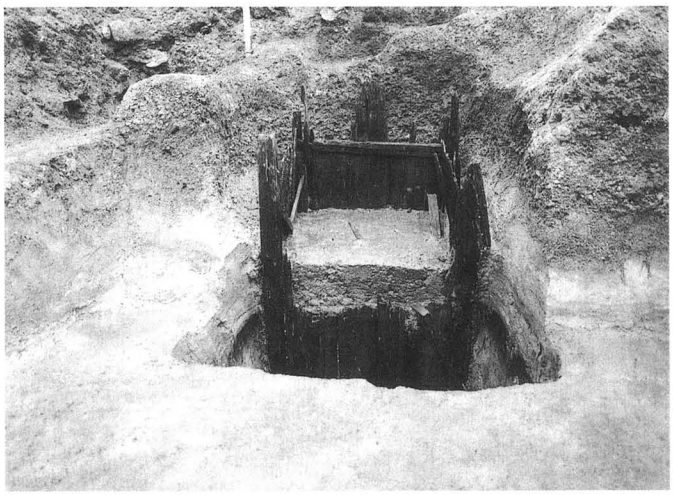


fig.76　ＳＥ01

小結　今回の調査で検出された遺構は、概ね11世紀後半～13世紀前半の範囲内に属すると考えられるが、遺構埋土内からの出土遺物が少なく、時期を確定できたものはほとんどなかった。過去の調査成果から、平安時代後期～鎌倉時代前期の集落変遷を、遺構の配列などからⅠ期（11世紀中頃～12世紀前半）、Ⅱ期（12世紀中頃～12世紀後半）、Ⅲ期（13世紀前半～13世紀中頃）の３時期に区分しているが、今回の検出遺構もＳＸ01以外はいずれかの時期に該当するものと考えられ、同時期の集落の一端と担う遺構であると断定できる。

過去の調査成果から中世当時の集落の特色として、井戸の多さが挙げられるが、今回の調査で検出されたＳＥ01は、その中でも最大規模に近いもので、出土遺物も他の遺構に比べて豊富で、一括性も高いため、良好な成果であると言えよう。このＳＥ01の最下層からの出土遺物は、先述と同様に12世紀中葉～後半に属すると考えられるが、出土土器の型式に時期差（12世紀中葉と後半）がみられることから、この井戸の存在（使用）時期（期間）を示している可能性をここでは消極的ながら指摘しておきたい。

今回の調査においては、検出遺構が比較的少なかったものの、集落の拡がりを確認できた点、比較的遺存の良好な井戸（ＳＥ01）が検出された点などから同遺跡の全容を解明していく上で重要な資料が得られたように思われる。

第15-2次調査　久保町５丁目における平成13年度第２回の発掘調査は、約500㎡について行われた。

今回の調査の結果、現在の地表面から約0.8ｍ、標高約3.70ｍ付近まで掘り下げた地点に遺構が存在することを確認した。遺構は、異なる３つの時期のものが、それぞれ異なる堆積層の上に残されたものである。

基本層序　調査区内には、現在の地表面から遺構の造られた層までの間に、現代の盛土、耕作土等が何層か時間順に堆積しており、耕作土の最も古い層（より下層）は、中世の時期まで遡るものと判明した。その耕作土のさらに下層が、地山層となる。

調査区内は、部分的に現代の建物の基礎工事によって上部の層が壊されており、基礎のコンクリートを取り除いたところ、すぐに考古学的堆積層が現れる部分もあった。遺構は、基本的に古い時期のものが下の層、新しい時期のものは上の層に重なり合っている状態で、

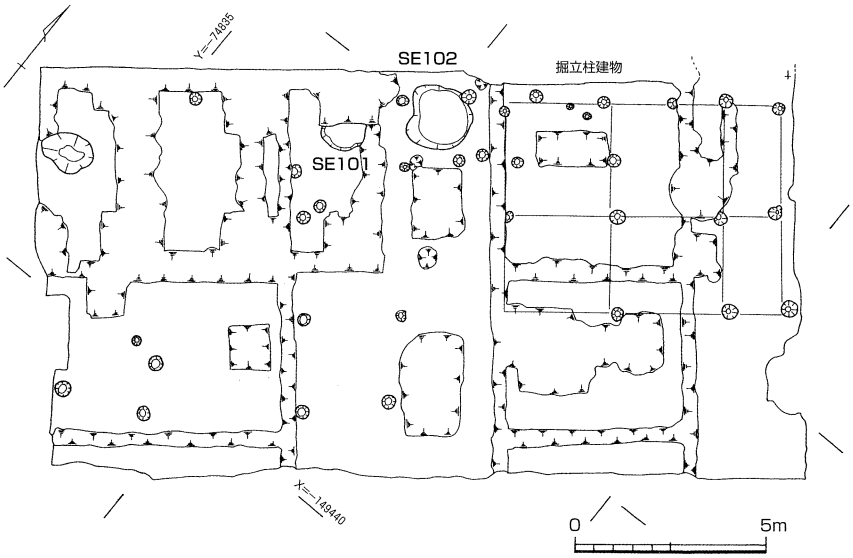


fig.77　第15-2次第１遺構面平面図

調査範囲の東側に集中して確認された。最も古い遺構は縄文時代晩期（約2,300年前）の小河川状の自然地形の痕跡である。その上位の層に13世紀（中世）頃のものである可能性が高いピット（小さな穴）、溝などが残されており、さらにその上に堆積していた層上には、今回確認した遺構の中で、最も新しい時期のものである掘立柱建物らしいピットの規則的な配列を確認した。

調査区の北東部分は、今回の調査区の中で最も基本的な層序が観察できる場所である。この場所で現在地表面となっているのは、現代の盛土である（第１層）。その下層には現代～近代の比較的新しい時期の耕作土層が、２層堆積している（第２・第３層）。それら新しい時期の耕作土を取り除き、標高約3.80ｍ地点まで掘り下げると、中世の土器を多く出土する耕作土層が現れる。出土する土器から判断して、この層は中世の耕作土層であると考えられる。最も新しい時期の遺構は、この層の上面で確認された（第４層）。この層を取り除くと、標高3.7ｍ地点で地山の層が現れるが、この地山層（第５層）上に、第２の時期の遺構が残されていた。

北東部分の層序に対して、南東部分では、現代の建物の基礎が広い範囲で地山を削って深く造られ、遺跡の損傷が著しかった。部分的に基礎が浅く、本来の堆積層が残った部分については、基礎を取り除いた標高3.5ｍ地点で、粗砂層が現れる。

この粗砂層については、観察作業の結果、上記の北東部分の層序でいう第５層（地山層）を削るようにして堆積していることが判明したが、これはすなわち第５層より新しい時期に堆積したことを示すものである。このような粗砂層は、過去に行われた周辺の調査でも広い範囲でその存在が確認されており、その堆積の時期も縄文後期であることが、既済の調査の結果知られている（第６層）。この粗砂層上には、第３の時期、縄文時代晩期のものと思われる小河川状の地形と、それより新しい時期の遺構が互いに重なり合うような状態で残っているのを確認した。これは、本来二つの上下に重なった層の各上面に、時間差をもって築かれたものが、上の層が現代の工事によって失われたため、上位の遺構の深い部分が残り、より下層の遺構と同じ面上で重なり合うように残って見えたものと考えられる。

検出遺構

今回確認した遺構については、そのほとんどが調査区の北東、南東部分で見つかっている。それに対し、調査区西部分では、遺構はほとんど発見されなかった。西の層序は、北東の層序に類似しているが、北東部分よりも近代～現代の耕作土層がさらに２層多く残っており（第７・第８層）、また北東部で第１の遺構が造られているのが確認された第４層と地山の第５層の間に、中世の土器を出土する耕作土層が残っていた（第９層）。

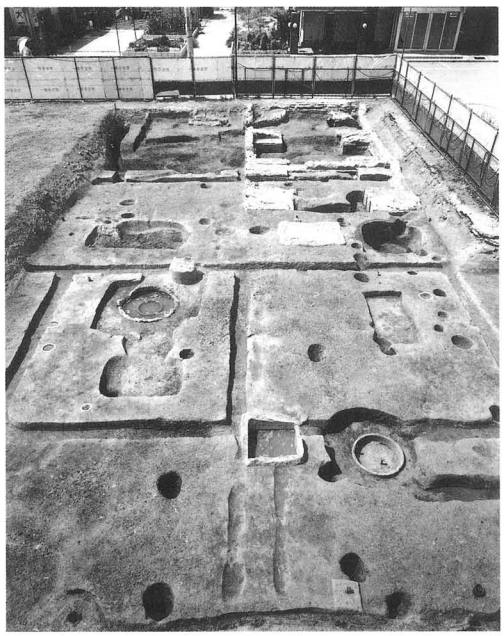


fig.78　第15-2次第１遺構面全景